慾、勢ひより起る驕傲等の苦き流は、皆な此惡しき泉より湧き出で、怒り、惡み、怨恨、復讐、嫉妬、惡計等も之より起こり、今は多くの悲をもて汝の心をつん裂くところの凡て愚かにして、有害なる慾情も皆な之より發せしなり。若し時至らざる中に改めずば、終に汝の靈を永遠の滅亡に引き入れて臍を嚙むとも及ぶなきに至らん。

此の如き枝に如何なる果實の生ずべきや、何時までも苦くして澁き惡果のみならん。高慢より、爭鬪を生じ、虛しきほこり又は人の譽を追ひ求めて、冒すべからざる神の榮を奪ふ等の事生じ、肉体の慾より醉酒、放蕩、淫行、不潔等を以て聖靈の宮殿たる肉体を汚がすが如き行生じ、不信仰よりすべての惡しき言行を發し。若し汝が至高者を怒らせイスラエルの聖者を憂へしめたる愚なる言葉と、汝が爲せる惡業、或は神の榮とならざる如き行等とを、すべて數へたらんには、到底時の盡すべきにあらず、何となれば、汝の現實の罪は言葉に盡せぬ程多く、汝の頭の髮の

數より多ければなり。誰か濱の砂子雨滴なりとも汝の罪惡を數へ得るものぞ。

汝は「罪の價は死なる」を知らざるか。其死は此世のみならずして永遠のものなるぞ。「罪を犯すところの靈は死すべし」、そはエホバ斯く言ひ給へたればなり。是れ卽ち第二の死にして限りなき死、エホバの前と其權威の榮光とより遠へに隔離せらるゝ所の亡びを以て罰せらるべき宣告なり。爾は罪人はすべて「地獄の火に干かるべき」を知らざるか。爾は罪を以て永遠に死すべきものなり、爾の內心、及び外に現はれし、惡業を以て此應報を受くるは實に相當の事なり。其宣告の今實行せらるべきは實に相當の事なり。爾は之を悟るか、之を感ずるか。爾は能く心に、爾は神の怒と其限なき義罰を受くべき相當の者なりと悟るか。若し神にして今地球に其口を開いて爾を呑めと命じ、爾を坑卽ち永遠に消ゑざる火に行かしむるとするも、神に於て相當ならずと思ふか。若し爾神に由りて、誠に悔改むるに至らば、此等の事は斯くあるべき筈なれども爾が亡ぼされて、地上より掃蕩し去られざるは、單に其恩

惠に由ることを深く感ずるに至らん。

神の怒を和ぎ、汝のすべての罪を贖ひ、爾が當さに相當する刑罰を免れんが爲めに、爾は何を爲さんとする乎、嗟吁、爾は如何にしても一つの惡業、惡言、惡念に對して神に償ふべき方法なし。若し今爾心を改めて、能くすべての事を爲し得るとするも、今より心を轉じて神に歸り、完く缺なく其聖旨に從順なるを得るとするも、之を以て到底過去の罪惡を償ふ能はざるべし。爾の負債を增さゞる事は返却の義務を免るゝに非ずして、負債の金額は依然として前日と異なることなかるべし。然り、其の如く地上に住む人、天上に在る天使が悉く今と、今より後ちと、全く缺なく神に從順なる者となるも決して、神の義に對して唯一の罪をも償ふに足らざるべし。されば爾の能に由て爾の罪を贖はんとするは、如何に虛しくして功なき考ならずや一人の靈を贖はんには、全人類も到底償ふ能はざる程、高價のものなり。斯の如くして他に此罪人を補くる者なくんば、其永遠の滅亡に至らざる可からざるは疑を要せざるなり。

左れど將來に於ての完全無缺の從順は過ぎ去りし罪惡を償ふことを得ると假定するも、之れ少しも爾の益とならざるべし。何んとなれば爾は之を全うすること、否、一の事にも、到底完全となる能はざればなり。今より之を試むるとせよ、彼の容易に爾を陷れ、爾を迷はしむる外部の罪を拂ひ去れ。爾は之を爲す能はざるべし。さらば、如何にして爾の生涯を凡ての惡より凡ての善に變じ得んや。先づ爾の心改まり、變ずるに非ずんば、到底之を爲す能はず。蓋し樹質の依然として惡しき限りは善き實を生ずること能はざればなり。爾は凡ての罪惡より、凡ての聖淨に爾の心を變じ、罪の中に死せし靈、卽ち神に死して唯だ世に生ける靈を活かすことを得るや。若し之を能くせば、死人を活かし墓中の人を蘇かへらすことも亦能すべし。然り決して死人を活かへらすこと能はざる如く、決して爾の靈を活かすこと能はず。此事には爾は何をも爲し能はざるなり。爾は全く力なき者なり。斯く爾の慾あり、

罪あり助なきことを深く悟り深く感ずるは、此れ卽ち所謂「悔なき所の悔改」にして神の國に至るの前驅なりとす。

爾の內外の罪障に付き、爾の憐むべく助なき有樣に付き、斯く痛く心に感悟した る上に、爾が神の惠を賤めしことを悲み、爾の口を緘じ己の惡を痛悔し、目を擧げて天を仰ぐを愧ぢ、爾に臨まんとする神の憤、爾の頭上に懸る神の詛、神を忘れ主イエス、キリストに從はざる者を呑まんとする其猛烈なる怒を懼れ、其の烈しき憤を免がれ、凡ての惡を去り善を學ばんことを熱心に望む等の如き相當の情あらんには我はエホバの名を以て爾に言ふ、「爾は神の國より遠からず」、尙一歩を進めば論は之に入るを得ん。爾は「悔改めり」、今「福音を信ぜよ」。

福音卽ち憐むべく助けなき罪人に對する喜ばしき音づれとは、此語の最も大なる意義を以て言へば、イエス、キリストに由て人類に現はされたる默示の全体をいふなり。又時として主が人間の中に住み給ひし間或は善業、奇蹟を行ひ、辛酸苦楚を

忍ばれし說話の全体を言ふことあり。福音の本義は卽ち左の言葉に悉く含蓄するものなり。イエス、キリスト罪人を救はんが爲めに世に來り給へり」。「神はその生み給へる獨子を世に賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめんがためなり」。「彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけて、われらに平安を與ふ、そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり」。

之を信ぜよ、さらば神の國は爾の所有なり。信仰に由て爾は其約束を得べし。彼は誠に悔改めて其聖なる福音を信ずる者をすべて赦し給ふ。神爾に告げて「心安かれ爾の罪赦されたり」と言はれなば、神の國は直ちに爾に來りて、爾は「義と和と聖靈とに由れる歡樂」をもつに至ちん。

爾唯だ此信仰の性質に就き、爾の靈を欺かぬ樣愼めよ。此信仰は往々或人々の好んで想へるが如く單に聖書の眞理、信仰箇條、新舊約聖書中に含まれたる凡ての事

なゞを信ずることにあらず。惡魔も吾と爾との如く之を信ず、されども彼は尚ほ惡魔たるを免れざるなり。信仰とは遥かに之に超越したるものにしてキリスト、イエスに由りて神の慈みを確信することを言ふ。すなはち罪を救すところの神に信任することなり。「神キリストに在て世を己と和がしめ、其罪を之に負はせず」特に、神の子は我を愛し、我が爲めに己を與へ給ふて、我までも今十字架の血に由て神と和らげられしことを深く心に確信するをいふなり。

爾は斯く信ずるか、之を信せば、神に於ける平和は爾の心に在りて、悲み、憂は遠く爾を去らん。爾は最早、神の愛の疑に在らずして、恰も青天白日を視るが如し。爾は斯く呼びて曰はん、「我は常にエホバの慈愛をうたはん、我は我口を以て世々爾の眞理を語ることを好まん」と。爾は最早地獄も、死も、或は曾て死の權威をもちしところの惡魔も懼るゝことを要せず。又神を躓かせ拳らぬ樣柔和、孝順の畏を以て事ふるの外に惴々焉として神を懼るゝことを要せず。爾は信ずるか、然ら

ば爾の「心は主を崇めん」爾の「靈は爾の救主なる神を歡ばん」、爾は「その（キリスト）血により贖すなはち罪の救を得」て、「上へ召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進み」、神が己を愛する者の爲めに備へ給ひしすべての善きものを望む熱心とを以て喜ばん。

今爾は信ずるか、然らば「神の愛」は今「爾の心に豐かに灌がる」べし。爾は神を愛す、そは神先づ爾を愛し給ひたればなり。爾神を愛するが故に兼ねて爾の同胞を愛するなり。「仁愛、喜樂、平和」を以て滿さるゝが故に「忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、撙節」及聖靈の凡ての他の結果即ち、一言にて之を言へば、すべて聖にして、天に屬し、神に屬する性質を以て滿たさるゝなり。何んとなれば爾が怕子なくして（今は怕子除かれたれば）「主の榮」即ち其榮ある愛、爾が其像によりて造られし榮光あるすがたを見「榮に榮いや增りて其おなじ像に化すれば也これ主すなはち靈によりてなり」。

此の悔改、此の信仰、此の平和、喜樂、仁愛、此の榮より榮に化することを世人は稱して狂亂、妄信、狂氣といふなり。嗚呼爾神を信ずる人よ、彼等に關する勿れ、斯の如き事を以て動かさるゝ勿れ。爾は爾の信ずる所の者は誰なるかを知る。誰にも爾の冕を奪はれざる樣目を醒まして注意せよ。爾は既に之に達せり、固く之を握りてすべて大なる貴き契約に達するまで進み從へ、爾未だ彼を知らざりし所の者よ。虛しき世の人々をして、キリストの福音に就き爾を愧ぢしめさすること勿れ。彼の知らずして誹謗する者を懼るゝ勿れ。神速に爾の苦を變じて喜びとなさん。爾の手を下に垂るゝ勿れ。暫くせば神は爾の懼を變じて、健なる心の靈を與へん。「義とする」者近けり。「罪を定むる者は誰ぞや、死て復よみがへり神の右に在て」、爾の爲めに「とりなし給ふキリストなり」。爾の罪は如何に多くありとも、すべて神の羔に悉く爾の身を委托せよ。さらば今「神はなんぢらと我儕の主なる救主イエス、キリストの永遠國に入るの恩を豐かに予へ給ふべし」。

聖靈の初めて結べる實

是故にイエス、キリストに在るものは罪せらるゝ事なし、そは活かす靈の法はイエス、キリストに由りて罪の法より我を釋せば也　羅馬書八章一、二、

（一）使徒ポーロが「イエス、キリストに在る者」といへるは固より眞實にキリストを信ずる者、即ち「我主イエス、キリストに賴り、信仰に由りて義とせられ、神と和やことを得たる者」を指せるなり。斯く信する者は當に「肉に從はず」腐敗したる人性の動念に從はずして「靈に從ひ」、其思想も言行も共に貴き神の靈の指示に從ふなり。

（二）「是故に（此等の人は）罪せらるゝことなし」。神は此等の人を罪に定めず、何んとなれば「神はキリスト、イエスの贖に賴りてその恩により功なくして彼等を義となし」給ひたればなり。神は凡ての罪を塗抹し給へり。

彼等は又其心より罪に定められるゝことなし、何んとなれば「彼等は此世の靈に非ず、神の我儕に賜ひし所のものを知るべき爲めに神より出る靈を受け」たればなり。「我等の靈と偕に我等が神の子たるを證する」聖靈を受けたればなり。之に加ふるに「我等の真心われら神の賜ふ所の丹心と信實とに由り、また肉の智慧に由らず、神の恩寵により世にありて行をなし、特に爾曹に向ひて此の如き行を爲せりと證すればなり。

（三）然りと雖ども此聖書の言葉は危險にも屢々誤解せられて無學輕躁の徒（即ち神に事へることを學ばずば、敬虔の眞理に就きて定見なき輩）は强ひて之を枉げて己の滅亡を招きたるが故に余は可成的明白に（一）「キリスト、イエスに在り」て肉に從はず靈に從ふものとは誰なるか（二）如何にして是等の者は「罪に定められることなき」かを說明し、而して余は實際上の推論を擧げて之を結ばんと欲す。

第一。先づ「キリスト、イエスに在る者」とは如何なる人なるかを示さん。キリストの名を信ずる者）己の義を保たず、たゞ信仰に由て神より出づる義をキリストに於て得たる者」は即ち之ならずや。「その（キリスト）血に賴りて贖を有つところの者」はキリストに在りといふことを得べし、何んとなれば彼等はキリストに住み、キリスト彼等に住めばなり。彼等は一の靈に於て主に合ひ、枝の葡萄樹につらなる如くにキリストに結び、言葉を以て言ひ難き、又以前は彼等の想像にも入らぬ如き有樣にて四肢となりて彼等の頭に屬けるなり。

「キリストに住む者は誰にても罪を犯さず」又「肉に從ふて行ふ」ことなし。ポーロの常に用ひし此肉といふ語は腐敗せる人性の義にして、其加拉太人に送れる書中にも此意味を以て之を記るせり。則ち五章十九節に曰く、「それ肉の行は顯著なり」云々、又十六節に曰く「靈によりて行むべし、然らば肉の慾を成すこと莫らん」と、之を證せんが爲め即ち「靈によりて行む」者の肉の慾を成すことなきを證せんとてポーロは直ちに追言して曰く、「そは肉の慾は靈に逆ひ、靈の慾は肉に逆ひ（此二のも

の互に相敵する）是故に爾曹好む所の事をなすこと莫らん」と。是れ原文の穩當の直譯にして「爲すことを得ず」と譯するは不可なり、何んとなれば「爲すことを得ず」と言はゞ肉、靈に勝つと言ふ義にして原文の意にあらず、これ唯だに彼の議論の全体を價値なきものとなすのみならず、却てポーロの反對の意義となるなり。

夫れキリストに屬する者、彼に在るところの者は「肉と其情および慾とを十字架に釘けたる者なり」。彼等は肉に屬せる凡ての所業より己を禁制せり。或は「姦淫、苟合」より、或は「汚穢、好色」より或は「偶像に事ふること、巫術、仇恨、爭鬪」より、或は「妒忌、忿怒、分爭、結黨、異端、娼嫉、兇殺、醉酒、放蕩」より、或は其他人性の腐敗より生ずる思念、言行等より、己を禁制せるなり、假令彼等は尙ほ清淨潔白なる能はずして中に苦き根底の存することを感ずべしと雖も、上よりの能力を蒙り、斷じて之を足下に蹂躙するが故に「生へ、いで〻彼等を援す」こと能はず、是故に彼等が受くるところの凡の攻擊は毎に唯だ彼等を驅りて、「我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す」と呼ばしむるに至るなり。

彼等は今は其心に於ても、行に於ても、共に「靈に從ひて歩む者」なり。聖靈は湧き出で〻永生に至る所の泉」なる愛を以て、神と隣人とを愛することを敎ゆべく、又凡ての願望、凡ての氣質を淸くして天に屬けるものとなし、凡ての思想をして主の前に聖化するに至るまで彼等を導かん。

「聖靈に從て行ふ」者は、又之に由て、凡て淸潔なる言行に導かるべし。彼等の「言は常に恩にみちて、且つ鹽を以て」卽ち神の愛と畏敬とを以て「調和らる」、「凡汚れたる言は、彼等の口より出づることなし、唯時に從ひて人の德を建つべき善事をいひ、聽者をして益あらしむべし」。彼等は亦之に由て、行に於ては、勉めて「我儕をして己の跡に隨はしめんとて式を我儕に遺し給へし」キリストに從ひ、其隣人との交に於ては、義と惠と眞理とに歩み、行ふところの何たるに關はらず、生活の凡の境遇に於て「凡の事、神の榮の爲に」なし、日夜に神を悅ばしむる事のみを

勉むるなり。

此の如き人々は實に「聖靈に從ひて行ふ」者なり。彼等は信仰と聖靈とを以て滿たさるが故に彼等が心の中に有し、凡て彼等が言行に顯はすところのものは當さに神の靈の眞果にして、卽ち「仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、節」及此他麗はしきもの、讃ひべきものは悉く其結果なりとす。「彼等は凡の事に於て、我救主なる神の福音を飾り」、且つ此の如き善良なる結果は、實に「イエスを死より甦せる」かの同一の靈に由て發せるものなることを人類に證明するなり。

第二、余は第二に如何にして此の如く「イエス、キリストに在る者は罪せらるゝことなきか、又此の如く「肉に從はずして靈に從ふ者」は罪せらるゝことなきかを說明せんと言へり。初めに此くの如く行ふところのキリストの信者は、其既往の罪惡の爲めに「罪せらるゝことなし」、神は之が爲めに些かも彼等を罪せずして、恰も前に罪なきが如く「海の深に投げられし石の如く」にして又之を記憶し給はざるなり、

神は彼等の爲めに「其血を信ずる者の挽回の祭物」となさんとて「御子をたてゝ、已往の罪を寬容になし、其義を彰はし給へり」。是故に神は之を彼等に負はせ給はずして、其記憶は永く罪と共に消滅し去るなり。

彼等は其心に於て罪せらるゝことなし。慾の感覺なく、神の怒の懼なし、「內に證を有ち」己は灑がれたる血に與かることを自覺す。「彼等が受けし靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず」、疑惑、曖昧に導く者にあらずして、心の中にアバ父と呼ぶ子たる者の靈なり。斯の如く「信仰によりて義とせられ」、神の寬容なる慈愛を絕ゑず感ずること〻、「神に對する善き良心」とより流れ出でゝ彼等の心を主どる所の平和を以て充たさるゝなり。

然れども時にはキリスト信者にして、神の恩惠を認めざるに至ることあり、時には斯の如き暗澹たる妖雲彼を蔽ふて、「見ざる神を見ること能はず、贖の血に己の與かることを確かむる心中の證しを感せざる樣に成ることあり、其時は彼は心の中

罪に定められ、再び「心中必死の定」を有つ者なりと言ふ者ありとせんか、事情此の如く、神の惠を認むることなしとせば、余は最早彼を以て信ずる者にあらずと答へん、何んとなれば信仰は光なるが故に心靈の上に輝く神の光明を失へば失ふほど其信仰を失ふものなり、而して恐らくは眞實のキリストの信者にして信仰の光明を失ふことあるべし、而して之を失ふ限りは暫し罪の定めに陷入らん。然れども今「キリスト、イエスに在り」今其名を信ずる者は此の如きことなし。何んとなれば彼等が信じて靈に從ふ限りは神も、彼等の心も、彼等の罪を定むることなければなり。

其二には、彼等は現在の罪惡、即ち今神の誡を犯すことのために罪に定めらるゝことなし、如何となれば彼等は罪を犯さず即ち「肉に從はずして、靈に從へばなり」「彼等が神の誡を守るは神を愛する」ことを絶ゆ證するなり。使徒約翰曰へり「凡そ神に由て生るゝ者は罪を犯さず、蓋神の種その衷に存するに因る、かれ又罪を犯すこと能はず、蓋神に由りて生るればなり」と其神の種、即ち愛の聖き信仰、

彼の衷に存するかぎりは罪を犯す能はず、之に在りて「自ら守る」限りは「かの惡者これに觸るゝことを爲ざる也」。少しも犯さゝる罪惡の爲めに罪を定めらるゝことなきは明白なり。是故に斯の如く「靈に導かるゝときは法律の下に在らざる」ところの者は之が爲めに詛を受くることも、罪に定めらるゝこともなし、何んとなれば律法は之を犯さゝる者を誰も罪に定めざればなり。斯の如く「爾盜むこと勿れ」といふ神の誡は、盜まざる者を罪に定めず、「安息日を忘れずして之を聖日とせよ」といふ誡は、聖日として之を守るところの者を罪に定むることなし、却て聖靈の結べる果を「禁ずる法律はあることなし」ポーロは尚一層強くテモテに贈れる前書に、記臆すべき言葉をもて之をいへり、「夫れわれら律法は善きものなりと知る、但し理に從ひて律法を用ふべし、律法は義人の爲めに設けたるに非ず」、（原文は律法は義人のために設けられたるにあらずといふ義に非ずして法は義人に逆て備へられたる者に非ずと云ふ意なり）、不法なるもの、不服なるもの、不敬なるもの、罪あるもの、

不潔なるもの、邪僻なるものゝ爲めに備へられたるなり」「これ我に託し給ふ所の福なる神の榮の福音に循へるなり」、此の如く律法は義人に逆ひて彼を罪に定むる權力を有するものにあらず。

其三には、彼等は假令心中尚は未だ罪惡の念を存すと雖ども之が爲めに罪に定められるゝことなし。人生の腐敗は信仰に由て神の子となれる者にすら存して、或は高慢、虛榮の種或は怒、淫慾、邪情の種、然り凡の種類の罪の種心中に存するは日々の實驗に於て明白なることにして到底否定する能はざる所なり。使徒ポーロが「神に召されて其子イエス、キリストの交際に入り」、「キリスト、イエスに在る」者と證せし人々に對して少しく後文に述べて曰く、「兄弟よ我さきに爾曹に語れるとき靈に屬る者に語るが如くする能はず、唯肉に屬ける者の如く、亦キリストにをる赤子に語る如くせり」と。斯の如く「キリストに在る赤子」といへば我儕は彼等が「キリストに在り」し事を知る、彼等は低き程度に於ての信者なりしなり。然れども、かの「神の律法に從はずして肉の事を念ふ」ところの儕輩に罪惡の存すること如何に大なりしよ。

されど、凡て此等の事の爲めに、罪に定められるゝことなし、假令彼等は衷に肉に屬する邪まなる情存することを感ずべしと雖も、日に增して彼等の「心は僞る者にして甚だ惡し」と感ずべしと雖も、防ぎ守りて彼等に從ふことなく、惡魔に降ることなく、傲慢、怒、情慾等の凡の罪と絶えず戰ふて、罪をして彼等を主配せしむることなく、尚は勉めて「靈に從ふ」限りは罪に定められるゝことなし「キリスト、イエスに在る者は罪に定められることなし」。神は彼等が不完全ながらも、眞實に從順なることを悅び給ふ。彼等は己が神のものたることを知り、彼等に「賜ふ所の靈に由りて」「神を信ずるなり」。

其四には、假令彼等は始終己が凡ての所業に罪の種ふことを自覺すると雖も、假令彼等は思想、言行共に完全に律法を守る者に非ざることを意識すると雖も、假令彼等

は全心、全靈、全心を盡くして主なる神を愛せざることを知ると雖も、假令彼等は直接なる神との交りに於て、即ち彼等が大なる會衆と共に集まり、又は彼等が心中の思想、計畫を悉く見給ふ神の前に私かに全心を注いで祈る時に、絶えず散漫なる思想と、頑鈍にして朽敗せる性情との己に存することを以て自ら愧づると雖も、されど猶ほ神よりも、己の心よりも、罪に定められることなし。此の如き許多の缺點を顧みることは、唯だ彼等をして絶えず、彼等の爲めに神に語る所のかの「灑がれたる血」と天の父に「己に賴りて神に來る者の爲めに懇求んとて恒に生き」給ふ、かの保惠者との必要を深く心に感ぜしむるなり。此等は其信ずる神より彼等を遠ざけずして却て彼等を驅て、片時の間も必要を感ずる神に近づかしむるに至る。而して之と同時に「主キリスト、イエスを承け、彼に在て行む」、が故に益々深く此必要を感じ、愈々熱心に奮勵するに至るなり。

其五には、彼等は人の平生稱する荏弱の罪の爲に、罪に定められることなし、蓋し

恐らく單に荏弱とのみ稱する方穩當ならん、何んとなれば斯く荏弱と罪との二語を連ぬるが爲めに少しにても罪を假し或は之を減ずるが如く見せしむるは宜からざればなり、然れども、若し吾人が斯の如き曖昧危險の辭を保存するの必要ありとせば、余は荏弱の罪とは此の如き偶然、無意識の失策を指すものといはん、即ち實際に當つては誤なるを確かむると雖ども、己は眞なりと信ずる事を言ふ如き、或は己は害せんと欲せるにあらず、或は知りたるにあらず、恐らくは善き事を爲さんと欲せしに却て隣人を害ふが如き事是なり、假令此等は聖善完美なる神の意志に違ふものなりと雖も、此等を以て罪と稱するは適當のことに非ず。又「キリスト、イエスに在る者」の良心に咎を及ぼす者にも非ざるなり。これ神と彼等の間を隔離し、又神の聖顏の光を遮ぎるものにも非ず、何んとなれば「肉に從はず、靈に從ふて行ふ」彼等の大体の品性と少しも矛盾する所あらざればなり。

終りに、己の力にて及ばざる事のためには內外孰れの性質の事にせよ、又或事を

行ひ或は或事を等閑にせるの執れにもせよ、之が爲めに「罪に定められる〳〵となし」。例へば晩餐式施行せらる〳〵とせんに爾之に與からずとせんか、何故に與からざるか、爾は病の爲めに出席し得ざることあらん、其已を得ざる理由を以て爾は罪に定められず、好み擇んで之を爲したるにあらざる故に 慾 あることなし。「ねがふ志」あるが故に「其無きところに循らず其有るところに循りて納け」らる〳〵なり。

時に信者は己の心の願ふところを爲すこと能はざるが故に實に憂ひ悲しむことあり。公會に出席して禮拜することを妨げらる〳〵時に斯く叫ぶとあらん「ア、神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐが如く、わが靈魂は爾をしたひあへぐなり、渴ける如くに神をしたひ、活神をしたふ、何れの時にか我ゆきて神のみまへにいでん」と、彼は唯だ尙ほ心の中に「わが意の如くに悲ず、唯爾の意に任せたまへ」といひつ〳〵、熟心に「再び諸人と共に出で〳〵神の家に彼等を携へ來らん」ことを望む事あらん、彼れ猶ほ行く能はずと雖も罪の定めも、慾も、神の怒の感覺も感ずることなく、樂き心にて

斯く神に祈れることを得ん、「あゝ、我靈魂よ、なんぢ神に任かせよ、われに聖願のたすけありて我なほわが神をほめたゞふべければなり」と。

平生不意の罪と稱するもの、卽ち常には忍んで己の心を制せし者が不意にして猛烈なる誘惑の爲めに遂にかの「己の如く爾の隣人を愛せよ」といふ貴き律法に背く如き言行を爲すところの者に就いて、判斷を下すことは一層困難なり。恐らくは此類の犯法に付き一般の則を定むることは容易ならざるべし。吾人は一般に不意の犯法の爲めを以て罪に定められるべし、或は定められざるべしと言ふと能はず。されども、信者が不意の爲めに罪に陷いる時は、毎に其人に多少の意志の撰擇ある其度に慾ふて多少の罪の定めあるべし。罪の慾、罪の言行は之に加はる意志の多少に從て、神之を怒り、また其心に 慾 あるべしと吾人は考ふるを得べし。

されど、若し斯く有りせば、不意の罪にして多の罪過の定を招くところのものあらん。何となれば或場合に於ては吾等が驚かざるとは故意、有罪の怠りに歸し、或

は誘の未だ來らざる先きに避けらるべき心の油斷に歸すること有ればなり。人は誘惑、危險の近づけることを神或は人より預め警醒せられたるに「なほ少しく眠らん、なほ暫し手を拱いて休まん」と心中に言ふことあらん、此の如き人が後ち不意に罪惡の籠絡に陷りたりとて言ひのがるべき樣なし、蓋し彼は預め危險を認め之を避くるを得たる者なればなり。不意の爲とはいひ此の如き場合に於て罪に陷いるは是れ實に有心の罪なり、斯の如き人は神よりも己が良心よりも共に罪に定められるゝを免る能はざるなり。

之に反して、世より、或は、屢々我儕の惡き心情よりして、預め認めざる又殆んど認むること能はざる間に不意に襲擊を受くることあり。之がために信仰弱き信者は稍々怒を發し、或は殆んど意なきに他人を惡評するが如き事あらん、此の如き場合に於て嫉の神は疑なく彼の行の愚かなりしを示すべし。彼は完全なる律法を離れ、キリストに在る心を還ざかりしことを自ら知りて、爲めに敬虔なる憂を以て

悲み、自ら好んで神の前に愧ぢん。彼は罪に定められるゝの要なし、神は愚を以て彼を罪せず、却て彼を恤みて「父の其子等を恤むが如く」せん。而して彼の心も彼を罪に定めず、其憂と愧との中にも「なほ我は信じて懼れざるべし、蓋エホバなる主はわが力わが歌」「またわが救なればなり」と言はん。

第三、今は唯だ前論より實際上の推理をなす事のみ殘れり。第一に若し「キリスト、イエスに在り」「肉に從はず靈に從ふて行ふ者」已往の罪惡の爲めに「罪に定められるゝことなし」とせば、爾は何故に懼るゝや、あゝ信仰薄き者よ、假令爾の罪は嘗て濱の砂子より多くありしと雖ども、今キリスト、イエスに在る爾に何事かあるべき。「神の選びたる者を訟へん者は誰ぞや、義とする神なるか、罪を定る者は誰ぞや」爾が少年の時代より「愛する者に納け容れ」られし時に至るまで犯し來れる凡の罪は糠の如く飛ばされ、失はれ、呑み盡され、跡なく消ゑて再び記憶せらるゝことなし。爾今は「靈に由て生れ」たり、然るに生れし前に爲せる事を煩ひ、或は懼るゝ

か。爾の懼を去れ。爾は懼れに召されずして「愛と謹との靈」に召されたるなり。爾の召を知れ、爾の救主なる神を悅び、彼に賴りて爾の父なる神に感謝せよ。

爾は斯く言ふか「されども、彼の血に由て贖を得し以來再び罪を犯したり、我みづから恨み、塵の中にて悔ゆるは之が爲めなり」と。爾が己を恨むは相當の事なり、而して此の如き有樣に爾をなしたるは神なり。されど爾は今信ずるか。神は又爾をして「われ知る我を贖ふ者は活く」「今われ生るは神の子を信ずるに由りて生くるなり」と言ふことを得せしめたるか。然らば其信仰は再び爾の已往の凡の罪を蔽ふて爾は罪に定められることなし。爾が眞に神の子の名を信ずる時は毎に以前の凡の爾の罪は朝の葉末の露の如く消え去りて跡なきに至るべし。今然らば「イエス、キリスト爾を釋きて得させたる自由に堅く立て」よ、彼は再び罪の力と幷びに愆と其罰とより爾を自由にせり、あゝ「奴隸の軛に繫がるゝ勿れ」、罪の鄙陋、極惡の束縛も、地獄に至らざる前の最もいたむべき軛なる邪欲、邪情、邪言、邪行等の束縛

も、又屈服苦惱の懼、或は愆と自責との束縛にも繫がるゝこと勿れ。

然れ共、其二には「凡てキリスト、イエスに在る」者は皆な「肉に從はず靈に從ひて行ふ」か。然らば誰にても今罪を犯す者は此事に與かることなしといふ推論を得るは免るべからざるなり。彼は今己の心に罪に定めらるゝなり。然れども「若し我儕の心我儕を罪に定めば」若し我儕自身の良心我儕が罪あることを證せば、神の我儕を罪に定め給ふは疑なきなり。「何んとなれば神は我儕の心より大にして凡の事を知り」給へばなり。是故に我儕は己を欺き得るとも神を欺く能はざるなり。我は曾て義とせられ我罪は曾て赦されたり、と言はんと思ふこと勿れ、我は之を知らず、又其赦されしか、赦されざりしか如何を爭ふことを好まず。恐らくば爾來多くの時日を經たる今日に於ては其赦罪とは果して眞實の神の働なりしか或は爾が唯だ己の心を欺けるものなりしや否やは、殆んど確知し得べからざるなり。然れども我は十分の確實を以て此事を知る、即ち「罪を犯す者は惡魔より出づ」。是故に爾

は爾の父なる惡魔より出でしなり。爾は之を拒む能はず、何んとなれば爾は爾の父の所業を爲せばなり。あゝ空しき望を以て己に諂ふこと勿れ。爾の心に向て「平和あれ、平和あれ」といふ勿れ。平和は少しも爾に無ければなり。聲高く深みの中より神に呼べ、神或は爾の聲を聞き給ふこともあらん。初の如く卑しく憐なる者として、罪ある、不幸なる、盲目なる、裸かなる者として神に來れ。神の赦の愛を顯し給ふまで、神の「爾の反逆を醫し」「愛に由て働く所の信仰」を以て再び爾に滿たすまで勵みて心に油斷すること勿れ。

其三には、「靈に從て行む」者はなほ殘存する所の內心の罪の故を以て、又は其所業の凡てに纏ふ所の罪の故を以て罪に定めらるゝことなきや、若し之なくば、假令罪念心中に存すると雖も、薄信の故を以て自ら煩ふことなかれ。爾はなほ神の榮の像に至らざるの故を以て、又傲慢、我慾、不信のなほ凡て爾の言行に纏ふの故を以て、自ら怒ること勿れ。爾の心の凡て此の如き惡に充てることを知り、爾が知らるゝ如く爾の眞相を知ることを懼るゝ勿れ。爾が思ふべからざる程に自ら高く思はぬ樣神に願へ、爾は絶えず斯く祈れ。

わが靈の堪へ得るだけ、わが生來の罪の如何に深きかを示し給へ、凡の不信は心に潛む傲慢を現はせり。

神が爾の祈を聽き爾の心の怕子を除く時、爾の精神の如何なるかを全く爾に示す時、爾の信仰爾を誤らせぬ樣、爾の楯を爾より奪はれぬ樣慎めよ。自ら卑め、謙りて塵の中にて祈れ。爾は空しくして物の數にもならぬ程陋しきを知れ、されども、なほ「爾の心に煩ふこと勿れ」「我儕の爲めに父の前に保惠師あり、卽ち義なるイエス、キリスト」あることを固く握りて動かすこと勿れ。「天の地より高きが如く、神の愛は我罪よりも深し」。是故に神は罪人なる爾にも。爾の如き罪人にも惠深くいましたまふなり。神は愛なり、而してキリストは死に給へり。此故に父自ら爾を愛し給ふ、爾は神の子なり。此故に神は凡て善きものを爾より抑

へ止め給はざるべし。「爾は凡の肉と靈との汚より潔くせらるべし」。唯だ神の清き愛の外爾の心に何物をも遺されざるを願ふや、勇めよ「爾心を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし」「約束せし者は誠信なり、彼は之をなさん」。忍んで信仰の働、愛の業を務め、喜ばしき平和と謙遜なる信任との中に在りて靜かに、然かも熱心に萬軍の主エホバの終に確かに之を成し遂げ給ふまで待つは爾の分なり。

其四には、若し「キリストに在り」「靈に從て歩む」者にして茫弱の罪、即ち心ならざる失策のために、又は力及ばざる事のために罪に定められることなしとせば、爾キリストの血を信ずる者よ。之を機とする惡魔に敗られぬ樣慎めよ。爾はなはあゝ愚かにして弱し、盲目にして無知なり、言ひ盡せぬ程弱し、知るべき程をも知らずして、爾の心の想像の及ばぬ程愚かなり。されど凡て爾の茫弱、愚昧及び其避くべからざる結果等をして爾の信仰、爾の神に於ける孝順を動かし或は爾の主に在る平和、歡樂を妨げしむること勿れ。或人が有心の罪につきて與ふる所、又其場合に

於て恐らく危からん所のかの規則は、若し之を單に茫弱の場合にのみ適用せば疑もなく、賢くして又安然のものなり。あゝ神の人よ、爾は倒れたるか。されど我と我身を怒り、我が弱きを憤りて其所にそのまゝ伏すこと勿れ、却て穩やかに斯く言へ、「御手を以て我を扶け給はずば我は斯く絶えず倒れん」と而して起て上跳りて歩め、爾の道を行け「耐忍びて爾の前に置かれたる馳場を趨れ」。

最後に、假令信者が愕かされて己の心の欲せざる所の事を爲すと雖も罪の定を受くる必要なきが故に(其愕かされしは己の不注意或は故意の怠に非ずと假定して)若し信ずる爾が斯くして過に陷らば、主の前に來りて之を憂ひ悲めよ、之れ貴き香料とならん。主の前に爾の心を開いて其苦を告げ、力を盡して「爾が茫弱をおもひやる」所の彼に祈れ。主は爾の心を强健にし、鞏固にし、再び倒れしめざるべし。主はなは爾を罪に定めず。何が故に爾は懼るゝや。爾は少しも「苦痛を有つ所の懼」を抱くを要せざるなり。爾は爾を愛する彼を愛すべし、夫にて足るべし、愛增

せば益々强を增さん。爾の心を盡して主を愛するに至らば、卽ち爾は「完全、圓滿、無缺」の者とならん。靜かに「平安の神爾を全く潔くし又爾の全靈、全生、全身を守りて、我儕の主イエス、キリストの臨ちん時に咎なからしむ」るかの時を待望め。

奴たる者の靈、子たる者の靈

爾曹が受けし靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり。

羅馬書八〇十五。

（一）こゝに聖パウロ信仰によりて神の子たる所の人々に語りて曰く「爾曹」卽ち實に神の子にして其靈に浴せし所の「爾曹が受けし靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず」して「なんぢら子たるとを得しが故に神その子の靈を爾曹の心に遣り」、「アバ父とよぶ子たる者の靈なり」と。

（二）奴と懼との靈の此愛すべき子たる者の靈に於ける其相去る啻に霄壤のみならず、唯奴隸的畏懼によりて感化せられし者は「神の子」と稱すると能はざれども、中には其奴僕と稱し得べく、而して「神の國より遠からざる」者あり。

（三）然れども我儕の關心する所は古來基督教徒と號する社會に於て此奴僕の域

にさへ達せざりし者多く而して「すべて其おもひに神なしとせる」程の甚しきものあり。我儕は彼等のうちに神を愛する所の人の甚だ少く、神を畏る〻者の稍多きを見る、然れども其大部分は其目に神を畏る〻の畏敬なく、其心に神を愛するの愛なき者なり。

（四）思ふに卿等のうち神の矜恤によりて子たる者の靈を受けたる所の人にして嘗て彼等の如くありし時又彼等と同じ審判の下にありし時のことを思出す所の人多かるべし。而して卿等が期至りて畏懼の靈を受け、（卿等は之を受けしなり、何となれば此も亦神の賚物なり）而して後ち畏懼は散消して、愛の靈卿等の心を滿たすまではたとひ卿等は日々罪と血とのなかに沈淪しつ〻ありしにもせよ初めには信仰の樣を知らざりしなり。

（五）凡そ恐懼もなく愛もなき心の狀態の人を聖書には稱して「性來の人」といひ、奴と懼との狀態の人を時としては「律法の下にある」人といふ、（たとひ此律法

の下にあるといふ詞は却て屢ば猶太時代に在る人、若くは猶太律法の諸禮式を強ひて守らざる可からずと思へる人に關して稱せらるれども）然れども畏懼の靈の變じて愛の靈となりし所の人は始めて之を「恩惠の下にある」人と稱せらる〻なり。

されば我儕は如何なる靈に屬しをるかを知るは我儕に重要なるが故に予は明白に第一には「性來の人」の有樣、第二に「律法の下にある」人、第三には「恩惠の下にある」人の有樣に付きて論せんと欲するなり。

第一。予が論せんと欲する所は性來の人の狀態なり。聖書には睡眠の狀態といへり、神の聲之に及びて「寢たる者よ起きよ」といふ。何となれば此人の靈魂は深き睡眠中に在りて、其精神的官能は醒めず、精神的善惡を兩つながら少しも辨へざればなり。其知識の眼は閉ぢて堅く、何物をも見ず。雲と黑闇とは絕えず眼上を掩へり、何となれば其人は死の陰の谷に伏しをれればなり。かく彼は靈の事につける知識に一の通路を有せず其靈魂に通ずる諸の門戸は悉く鎖閉せるが故に彼が最も

知らざる可からざることは其何たるを問はず鈍且つ愚にして知る所なし。彼は全く神を知らず、神に關して其當に知るべき筈のものをすべて知らざるなり。彼は神の律法の眞の、內部の、精神的意義につきては全く門外漢なり。彼は人の能く神を見ることを得べき所の福音的聖淨につきても、「其命の耶蘇基督と偕に神の中に藏れ在る」ことを知れる其幸福につきても些の考察を費すことなし。

されば彼は深く眠りをるが故に安息の如き觀あり。彼は目瞽たるが故に亦恐懼なし。彼曰く「咄、我に何の危害かある」と。彼を繞り圍む所の黑闇は一種の平和の中に彼を守れり、然れども此平和は惡魔の工と世及び惡魔に屬ける心とに因りて保持せらるゝ間のみ。彼は深淵の端に立ちをることを知らず、故に懼れざるなり。彼は自ら知らざる危殆には戰慄する能はざるなり。彼は何を懼るべきか全く知り得ざるなり。抑も彼が心に神を怖るゝの念なきは何の故ぞや。是れ彼が神につきて全く知る所なければなり、即ち或は其心に神あることなしと思ひ、若くは神は地球のは

るか上にすわり、自らひく〳〵して地上の作工を見すとは思はざれども猶彼は快樂主義によりて神は矜恤に富めりと爲し、其矜恤の大海中に凡て其聖淨も、罪を惡むことも、凡て其正義も智慧も眞理も悉く皆包括し呑併せりとして自ら滿足するなり。彼は神の律法に從はざる者に對して公布せられし罰につきては之を知らざるが故に少しも懼るゝ所なし。彼は律法の大主旨は斯く爲し、外部に於て非難なければ則ち可なりと思ひて、各性質、志望、念想、情感等に至るまで此律法の及べることを見ず。否らざれば彼は律法に從ふの義務は今日は既に解かれたりと思ひ、基督は「律法と預言者とを棄る爲めに來れり」と思ひ、其民を罪よりならで罪の中に救ひ、聖淨ならずして天に彼等を歸さんために來りしなりと思ひて基督が「律法の一點一畫も遂げつくさずして廢ることなし」、又「我を呼びて主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず唯これに入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみなり」と告げ玉ひし語あるにも意を介せざるなり。

彼は全く自己の何たるを知らざるが故に安固なるなり。故に彼は「延引漸次の悔改」をいふ、彼はその悔改を其死するの前いつか爲すべしとして、明に其時を知らず。是れ悔改なる者は全く自己の權内に在りとおもへるが故にして、若し彼にして悔改めんと欲せば何物も彼を妨ぐるものなしとすればなり。若し彼にして一たび悔改の決心だにせば唯之を善くすべしとの外一の戒懼なければなり。吁亦思はざるの甚しきかな。

然れども此無知は世に學者と稱せらるゝ者の無知の如くには甚しからざるなり。學者にして性來の人は概して其智力、其意志の自由、また人をして有德者たらしむるには此意志の自由の絶對的必要なることを論ず。彼は人なる者は其意志すが如く何事をも爲し得るなりと書に於て之を讀み、自らも論じ、徵證を立て、自ら視て最善とする所の善にも惡にもおのれの心を傾注す。此の如く此世の鬼神は彼の心を掩ふに盲目の怕子を以てし、いかにすとも「基督の福音の光をして照らさゝらしむ」。

自己と神とを知らざるよりして、自ら自己の智慧と善良とを嘉みして一種の喜悅の時として此性來の人に生ずることあり、即ち世の謂ゆる喜悅なるものを屢ば彼は有することを得るなり。彼は肉体の欲眼目の欲を遂げ、或は勢より起る驕傲、殊に彼れ豐厚なる財産を所有し、「紫袍と細布とを衣て日々奢樂める」によりて種々の快樂を享け得べし。而して彼がかく樂める限りは世人は必ず彼を羨み、幸福の人と稱すべし。何となれば美服を衣、人を訪ひ、之と語り、飲み、食ひ、遊び樂むが爲めに臥床を離るゝは世俗的幸福のすべてなればなり。

詔諛と罪惡との痲痺劑を服したる上陳の狀態に在る所の者が其やゝ醒めたる夢のうちに己は大なる自由の中に歩む者なりと思ふとあるは更に驚くに足らざる所の者なり。彼は如何に容易くもおのれは凡て鄙野にして禮に閑はざるの過なく、教育上の偏見なしと自ら慢じ、正しからざる判斷なく、諸の極端のなかに中を保せりと自

ら判し得るものあり。彼は將にいはんとす「われは弱く狹き人々の諸の熱中より遠く、愚者怯者の病にして常に義に過ぎたる迷信を免れ、且つ思考の自由寛大を知らざる人々に絶えず起る所の執拗なし」と。然り、而して此と同時に彼は「天より來る智慧」なく、淨聖なく、心の宗教なく、基督に在る心なきは爭ふべからざるなり。彼が此の如き狀態に有る間は罪の僕なり。彼は日々多少罪を犯せり。然れども彼は心之を厭はず、或人の言ふ如く彼は束縛を知らざるなり、又罰の來るべきことをも感せざるなり。彼は自ら甘んじて(たとひ彼は基督教の默示は神より來れりと信ずるを公言すべけれども)「人は脆き者なり。我儕は悉く弱し。何人も皆其弱點を有す」といふ。彼れ或は聖書を引き「何故にソロモンは「義者は一日に七たび罪に陷る」といひしや。凡そ自ら其隣人よりも善しと廣言する所の者は皆僞善者たり固信家たるは疑を容れず」といはん。若し時として森嚴なる思想の彼に臨み來る時は彼れ直ちに之を排して「神は矜恤深く、基督は罪人の爲めに死せしに、われは何故に

懼るべきか」といふ。此の如く彼は敗壞の束縛に甘心し、內外共に聖からざるに滿足し、唯罪に厭たざるのみならず、容易に彼を圍み攻むる所の罪にさへ勝たんとも務めず、自ら甘んじて罪の僕として日を送れり。

其頑愚にして醜陋なる犯罪者たるも、やゝ尊むべく端正にして敬虔の實なきも唯其貌のみを有する罪人たるも、各性來の人の狀態は實に此の如きものなりとす。而して如何にせば此の如き人は能く罪を識認し得べきや。如何にせば悔改に至るべきや、律法の下に來るべきや、懼の奴たる靈を受くべきや。是れ予が次に論せんと欲する所なり。

第二。或は畏懼すべき攝理を以て、或は聖靈は信證に契合せる神の語を以て神は今黑暗と死の蔭とに酣醉しをる所の人の心を衝き玉へり。彼は戰慄して其睡眠より目さめ、其迫れる危害を知つて起てり。或は一時に或は漸次に彼の理會智力の眼は開かれ、今や始めて(其帕子は少しく除かれたれば)彼が靈魂は底なき坑と硫黃にて

燃ゆる火の池より閃爍し來れる如く見ゆる所の怖るべき光に注射されをる實狀を審にせり。彼は遂に愛すべく矜恤深き神は又「燬盡す火」なること、凡て人に其工に從つて報い、空言空想は假借なく不敬虔の廉を以て審判き玉ふ所の正くして怖るべき神なることを知るに至れり。彼は今明に大にして聖き神は「目淸くして肯て惡を觀たまはざる」もの、おのれに違逆する者の復讐者、惡き者に其罰を假したまはぬ者なること、而して「活神の手に陷るは畏るべきこと」なるを知れり。

神の律法の內部精神的意義は今や彼に明かならんとせり。彼は「神のいましめのいと廣き」こと、「物として其光をかはふらざるはなき」ことを知れり。彼は誠命の各項は唯外部の違反と遵守とに屬するにあらずして、神の外は何もの〻目も視る能はざる人の心の奧底に往來する思想感情にも關係することを識認す。若し彼れ「殺すこと勿れ」と聞かば神は雷鳴のうちに「凡そ兄弟を憎む者は卽ち人を殺す者なり」、「其兄弟を狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし」と宣ふ。若し律法「姦淫すること

勿れ」といはゞ主の聲は彼の耳に響きて「凡そ女を見て色情を起す者は中心既に姦淫したるなり」といはむ。斯の如く彼は神の言は悉く「活きて且つ能あり兩刃の劍よりも利き」ことを感ず。げに神の言は「人の氣と魂とまた筋節骨髓まで刺し剖つ」ものなり。況んや彼れかゝる大なる救拯を蔑にし、罪のなかより彼を救はんと欲したまふ「神の子を蹂躪け」、「契約の血を尋常のもの」潔めの効なきものとして今日に至りしことを自覺するが故に神の言に對して其感果して如何ぞや。

而して彼は「我儕が係はれる者の眼の前に凡てのもの裸にて露はる」ことを知るが故に、彼れおのれの裸にして、彼が綴りて裳とせし無花果の葉を褫がれ、宗教或は道德に關して其無知の詫言も、神に對して罪犯しゝことにつきて其醜陋の辯解も其用を爲さゞるを知れり。彼れ今おのれは往昔の犧牲の如く頸より下腹にかけて切り割れたる如くにして、彼が衷に在る所の者は悉く暴露せるを見る。彼が心情は赤裸なり、彼は其皆罪にして、「萬物よりも僞るものにして甚だ惡しく」、腐りて惡

むべきと言語に絶し、滿つるものは不義不敬のみにして衷に一の善きものなく、故に其感動其氣質及び其思想絶えず唯惡しきことのみを見るなり。

彼は口言ふ能はざる靈魂の感動によりて從來其心の罪の爲め其言行に非難すべき者なし（然れども「惡樹は善果を結ぶ能はざる」ものなれば此の如きことあらず又有り得ぬことなり）と爲したれば、彼は當に永刼熄えざる火の中に投せらるべきことを自ら知るのみならず、彼はいにしへ使徒の「罪の價は死なり」といひけんをいたく之を心に感せり。實に彼が犯し來りし罪の正しき報酬は第二の死、即ち死して死せざるの死、陰府に於ける肉体と靈魂との滅びなることを感せり。

是に於て彼が喜びし夢も、其謬りの安心も、其僞りの平和も、其空しき安固も悉く終を告げぬ。彼が喜悅は今や煙の如くに消え失せ、一たび愛せし歡樂は復た其力なし。すべて此等のものは其興味を弱め、彼は其催吐の美味を厭ひ、遂に之に堪へざるに至れり。幸福の陰は飛去りて形を止めず、故に彼は今まで享けゐし諸のも

のを奪ひ去られて、彼方此方に彷徨し、安息を求めて一の得る所なし。

此等の痲醉劑の効用は今消失して、彼は創痍を蒙れる精神の苦痛を感せり。彼は其靈魂を弛緩ならしめし罪は（驕傲忿怒或は惡念にせよ私意邪惡嫉妬復讐或は其他のものにせよ）極めて重き苦難なることを發見し其失ひたりし、祝福と今頭上に臨める呪詛とに心いたく悲み、かく自己を壞ち、其受くべき矜恤を拒みたりしことを悔い恨み、神の怒と其怒の結果と、其當に受くべきの罰と、其罰は彼れ自ら其頭上に臨めるを知れることと等につきて心戚々として恐懼し、——彼には地獄の門たり、永刼の死の戸たる者として死を恐れ、——神の怒と義しき復仇との執行者として惡魔を恐れ、——人若し彼の身を殺し得るならば身も魂も地獄に投ずるならん所の人を恐れ、——時としては其極に達して憐むべく罪深く有罪なる魂は諸の物に怖ぢ、物なきに怖ぢ、影に怖ぢ、風に動く木の葉に怖づるなることを恐るゝに至る。然り、時としては殆んど狂氣に近く「酒の故ならずして醉ゑる」人となりて、記憶を

失ひ、理會力を喪ひ、もろ〳〵天賦の能力を失ふに至る。時としては絶望の極に近づきて、死の名に戦慄する所の彼は猶毎時毎刻「氣息の閉ぢんことを願ふ」てやまざるに至る。宜べなり此の如き人は古人の如く其心の甚しき不安の爲めに哮り狂ふや。宜べなり彼が「人の心は猶其疾を忍ぶべしされど心の傷める時は誰かこれに耐へんや」と號呼するや。

今や彼れまことに罪より出離せんことを冀ひ、而して之と闘ひ初めぬ。然れども罪は彼よりも力強きが故に彼れ其全力を盡して之にむかふも勝つこと能はず。彼は喜んで之より遁れんと欲す、然れども彼は緊く繋がれをれば走り出づると能はず。彼は復た罪を犯すまじと心を決すれども猶之を犯せり。彼は圈套を見て畏るれども猶之に向ひて走れり。彼れ其自ら慢せる理論を愈よ用ふれば愈よ其有罪を増し其苦難を加ふ。かれが意志の自由とは唯悪の道へ自由なるなり、「悪を取ること水を飲むが如くする」の自由なり、愈よ遠く活ける神より離れ迷ひ、益す「恩を施す靈を侮る」

の自由なり。

彼れ愈よ自由ならんと勉め、願ひ、働けば益す彼の鐵鎖即ちサタンが「彼をしておのれの旨を行はしめんために之を擒にし」之を繋ぎし罪の苦しき鐵鎖の緊きを感ず。彼はサタンの僕たり、彼れ之を恨み憤れども詮なく、彼叛けども勝つ能はず。彼は猶罪の故を以て奴と恐懼とのうちに在り、其罪は概して其天性習慣或は外部の事情によれる彼に特種の外部の罪なれど、常には内部の罪、悪しき氣質、清からぬ愛情なりとす。彼れ愈よ之を腑蝕せしめんとすれば鎖益す堅く、之を嚙めども之を斷つこと能はず。かく此憐むべく罪深く、無力の困苦人なる彼は正に其才智の盡き、喟然として「噫われ困苦人なるかなこの死の體より我を救はんものは誰ぞや」と浩嘆するまでは悔いつ、罪犯しつ、復た悔い、復た罪犯して止まざるなり。

「律法の下に」在り、懼と奴たる者との靈」下に在る所の人の此の如き心闘の狀態

はパウロ之を描出して餘蘊なしといふ可し。曰く「われ昔し律法なくして生きたれど」卽ちわれ多くの生命、智慧、力、德を有てりと思ひたれど、「誡命來りて罪は活きかへり我は死ねり」、誡命は其精神的意義を以て神の力と共に我心に來りしかば我が性來の罪は昂起し、增加し、勢を得、而して我が德は死せり。「斯くて人を生さん爲めの誡は反て是れわれを死しむる者となれり何となれば罪は誡の機に乘りて我を誘ひ其誡をもて我を殺せり」誡はわが知らざるに來りて、凡て我が希望を殺し、明に我は生に在りて死しをることを示めせり。「それ律法は聖し誡も聖く公義かの善なり」、われ復た律法も誡も難ずることをせず唯わが心の腐れたるを難ず。「それ律法は靈なる者と我知るされど我は肉なる者にして罪の下に賣れたり」、われ今律法の靈なる性質も罪の下に賣られて全く奴隷とせられし(金錢にて買はれ終身持主の管理の下に在る奴隷の如く)わが肉に屬き惡魔の如き心とを知れり、――「蓋わが行ふ所の者は我も之を是とせずわが願ふ所のもの我之を許さず我が惡む所のもの我れ之を爲せばなり」、是れわが日夜號呼する所の羈絆なり、我が苛酷なる持主の殘虐なり。「願ふ所我に在れども善を行ふことを得ざればなりわれ願ふ所の善は之を行はず反て願はざる所の惡は之を行へり」、「是故に我れ善を行はんと欲ふ時に惡のわれにをる此一の法(內部に在りて我を强制するの力)あるを覺ゆ蓋われ內なる人に就きては(卽ち心にては)神の律法を樂めども(若くは甘んずれども)――(わが肢體に他の法)他の强制する力)ありて我心(內なる人)の法と戰ひ我を擒にして」、我が戰勝者の車に强て載せ我が惡む所の者に我を驅り往きて「我が肢體の中にをる罪の法(卽ち力)に從はするを悟れり」。噫、われ困苦人なるかなこの死の體より我を救はんものは誰ぞや」。此の無力にして垂死の生命より、此の罪と苦難の羈絆より我を救はんものは誰ぞや。われ此の救を得るまでは「われみづから心」卽ち內なる人にては神の法に從ひ卽ち我心我眞心は神の方に在れども「肉」(卽わが肉体)にては「罪の法に服ひ」、我を强ひて驅りいそがせ、而して我は之に抗し得ざ

るなり。

是れ豈に「律法の下に在る」所の者の狀態を描出して躍々たらずや。實に彼は重荷を負ひて之を脱する能はず、自由と力と愛とを切に求めて、猶恐懼と羈絆とのうちに在り、此罪の羈絆より此死の體より「我を救はん者は誰ぞや」と絶叫しつゝ神が終に答へて「是れ爾の主耶蘇に由れる神の恩なり」と宣ふまでは心に平安を得ることなし。

第三。神より此宣示のあるや否や此悲慘なる羈絆は自ら解けて、彼は復た「律法の下に在らで恩の下に在る」者となれり。此狀態は予が第三に論せんと欲する所なり。此狀態は則ち父なる神の前に恩卽ち眷顧を認め、わが心情を治むる聖靈の恩卽ち力を有し、使徒の言によれば今彼が「アバ父」と呼ぶ子たる者の靈」を受けし所の者の狀態なり。

「彼れ困苦にあひてエホバを呼びしかば神かれを救ひたまへり」。彼の目は以前と

は全く異りて開け、愛すべき恩惠深き神を見るに至れり。彼れ「願くば汝の榮光を我に示したまへ」と言へる時其魂の底に「我わが諸の善を汝の前に通らしめエホバの名を汝の前に宣べん我は惠まんとする者を惠み憐まんとする者を憐むなり」との聲を聞く。而して程もなく「エホバ雲の中に在りて降り彼と共に其處に立ちてエホバの名を宣べたまふ」べし。爾時彼は肉と血との目によらで「エホバ神は憐憫あり恩惠あり怒ることに遲く恩惠と眞實との大なる神、恩惠を千代までも施し惡と過と罪とを赦す者」なることを見るなり。

今や天來治癒の光明は彼が靈魂を遍照せり。彼は「その刺したりし基督を觀」、而して「光に命じて暗より照出でしめたる神かれの心を照らしたまへり」。彼は「耶蘇基督の面にある神の耀ける愛の光を見る。彼は視覺によりて「見ざる所」「神の深事をも」「憑據とする」所の神秘的憑據を有せり、況んや神の愛、耶蘇基督を信ずる者に罪を赦し玉ふの愛に於てをや。かれ今は得堪へずなりて叫んで「我主よ我神よ」

といふ。何となれば彼は「木の上に懸りて我らの罪を自ら己が身に任ひたまひし」基督に彼のすべての過は皆任はせられたるを見、神の恙は彼の罪を除き去りたまひたるを見たればなり。彼は今如何に明に「神基督に在りて世を己と和がしめ、彼に在りて神の義となることを得しめん爲めに罪を知らざる者を我儕の代りに罪人と爲し」及び彼れ自ら契約の血によりて神と和ぎたりしことを審にせしぞ。

是に於て有罪も罪の力も終りを告げぬ。彼れ今は「我れ基督と偕に十字架に釘られたり既われ生けるに非ず基督我に在りて生けるなり我今肉体(即ち此朽壞つべき體)に在りて生けるは我を愛して我が爲めに己を捨てし者すなはち神の子を信ずるに由りて生けるなり」といふことを得。又悔改も心の悲哀も創痍を蒙れる魂の苦痛もなくなりぬ、神うれひを歡樂に易へたまへばなり。神は彼を抓劈たまひたれどもまた醫すことを爲したまへり。又懼をいだく奴たることも終りぬ、何となれば彼れ主を信じて其心剛毅なりたればなり。彼れ今は神の怒を懼れんと欲するも懼るゝ

こと能はず、何となれば彼は怒の今は彼より離れ、神を視るに復た往日の怒れる審判者たるを以てせず、唯愛すべき父とすればなり。彼は上より賜はるに非らざれば他に一の權威なきことを知るが故に惡魔を懼るゝこと能はず。彼は天國の嗣業たるが故に陰府を懼れず、從て過去多年の間死を畏れて「つながれゐたりしも今は此死を畏れざるに至れり。かつ「地にある幕屋もし壞れなば神の賜ふ所の屋天に在り手にて造らざる窮りなく有つところの屋なること」を知るにより彼は此「天より賜ふ所の屋を衣の如く着んことを」いたく歎き頌へり。彼れ「此事に隱ふ者と彼を爲し、靈を其質として彼に賜ひし」ことを知るにより、「壞る者くちざる者を衣」ることを得んために地に在る此幕屋の壞れんことを歎き欲するなり。

蓋し「主の靈ある所には自由あり」、謂ゆる自由とは曾に有罪恐懼を免るゝのみならずして、其原罪即ち、諸の軛の最も重きもの、諸の羈絆の最も悪しきものより自由なるなり。彼が勞作は今や空しく徒らならず。圏套は解かれ、而して彼は救はれ

たり。彼は唯爭ふのみならず又之を壓し、唯闘ふのみならず又之に勝つ。彼は「今より罪に役へず」。彼は「罪に就いては死ぬる者神に就ては生ける者」なり、「罪を其死ぬべき肉體に」さへも「王たらしめず」、又「其慾に徇はず」。彼れ又「其肢體を不義の器となして罪に献ぐることなく、義の器として神に献ぐ。何となれば彼は「罪より釋るされ義の僕となりたればなり」。

かく「我主耶蘇基督に賴りて神と和ぐことを得」、「神の榮を望みて欣喜を爲し」、諸〻の罪諸〻の惡しき思望、氣質、また言行を制するの力を有するに至りたれば、彼は實に「神の諸子の榮なる自由」の活ける徵證なり、彼等諸子は皆同じ貴き、信仰の道を受けしが故に同音に「我らはアバ父と呼ぶ子たる者の靈を受けたり」と呼はるなり。

夫れ「彼等の衷に斷ねずはたらき彼等をして志を立て事を行はしむる」者は實に此靈なりとす。彼等の心に溢るゝばかり神を愛するの愛と人類を愛するの愛とを注ぎし者は此靈なり。此靈によりて彼等の心は世を愛することより、肉体の慾眼目の慾また勢より起る驕傲より潔めらるゝなり。彼等が忿怒驕傲より、また諸〻の邪情より救はるゝも亦此靈によれり。遂には彼等は惡しき言行より、また諸〻の清からぬ談話より免がれ、人の子を害せず、諸〻の善き行に熱中するに至るなり。之を要するに性來の人は神を畏れず又愛せず、「律法の下に在る」者は神を畏れ、「恩惠の下に在る」者は神を愛す。第一の人は神の事につきて之を視る光なく唯無上の暗黑のうちに歩めり、第二は陰府の怖るべき光を見、第三は天の歡ぶべき光を視るなり。死の中に眠れる人は僞りの平和を有し、目醒めたるものは絶ねて平和を持たず。而して信ずる者は眞の平和——其心に滿ちて治むる所の神の平和を有す。異教者は洗禮を受くるも受けざるも放縱淫蕩なる空想的自由を有し、猶太人若くは猶太戒規の下に在る者は重く慘ましき羈絆の中に在り、基督信徒は神の子等の眞實光榮の自由を受けて樂めり。目醒めざる惡魔の子は好んで罪を犯し、目醒めたる者は

喜ばざれども罪を爲す、然れども神の子は「罪を犯さず」又「自ら守りかの惡者これに觸ることを爲ざるなり」。更に之を約すれば性來の人は罪に勝ちもせず鬪ひもせず、律法の下に在る者は鬪へども勝つこと能はず、恩惠の下に在る者は鬪ひ又勝つなり、然り「彼を愛しめる者に賴り勝ち得て餘りある」なり。

第四。上來論ぜし如く人に性來的、律法的及び福音的の三樣の狀態ある明白なる事實あればとて、人類を分ちて眞實と輕薄との二種と爲し得ざるなり。啻に「子たる者の靈」を有せし時のみならず、「懼を懷く奴たる者の靈」を有する時にも、且又懼も愛も有せざる時にも人は眞實たることを得べし。何となれば眞實なる猶太人さへも基督教徒あるが如く又眞實なる異教徒あり得るは疑ふべからざる所なればなり。然らば則ち眞實とは人の神に受け容れられし狀態に在るを指したるものとは決して證すること能はざるなり。

されば卿等が眞實なるや否やのみならず「信仰に居るや否や自ら省み自ら試むべ

し」。卿等が靈魂を支配する所の主義は何なりやと精しく省試むべし(是れ卿等に重要なる關係あればなり)。謂ゆる主義とは神を愛することか。將た神を懼るゝことか。若くは愛もなく懼もなきことか。抑も亦世を愛し、快樂利潤を愛することか、安逸か名譽か。若し果して此の如しとせば卿等は猶太人にも遙に及ばざる者なり。卿等は猶異教者たるなり。卿等心に天を有せりや。常にアバ父と呼ぶ子たる者の靈を有せりや。若くは悲哀と恐懼とに壓し制せられて「陰府の腹の中より」神に叫ぶや。若くは此種の事には全く心を用ふるなく、わがいふ所の眞意を念想する能はざるか。異教者よ其假面を脫せよ、卿は決して基督を衣ざりき。素面にして立てよ。天を望み、窮りなく活ける所の神の前に懺悔せよ、卿は神の諸子のうちにも僕婢のうちにも分なきものなり。

卿等はたとひ何種の人にもせよ罪を犯せるや或は犯さゞるや。若し罪を犯しをるならば喜んで之を爲すか將た喜ばずして之を爲すか。其いづれにせよ神は卿等に

「罪を犯す者は悪魔より出づ」と宣へり。若し喜んで罪を犯すならば卿等は悪魔の忠信なる僕なり、其報を失はざるべし。喜ばざれども罪を犯さんか、亦猶其僕たり。然れども神は悪魔の手より卿等を救ひ玉ふなり。

卿等は日に諸の罪と闘へりや、而して日に之に勝ち得て餘りありや。然らばわれ卿等を認むるに神の子を以てす。嗚呼堅く立ちて卿等が榮ある自由に在れ。卿等闘へども勝たざるか、制せんと勉むれども達し得ざるか。然らば卿等は猶基督に在る信者に非ず、唯進むべし、さらば神を識るに至らん。卿等毫も闘を爲さず、安逸怠惰奢華の生活を送りつゝあるか。卿等は唯異教者のうちに笑柄たらしめんがために敢て基督の名を呼ぶや。醒めよ卿眠れるものよ。深き淵卿等を呑まざる間に卿等の神を呼べ。

而して何故に彼等は心を高ぶり思を過ごすや、又何故に彼等は其今在る所の狀態を辨識せざるや、思ふに此等三樣の狀態は屢ば相混淆し、或る程度に於て一人のう

ちに混同することあるを以ての故ならん。是れ經驗の示めす所にして、律法的狀態即ち恐懼の狀態は屢ば性來の狀態と混同するなり、何となれば罪の中に深く眠れる人も多少警醒しをらざる者は甚だ少ければなり。蓋し神の靈は人の顧呼を待ちをる者に非ざるが故に時として神は必ず人をして其聲を聞かしむ、神の靈は彼等をして恐懼せしむ、故に少くとも一時は異教者も自ら己を人にして人にあらざる如くに思惟す。彼等は罪の重荷を感じ、熱中して來るべき神の怒より免れんことを希ふ。然れども是れ一時の感激のみ、彼等稀れには認罪の矢に深く其靈魂を刺さるれども、忽ち自ら神の恩惠を充塞し、再び元の淤泥中に沈淪す。

之と同じく福音的狀態即ち愛の狀態に在る所の者も時々律法的狀態と混同することあり。何となれば奴にして懼を懷く靈を有てる所のものにして、常に希望なく在るものは少しとせず。さとくして恩惠ある神は稀れには人をかく絶望の域に置かしめたまへど、神は固より「我儕の塵なることを念ひたまひ」、且つ「人のこゝろ、

またその造れる靈の神の前におとろふる」ことを好み玉はざればなり。故に神かく善を示めしたまふ時には光の曙光を漏らして暗黒に在る人々を照したまへり。神は其善良の一部分を彼等の前に示めして、おのれは「祈禱を聽く神」なることを敎へたまふ。彼等は一の約束の信仰によりて耶蘇基督に存し在ることを見、而しておのれは猶遠く之に隔たれるが故に自ら奮ひ、「耐忍びて彼等の前に置かれたる馳場を趨り」、之に達せんとはするなり。

又何故に多くの人は自ら欺くや。思ふに是れ彼等は凡そ人なる者はいかほど迄に進歩發達し得るかを思はずして、猶甘んじて性來の狀態に留り、最善のものとしても律法的狀態に在るが故なり。夫れ人は同情憐憫を有し博愛慈善のものたるを得べく、慇懃、有禮、寛大、友情あるものたるを得べく、温和、忍耐、節制、其他の諸德の幾分を有し得べし。又諸〻の邪惡を脫し道德の或る高き階殿まで達せんとの多くの思望を心に有することを得べし。かれ又多くの惡を制し、正義、矜恤若くは眞實に大に背反する所の諸〻のものを抑ゆることを得べし。又多くの善を爲し、饑ゑたる者に食はせ、裸なる者に衣せ、寡婦と孤兒とを濟ひ得べく、公拜に出で、私禱を怠らず、多くの宗敎的良書を讀むことを爲し得べし。然れども彼は猶唯性來の人たるを免れずして、おのれ自らをも知らず又神をも知らず、懼の靈にも愛の靈にも均しく門外漢にして、悔改もせず、福音を信じもせざるなり。

而して試みにかゝる狀態に神の怒を甚だ懼るゝと共に罪の深き識認を加へ、諸〻の罪を脫し諸〻の義を完うせんとの激切なる思望と、屢ば希望を持して喜び、愛の閃光屢ば其靈魂に觸着ること等を加へしと想像せよ、然れども唯是等にては恩惠の下にある人、眞の活ける基督敎徒的信仰を有せる人なるを證し得ず、何となれば子たる者の靈いまだ其心に宿らず、斷じてアバ父よと呼ぶこと能はざればなり。

然らば則ちなんぢ基督の名を以て召されたる人よ、卿は猶卿の高き召呼の標的に遠くあることを心に警めよ。又警醒して世に善良なる基督敎徒と稱せらるゝ多くの

人と共に性來の狀態に在るを甘んぜず、若くは世より過分の尊敬を受け、概して之に滿足して生き且つ死する所の律法的狀態に在るを快しとせざれ。神は卿の爲めに一層優れるものを備へ置きたまへり、若し卿にして勉めて已まざれば必ず之に達せん。卿は惡魔の如く恐懼戰慄せんが爲めに召されしには非ずして神の使の如く喜び愛せんが爲めに呼ばれしものなり。「なんぢ心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して孫の神エホバを愛すべし」。卿「常に喜ぶべし」又「斷えず祈るべし」。「凡の事感謝すべし」。卿神の聖旨を奉じて其天に爲さるゝ如く地に爲すべし。嗚呼なんぢ「神の全く且つ善にして悅ぶべき旨」を證しせよ。今卿の身を「神の意に適ふ聖き活ける祭物」となして神に献げよ。「平安の神耶蘇基督に由りて其悅ぶ所を卿の心のうちに起し又卿をして其旨を行はせんが爲めに凡の善事に於て卿を全うせしめ」たまふまで前に在る所の此等の善きことに向て進み到り、「既に到れる所にありて同法に遵ひて行ふべし」。「榮光かれに歸して世々曁りなからんアーメン」。

聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す

羅馬書八〇十六

（一）自ら言說する所をも解せず、自ら確定する所をも識らず、此聖句を曲解して、おのが靈魂の、よし滅亡に至らしめざるも、大損害を招きし所の痴漢の何ぞ此世に多きや。又おのが心裡空想の聲を誤りて此の「聖靈の證」と爲し、從てみづからを神の子なりと愚にも臆斷して、而かも日々惡魔の工を爲しつゝある者の何ぞ多きや。此等の人々は最も惡しき意味にて眞の熱狂者と謂ふも敢て過言に非ざるなり。此等の人々殊に此誤謬に深く沈溺せる人々をして、過を認め正に歸せしめんとするは誠に至難の業なるべし。而して彼等をして自ら省み其非を悟らしめんと勉むれば、彼等は之を以て神に逆ひて戰ふ者となし、自ら許して「信仰の道の爲に力を盡して戰ふ」と稱し、其意氣の狂猛激烈なること尋常の方法にては到底彼等を匡正

することを能はず、我儕をして空しく「これ人には能はざる所なり」との嘆を發せしむるなり。

（二）されば斯る幻想の恐るべき効果に鑑み、これとは風馬牛も及ばざる隔遠の地に自ら立たんと勉むるより多くの思慮ある人々が時としては他の極端に傾くべきことは敢て驚くに足らざるなり。又此人々が他の一方にかゝる悲むべき誤謬に陷れる者あるなかに、我れ此證を有せりといふ者ありとも、進みて之を信せんとせざるも、怪しむに足らざるなり。又彼等がかく怖しくも濫用せられし言辭を更に用ふる者あらば直ちに之を熱狂一羅の者と同視するも、また彼等が謂ゆる此證なる者は原始時代基督教徒の特權なりと疑ひ、寧ろかの絶大なる賚物の一なる此證も往時唯使徒時代に屬せる者なりと想ふに至るも驚き怪むにも足らざることゝ謂ふべし。

（三）然りと雖も我儕には此兩極端の一に走るべき必要は一もなきに非ずや。我儕は中道に立ち、神の賚を否拒せず、神の子たる大特權を棄てずして、かの誤謬

熱狂の精神より遠かり、以て進み得ざらんや。然り我儕は慥に其中を守り得べし。我儕をして、爲めに、神の前に、神を畏れて左の二條を思考する所あらしめよ。

其一、この我儕が靈の證とは何ぞや、神の靈の證とは何ぞや、及び如何にして神の靈は「我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」るや。

其二、神の靈と我儕の靈との此共同的證は如何にして性來の人の預察と惡魔の蠱惑とより明白確實に判別せらるゝや。

第一。我儕をして先づ如何なる者か是れ我儕の靈の證なるかを考へしめよ。然れども茲に予が神の靈の證を我儕が靈の唯理的修證中に包括せしめんとする人々に切に望む所は此本題聖句に於て使徒パウロは單に我儕の靈の證のみにつきて語れるに非ざるや明白にして、實は全く我儕の靈の證につきて說きたるものや否や、又は唯り聖靈の證のみに付きても說きたるものに非ざるか疑はしき程なることを觀察せられんことなりとす。使徒は正に此前節に「爾曹の受けし靈は奴たる者の如く復び

慨を懐く靈に非ずアバ父と呼ぶ子たる者の靈なり」といひ、而して之に次ぎて「此の同じ靈は我儕の靈と偕に我儕が神の子たることを證す」といへり。（希臘原本此句中の前置詞（スン）は唯聖靈は聖靈が我儕をしてアバ父と呼ぶに至らしむると同時に之を證すといふことを示すのみなり。）然れども予は他の多くの聖句とすべて眞正の信徒の經驗とは各信徒に神の靈も彼の靈も彼が神の子たることを證して餘りあるを知るが故に此點につきては復た論せざる可し。

我儕の靈の證に關しては、其基礎の聖書の數多き章句にする嘗かれて、皆神の子たるの標號を示めして一見せば則ち明かなり。又古今の認者が之を寄せ集めて、極めて之を明亮にせり。若し誰にても猶一層之を明知ぜんと欲せば神の道を敎ふる者に就きて之を詢ぬるも可なり、或は密室にて神の前に之を沈思するも可なり、若くは此事につきて經驗ある人々と談話を試むも可し。又は神が人に與へ玉ひたる理性と智慧とを以て之を明かにせよ、蓋し理性なり智慧なり、宗敎は決して之を滅絶する者に

非ずして、却て之を完成せしむる者なり、――使徒の言に從へば「兄弟よ智慧に於ては嬰兒となる勿れ惡に於ては嬰兒となれ智慧に於ては成人となるべし」とあり、――人おの〳〵此等聖經的標號を自己に適用せば必ず我は神の子なるや否やを知り得べし。されば彼れ若し先づ「凡そ神の靈に」もろ〳〵聖き心と行とに「導かるゝ者は是卽ち神の子なり」を知らば（此事につきては彼は聖書に動すべからざる保證を有す）次に心に思らく予はかく「神の靈に導る」と、是に於て彼は容易に結論を下して、故に予は神の子なりといはん。

之と符節を合せたるが如きは聖ヨハネが其第一の書翰に述べし明白なる告白なりとす。第二章の三節に曰く「我儕若しその誡を守らば是に由りて彼を識れりと自ら曉るべし」。五節には則ち曰く「凡て其道を守る者は神を愛するの愛誠に其衷に於て完全す是に由りて我らが彼に在ることを自ら曉る」、卽ち我儕が實に神の子たることを曉るなり。廿九節に「爾曹は主の公義を知るに由りて公義を行ふ者の皆主の

生ひところなるを亦しる也」といひ、第三章十四節には「我儕兄弟を愛するに因りすでに死を出でゝ生に入りしことを自ら知る」、十九節には「是に由りて我儕眞理より出でしを知り且我儕心を主の前に安んずべし」、即ち我儕が「愛するに言と舌とを以て相愛することなく行と實とを以てす」るが故なり、第四章十三節には「かれ既に其(愛する所の)靈を以て我儕に賜ふ是に由りて我儕の彼に居りかれの我儕に居ることを知る」といひ、又第三章廿四節に「我儕その賜ふ所の(從順の)靈に由りて即ちそのわれらに居給ふことを知れり」といへり。

世の原始より今日に至る迄神の恩惠と耶蘇基督の智識とに深く通じたる者としては、此等の詞を書きし時の使徒ヨハネと此等の詞を受けし當時の基督に於ける師父等よりも優りたる者は決して神の子等のうちにあらざることは疑ふ可からざる所なりとす。かく神の恩惠に浴し基督を深く識る所の使徒みづからも又神の殿の柱石ともいはるゝ師父等と雖も決して彼等が神の子たることの此等の標號を否認せること

なく、又彼等の信仰を確固にする爲めに此等の標號を彼等の靈魂に適用せしことは爭ふべからざる事實なり。而して是れ實に辨理的徵證即ち我靈の證、我儕が理性智慧の外ならざるなり。畢竟するに凡そ此等の標號を有する者は神の子なり、而して我儕は此等の標號を有せり、故に我らは神の子たるなり。

論者曰く然りと雖も我儕が此等の標號を有することは如何にして知り得べきや。我儕が神と隣人とを愛すること、及び神の誡を守ることは何によりて知るべきやと。須らく注意すべし、此疑問たるや、如何にして此事の我儕みづから知り得べきや(他人に知らるに〳〵非ず)といふに在り。然れば予は論者に反問せん、卿が今活けるは如何にして卿に知り得らるゝや。卿は今安樂にして心勞なきは何によりて卿之を知るやと。卿は直ちに之を意識せざらんや。之と同一直接の意識に由りて、卿は卿の靈魂に神が對して活けることを知り得べし、若し卿は驕傲なる忿怒を悔ゆるの苦痛より救はれ、温柔靜穩の精神のやすきを有するならば卿は神につきて活ける

者ならずや。之と同じ方法にて卿が若し神を愛し、神を喜び、神に在りて滿足せしならば之に由りて卿が神の子たるを知るべく、若し又卿が自己の如く隣人を愛し、凡ての人類に抑ふべからざる愛情を有し、柔順耐忍に缺くる所なくんば卿は直ちに能く神の子たることを確むべし。又神の子たる外部の標號即ち使徒ヨハネの言に從へば神の誡を守ることに關しては、若し卿が神の恩惠によりて能く之を守りをるならば疑もなく卿みづからの胸中に之を知るなるべし。若し卿は森嚴と敬虔とを以て神の名を口にせざることなきならば、又若し安息日を聖く守ることを記憶するならば、父と母とを敬ふならば、人に爲られんと欲ふ如く卿も人にするならば、卿の身体を清くし自重するならば、若くは飲むにも食ふにも節を踰ゑず神の榮の爲めに爲すならば卿の良心は日に日に之を卿に告げてわやまりなかるべし。

是則ち我儕の靈の證なり、心も聖く行も潔くわらせんとて神が我儕に與へ玉ひし所の我儕の良心の證なり。是れ子たる者の靈を以て、神の道に記るされし心、神

の慈嗣に屬する所の心、即ち神と人類とを愛し、小兒の父母に賴るが如く天の父なる神に信賴し、神の外何をも望まず、諸の心勞を神に委ね、熱中眞摯の情感を以て凡て人の子を愛し、兄弟の爲めに生を棄つるを意とせざること猶基督が我らの爲めに生を棄て玉いしが如き所の心を我らが受けしことの意識なり、――神の靈に由りて我らの内部が神の子の像に形成せられしこと、我儕が公義矜恤及び眞理に遵ひて神の前に歩み、其目に嘉みし玉ふ諸の事を行ふことの意識なり。

然れども此われらの靈の證に附加連結する所の神の靈の證とは何ぞや、如何にして其靈は「我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」るや。嗚呼「神の深事」を說明さんとするには人間の用語に其的當せるものなきを感ず。實に神の子が經驗せる所を正しく言ひ顯はし得べき者は一人もなかるべし。されど試に之をいはん(若し神より敎へられし人あらば願くは予が言辭を正し、やわらげ、强めんことを)聖靈の證とは靈魂に於ける内部の印象にして、之に由りて神の靈が予の靈に予は神の子な

ることを直接に證し、耶蘇基督は予を愛し、予の爲めに己を棄て玉ひしこと、及び凡て予が罪は拭ひ取られ、予、われの如き者さへ神と和げることを證することなりと。

この神の靈の證は、凡そ事物の性質として我儕の靈の證に先だゝざる可からざることは左の單一なる考察より知るを得可し。即ち我儕が能く心も言行も聖しと意識し得る前に現に聖くあらざる可からず、又我儕が內外共に淨聖なりとの我儕が靈の證を有するに先だちて現に淨聖ならざる可からざる是なり。且つ我儕が能く全く聖くあり得るに先だちて、まづ神を愛せざる可からず、是れもろ〳〵淨聖の根元なればなり。而して我儕は神が我儕を愛し玉ふことを知るまでは神を愛することは能はざるなり。「われら神を愛するは彼先づ我儕を愛するに因れり」。而して神が我儕を赦し玉ふの慈愛は神の靈我儕の靈に之が證を爲すまでは知ること能はざるなり。是故に神の靈の證は神を愛すること及びもろ〳〵の淨聖に先だゝざる可からず、從て又我

儕が內部に於ける此等の意識、即ち此等に關する我儕の靈の證に先だゝざる可からざるなり。

他の時にあらずして其時のみ——神の靈が「神なんぢを愛しなんぢの罪の爲めに其子を遣はして挽回の祭物とし」、「神の子なんぢを愛し其血を以て我儕の罪を洗潔め」しと我儕の靈に證を爲す其時——かく神はまづ我儕を愛し玉ふが故に我儕は神を愛し、及び神の爲めに又我儕の兄弟を愛するなり。而して此事につきては我儕自ら之を意識するの他あらざるなり、即ち我儕は「神の我儕に賜ひし所の者を知る」なり。我儕は自ら能く神を愛し其誡を守ることを知る、而して此に因りて「我儕は神に屬ける者たるを知る」なり。是れ實に我儕が神を愛し、其誡を守らん限りは、神の靈と偕に「我儕が神の子たること」を證する所の我儕の靈の證なりとす。

是故に我儕の靈の證よりして、神の靈の作用を排斥し去るは最も不當の事なりと

す。神の靈は實に我儕の衷に働きてすべての善を爲さしめ玉ふのみに止らずして、又其みづから爲し玉ふ所の工を明に表はし玉ふ者なり。故にパウロは我儕が聖靈を受くるの一大目的として「是れ神の我儕に賜ひし所のものを知るべきためなり」といへり、詳言すれば「神の賜ふ所の丹心と信實と」に關して神が我儕の衷心の證を强うし、及び一層十全强固の光明を以て我儕が今神を喜ばしむる所の事を爲すを辨識する力を與へ玉はん爲めなりと。

猶一疑問の或は存すべし、神の靈は如何にして諸〻の疑惑を排除し盡し、我儕が子たることの眞實不妄を證明する程に「我儕の靈と偕に我儕が神の子たることを證するやと。然れども之に對する答辯は前陳の論究に由りて見る時は自ら明亮なるべし。先づ我儕の靈の證につきていはゞ人の靈魂はその神を愛し、樂み、神に在りて喜べる時親しく且つ明かに之を知ることは猶地に屬ける或物を愛し喜べるの時我は何物を愛し何物を喜ぶと知るに異る所なし。又神を愛し樂み、喜ぶや否やを疑はざ

るは猶おのれの存在しをるや否やを疑はざると同じ。故に之を正しく推論する時は。

凡そ今神を愛し、謙虛なる喜悅と、聖さ樂みと、從順なる愛とを以て神を樂み悅ぶ所の者は神の子なり、

而して予はかく神を愛し、樂み、神に在りて喜べり、

故に予は神の子なり、

されば凡そ基督信徒たる者はおのれが神の子たることを如何にするとも疑ふ能はざる者なり。前命題に關しては彼は其保證を握ること猶聖書は神より出でたる者たるの保證を有するが如し、而して彼が斯く神を愛することに關しては確乎たる內部の證憑を有せり。かくの如く我儕の靈の證は最も較著なる自信を以て我儕の心に表顯して、如何なる尤もらしき疑惑も我儕が子たることの眞實不妄なるを動かす能はざらしむ。

神的證の人心に表顯せらる態樣なる如何なるやは、予は敢て之を說明するを辭す可し。是れ實に奇異超凡の者にして、予の未だ達し能はざる所なればなり。夫れ風はおのが儘に吹く、われ其響を聞けども、其如何にして來り、如何にして往くやを いふ能はず。抑も人の事は其人に存する所の靈を除きては何人も他より之を知り得ざるが如く、神の事の態樣は神の靈の外は誰も知るを得ざるなり。然れども予が知る所の事實は是れなり。即ち神の靈は信徒に前條の如きその子たる者の證を與ふることと、その證の靈魂に現存する間は彼は其子たることの眞實不安を疑はざること猶赫々たる光線の下に立つて太陽の照灼を疑はざるが如きことなり。

第二。神の靈と我儕の靈との此共同的證は如何にして性來の人の預察と惡魔の蠱惑とより明白確實に判別せらるべきか、是れ第二に考察すべき者なり。而して此は凡そ神の救拯を望む所の者は其靈魂を欺かざらんために最も細心に考究するを要す。從來之を誤り解せし者は大概最も恐るべき結果を來せるが如し、否ひしろ之を

誤りしが爲めに、遂に此誤謬を發見するも既に之を救濟する能はざる者ありき。

まづ此證は如何にして性來の人の預察より判別せらるべきかを究めん。蓋し自己の心中に毫も罪を認識せざる者は常に自己に諂ひ易く、自己當然の位地よりも、殊に精神的事物に於て、高く自ら價を付す、故におのが肉の心にて傲然自ら許す所の者は眞正なる基督信徒の此特權あるを聞く時は則ちおのれも既に之を有せりと信じて、自ら省る所なきは怪ひに足らざるなり。かゝる事例は今日世間に甚だ多く、又往昔より世々珍らしからざる程に多き者なり。吁聖靈と我儕の靈との眞の證は如何にして此墮罪すべき預察より判別せらるべきか。

予之に答へて曰はん、聖書は眞の證の判別せらるべき表號を記して紙上に相望めり。聖書は最も明白に神の靈と信者の靈との眞正なる共同的證の起る前後と其當時の情況とを記載せり。若し何人にても此聖書の語に注意を怠らずば其光明を暗まし、誤謬に陷ることなかるべし。彼れ必ず聖靈の眞證と僞證との間には天壤の差あ

るを知らん、而して其差は予は敢て此證の眞僞を混同する恐なき程の者なるを斷言せんと欲す。

故に神の賚を既に有せりと臆測したる所の者は自ら省みるあらば必ずやおのれは此迄全く惑はされ居て、欺罔を信じたりしことを知るべし。何となれば聖書は此賚の來る前後及び當時に於ける標號を最も明白に記るしあれば、彼にして少しく衷に反省せば、疑もなく此等の標號はおのが靈魂には一も在ることなく、神の賚には全く與りをらざることを認むべければなり。一例を擧ぐれば聖書は悔改、即ち認罪は常に救罪の此證に先だつものなることを記せり。故に曰く「悔改めよ天國は近づけり」、「悔改めて福音を信せよ」、「爾曹おの〳〵悔改めて罪の赦を得んためにバプテスマを受けよ」、「是故に爾曹罪を悔い「心を改めて其罪を抹る〻ことをせよ」、と。されば我教會も此等の語と同じく悔改を以て、罪の赦即ち其證に先きだつ者とせり、曰く「神は凡て信實に悔改め、聖き福音を信ずる者を赦し玉へ」、又

「大能の神は凡て心より悔改め、眞の信仰を有して神に歸せるものに罪の赦を約束し玉へり」と。然れども彼の傲然自ら許す所の者は此悔改を爲さゞる者なり、決して壞れたる心を知らず悔恨を嘗ざる者なり、「罪の記憶」は決して「悲しからず」又「堪へがたき重荷」とを思はざるなり。されば此等の語を彼は教會に在りて反覆するも心は其口にする所と同じからず、彼は唯神に虛禮を呈するのみ。是れ全く神の工の先驅たる悔改を爲さず、徒らに空影を捉へて、未だ神の子たる眞の特權を知らざるに坐するなり。

又聖書は我儕が神の子たるの證に先だつ所の者なる神に由りて生るゝことを大なる變化として記せり。即ち「暗を離れて光に就き」、「サタンの權を離れて神に歸し」、「死を出でゝ生に入る」の變化、死より甦る所の變化なり。パウロはエペソ人にかく曰ひぬ「神は愆と罪とに死にし所の爾曹をも生かし玉へり」、又「罪に死にし時にすら我儕を基督と偕に生かし、又耶蘇基督に在るわれらを彼と偕に甦らせ共に

天の處に坐せしめ玉へり」といへり。然れども彼の自ら許るす所の人は、惡ぞ此の如き變化あるを知らんや。彼は全然此事には門外漢なり。是れ彼の了解せざる所の語なり。彼は鄉等に告げて曰はん「我は從來久しく基督教徒なり。我はかゝる變化の必要を知らざるなり。故に彼若し自ら省察する所あらば彼は聖靈に由りて生れざること、彼は決して未だ神を識らざること、而して人の聲を神の聲として誤りをれることを知るべし。

よしや彼が過去に於て此事を經驗せしや否やを論究せずとも、若し現今の標號如何によりて我儕は容易に神の子を自欺者の預察より判別し得るなり。聖書には聖靈の證に隨伴する所の主に於ける喜悅を謙卑の喜悅即ち自己を塵芥の如くにせる喜悅として記し、又罪赦されたる罪人をして「我は賤しき者なり我は何ものぞやわが父の家はなにぞや今は目をもて汝を見たてまつる是をもてわれ自ら恨み塵灰の中に在りて悔ゆ」と號叫せしむることを書せり。而して謙卑の人には必ず柔和忍耐温順

の諸德存し、和易從順あり、言辭の形容し能はざる温厚快適、精神の優美あり。然れども此等の果は果して預察自欺者の心中聖書の假想的證に隨伴せりや。否決して然らず。彼れ神の眷顧に信任すること益す篤ければ益す揚々意氣昂り、自ら贊し自ら稱する愈よ甚しければ其行爲や愈よ驕傲にして不遜なり。自ら其證を有せりと信ずること益す强ければ、益す廣く周圍の人にはこり、他の非難を聞くを喜ばざるの念愈よ盛んなれば愈よ反駁辯護の熱情を抑ふること能はず。彼は一層柔和温順にして、人に教ふるに足り、「聽くことを速にして語ることを徐く」することはせずして、却て一層聽くことを徐くして語ることを速かにし、何人よりも學ばんとはせずして、其心猛く其氣激し而して其言語に忿怒を表はすこと益す多し。否恐くは時として其容貌に猛烈の相を示めし、其語態其擧動の激甚なること恰も神によらず彼みづから赤手を振つて「仇敵を焚滅さん」とて進みゆけるが如きことあらん。

猶之を言はん、聖書に「神の誡を守るは是れ則ち神を愛するなり」即ち其確乎た

る標號なりと敎ふ。我主も亦宣へり「我誠を有ちて之を守る者は卽ち我を愛するなり」と。抑も愛なるものは喜んで從ふ者なり、何事によらず基督に嘉納せらるべきことを爲すなり。眞に神を愛する者は其聖旨をその天上に成る如く此地にも成さんと勉む。然れども此神の愛を識れりと詭はる所の者の性質は能く此の如くなりや。否彼の愛は彼に與ふるに神の誡に順はず、之を破り、之を守らざるの自由を以てす。思ふに彼れ嘗て神の怒を恐れたりし時には、神の旨を爲さんと務めたるなるべし。然れども今やかれおのれは「律法の下に在らず」と思惟したれば復た之を守るの要なしと思へり。是故に彼は善を爲すに熟心ならず、惡を避くるに勉めず、自己の心を守るに恐懼の念乏しく、其舌に轡をかくること少し。彼は又自己を鞭打し、日に主の十字架を取るに心を用ゐず。一言にいはば彼は自ら自由となれりと想像せしより彼の性行は全く一變せり。彼は復た「神を敬ふことを自ら修行」せず、「血肉と戰ふのみならず政(惡魔の)また權威と戰ふ」ことをせず、困苦に堪へず、「窄き門に

入るために力を盡」さゞるなり。彼は實に天に往〳〵の容易なる道、廣濶平坦百花歷亂の道を發見せり、而して曰く「靈魂よ安心して食ひ飲み樂めよ」と。此の如きを以て聖靈の證と爲すが故に眞のおのが證を有せざるは最も覩易きの理なり。謙遜柔和從順等の彼が有せざる標號を有せりとは彼れ決して意識すること能はず。眞理の神の靈は斷じて欺罔に證を爲すこと能はず、又彼が現に惡魔の子たることを表はす時に神の子なりと證すること能はざるなり。

なんぢ憐むべき自欺者よ——自ら神の子たりと僭信し、「予は衷に證を有す」と言ひ、隨てもろ〳〵卿の敵に抗する所の者よ、深く自己の眞相を見よ、卿は襤褸にかけられ、潔めのはかりにだに其量の足らざるを表はせり。主の語は卿を試み、卿の惡銀たることを證せり。卿は心謙卑ならず、故に今日に至るまで耶蘇の聖靈を受けざりき。卿は温和柔順ならず、故に卿の喜悅の半錢の價なく、主に在るの喜悅に非ず。卿は其誡を守らず、故に彼を愛せず、また聖靈を受くるに與るを得ず。其効

果として、彼の靈は卿の靈と偕に卿が神の子たることを證せざるは理の當然明白なることなり。嗚呼卿よ卿は卿の眞に價なきを悟り、卿が天に知らるゝ如く能く自ら知り、死の宣告を自ら受け得ん爲めに主に號呼して、死者を甦らす所の聲の「心安かれ爾の罪赦るされたり、爾の信仰爾を愈せり」いふにまで及べ。

人或は曰はん「然れども自ら眞の證を有する所の者は如何にして預察より之を判別し得るや」と。予は反て問はん、卿は如何にして晝を夜より判別するや、卿は如何にして光を暗より判別するや。若くは星光又は風前の燈火の光を正午太陽の光より判別するや。此二者の間には特有にして明白なる差異の存するに非ずや。卿の感覺性にして若し異狀なくんば二者の差異は一見して辨知し得べきに非ずや。之と同じく精神的光明と暗黑との間には各特有明白の差異ありて存す、義の太陽の我心を照らす光と「我儕が燃やしたる火把」より發する微なる光との間には大なる差異あり。而して亦此差異は我儕の精神的直覺にして正しからば一見して之を判別し得べし。

抑も此二者の、內附的標號を區別し、神の聲を識る所の一層精細にして哲學的なる態樣を問ふ者あらば是れ我儕の、否神の事に甚深き知識を有する者に非ざるよりは決して答ふること能はざる要求を爲す者と謂ふ可し。試にパウロがアグリッパの前に立ちて應答するの際アグリッパ若し「爾は神の子の聲を聽けりと言ふ。然れども何に因りてその神の子の聲なりしを知るや。如何なる內附的標號を以て之を神の聲と知れりや。神又は神の子の聲を人又は天使の聲より區別する所以の態樣を我に語れ」と問ひしと假定せよ。卿等はパウロは嘗て此の如き無智の要求に應ずるならんと思ふや。誰か此の愚を爲さん。然れどもパウロは其聲を聞きし時直ちに之を神の聲なりと信せしは疑を容るゝを要せず。然れども何に因りて彼は之を神の聲と識りしぞ、誰か能く之を說明し得ん。おもふに人も天の使も能はざる所ならん。

猶一層精細に考察せんに、試に神は今人の靈魂に「爾の罪赦されたり」と宣いしとせん、——神は必ず其靈魂が其聲を辨識するを欲し玉ふ可し、否らざれば神の聲は

徒事に歸すればなり。神は必ず彼をして之を辨識せしめ玉ふ可し、何となれば神の欲する如く事の成るは神に於ける常なればなり。神はかく彼をして辨識せしむ、而して其靈魂は斷々乎として「是れ神の聲なり」と確言せん。然れども衷に此證を有する者は之を有せざる所の者に此聲を說明すること能はず、又その之を說明せんなどとは是れもと分外の事なればなり。若し神の事を未だ經驗なき人に證明すべき自然的媒介物、もしくは說明すべき自然的方式あらんには性來の人も神の靈の事を曉り知るを得ん。然れども此はパウロが「靈のことは靈によりて辨ふべき者なり」即ち性來の人の有せざる所の精神的感覺性に由りてのみ辨識すべき者なりとの斷言に反するなり。

「然れども如何にして予は予の精神的感覺性の正しく眞なるやを知るべきか」。是亦甚だ重要の問題なり。蓋し人若し此點に於て語らば彼は限りなき誤謬蠱惑の道に彷徨せざるを得ざればなり。夫れ予は神の靈の聲を誤らずと斷言し得る所以の者は

實に我靈の證、即ち「神を求むる善良心の答」に因りてなり。神の靈が卿等の靈に作用きたる果によりて、卿等は神の靈の證を知るべし。此に由て卿等は決して惡魔の蠱惑に陷らず、自ら欺き居らざることを知る可し。心に於ける聖靈の直接の果は仁愛喜樂平和慈悲謙遜柔和温順忍耐なり。外部の果は諸人に善を爲し、一人にも惡を加へず、光に歩み、神の凡ての誡に熱心にして能く之を守るなり。

此果に由りて卿等は神の聲を惡魔の蠱惑より判別するを得べし。惡魔の驕傲なる靈は神の前に卿等を謙遜ならしむる能はず。又其靈は卿等の心を和ぐることも、また神を慕ひて切に歎き而して後至孝の愛に至らしむることも爲すこと能はず、また爲すことを欲せず。夫れ卿等をして隣を愛せしめ、柔和温順忍耐撙節其他神の武具を卿等に着せしむるものは神と人との仇の敵にあらざるなり。其惡靈は自ら離叛することをせず、又おのが工なる罪の破壞者に非ず。否「惡魔の工を毀たんが爲めに」來りし神の子の外は誰も罪を毀つこと能はざるなり。故に淨罪は神より出で、

罪は惡魔より來るの明なるが如く、卿等が衷に有する證はサタンより來りしに非ずして神より出でたるは爭ふべからざるなり。

されば卿等は須らく「その言と盡されぬ神の賜によりて我神に感謝す」、われに我が信ずる所の基督を敎へ、「その子の靈をわが心に遣りてアバ父と呼ばしめ」、而して今や「我が靈と偕に我が神の子たることを證」せしめ玉ひし所の神に感謝す可し。

啻に卿等が口に於てのみならず、日々の行爲に於て神を讃美すべし。神は神の有として卿等に印せり、されば神の物なる卿等の身体及び精神を以て彼に榮光を歸せよ。愛せらるゝ者よ、若し卿等自ら此希望を有たば神の潔きが如く、卿等自己を潔くせよ。卿等をして神の子と稱せしめ玉ひし愛の如何ばかりなるかを見ば、卿等宜しく「肉と靈との凡ての汚を去りて自己を潔くし神を畏れて聖潔ことを成就すべし」、而して凡て思想言行を精神的祭物となし、基督耶蘇に由りて神に嘉納せらるべき聖きものと爲さしむべし。

聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す

第一。抑も聖書は神の言たることを信ずる所の者にして、能く此聖句の如き眞理——啻に一回のみならず、又曖昧的ならず、偶然的ならず、却て幾度も明白なる言詞を以て、且つ嚴かに、又神の子が一種獨絶なる特權の一を示せる確乎たる目的を以て聖經中に表顯せし眞理——の極めて重要なることを疑ふ者あらざるなり。

而して此眞理や右にも左にも陷るべき危難あるがゆゑに、之れを說明し之れを防護するの益す必要なるを見るなり。若し我儕にして之れを否拒せんか、恐くは我儕の宗敎は唯形式的のものとなり。「彼等敬虔の貌あれど實は敬虔の德を棄つる」の危難あり。若し之れを許容せんか我儕は何物を許容したるかを覺らずして、熱狂の陋態に陷り易からんとす。是故に最も力を盡して此重要なる眞理の聖經的合理的說

明と論定とを爲し、此二種の危難より神を恐るゝ所の人々を護るは必要なること〻す。

且又此問題に關しては明白に記述したるもの殆んどなく、稀に見る所の者は其論毫も肯綮に中らずして岐路に亘るが故に、予は茲に説明を爲すの一層已むべからざるを感ずるなり。蓋しこれら杜撰の論は職として「其語る所その定論ところの事を自ら知らざる」所の者の未熟にして非聖經的、不合理的解釋に由らずんばあらざるなり。

而して此教理を理解し説明し防護するは今日メソヂストと稱せらるゝ我儕に取りて當に爲すべきことなり。何となれば是れ神が全人類に證せよとて我儕に與へし修證の一大部分なればなり。實に多年間殆んど埋沒遺失せし此太なる福音的眞理の發見せられたることは聖書を探索る故を以て神が特に我儕に與へ玉ひし祝福にして、神の子等の經驗に由りて斷定したるものなり。

第二。然り而して聖靈の證とは何ぞや。曰く神の靈が我儕の靈に與へたる、又我儕の靈と偕に證する證なり、聖靈は證する所の者なり。彼が我儕に證する所のことは「我儕が神の子たること」なり。此證の直接の結果は「靈の結ぶ所の果」即ち「仁愛喜樂平和忍耐慈悲良善」なり、若し之れ無くんば其證は繼續する能はざるなり。何となれば曾に外部の罪を犯し、若くは知悉せる義務を懈怠せしのみならず內部の罪の一にだに制し得ざることあらば、一言にていへば神の聖靈をかなしますることあらば直ちに此證は毀滅せらるべければなり。

往年予嘗て論じて曰く「神の深き事を人間の言語を以て説明せんとするは至難のことなりげにやや神の靈が神の子等の衷にはたらくことを明白に説明し得たる者なし。然れども思ふに聖靈の證すなはち靈魂內部の感激印記により神の靈は直ちに予は神の子たること、耶蘇基督は予を愛し、予の爲めに自らを棄て玉ひしこと、凡て予が罪は拭ひ取られ、予、予の如き者さへ神と和ぐを得たることを予が靈に證せり

と曰ひ得る者あらん（願くは何人にても神より教へられたる者あらば此ことばを訂正し、順婉にし若くは、雄渾にせんことを）」と。

爾後二十年の久しき予は之につきて思考を費したれども其一言一句を改定すべきことを見ず。又一層解し易からしめん爲めに如何に其辭句を變化すべきやをも知らざるなり。而して唯言はんと欲することは神の子等のうち何人にても猶一層明白に一層神の言に合へる所の他の辭句を教示するならば予は予の此言を排棄すべしとの是なり。

又同時に予が言はんと欲する所は予が此言は神の靈はある外部の聲を以て之を證すといふには非らざると、又は內部の聲を以て、よしや時には之れありとするも、常に證し給ふといへるにも非らざることなり。又予は神は常に聖書の一二若くは四五の辭句を人の心に適合せしむ（たとひ數次神はかく爲したまへど）と想像するにも非ず。然れども神は其直接の感化と其强大にして口に言ふ能はざる働きとを以て人

の靈魂をして其强風怒濤は鎭りて、安和平靜とならしめ、其心情をして恭督の晩に倚りて平かに、罪人をして明かに神と和ぎ、すべて（其不法は免るされ其罪は蔽はれ）たることを知りて安んぜしめ玉ふことは爭ふ可からざることなり。

而してかゝる論辯を爲すに至りし本元の題目は何ぞや。謂ゆる聖靈の證なるものは果してありや否やに非ずや。聖靈は我儕の靈と偕に我らが神の子たるを證するや否やに非ずや。何人も明白に聖書の矛盾を論證し眞理の神を欺騙者とすることなくば決して之を否拒する能はざるなり。故に聖靈の證なるものゝ必ず在ることは萬人の認承する所たり。

又我らが神の子たることを證する間接の證ありや否やは更に疑問を要せざることなり。是は神に對ふ善き良心の證と、全くといふを得ずば、殆んど同一の者にして理性の結果若しくは我儕が自己の靈魂上に感ずる所の回想の結果なり。精密に之をいへば一部分は神の言より、一部分は我儕自己の經驗より考究したる結論なり。神

の言はいはく、靈の結べる果をもてる者は皆神の子なり、經驗卽ち心中の意識は予に告ぐるに予は靈の果を有す、故に予は神の子なりと合理的に結論せることを以てす、是れ亦衆人の認許する所にして一の矛盾する所あるなし。

我儕は又靈の結べる果なくして、而も能く聖靈の眞の證ありと論定せず、却て靈の果は此證より直接に生ずる者なることを論定するなり、而して常に同一の程度に在る者に非ず、初めに此證の與へられし時にてだに然り、況んや其後なるをや。又喜樂平和も常に同一の分量に留らず、況んや仁愛をや、猶此證の常に均しく強固明白ならざるが如し。

然りと雖も疑問の要點は聖靈の直接の證は畢竟ありや否やなり。其結べる果を心に意識して始めて生ずる證の外に猶他の聖靈の證ありや否やなり。

第三。予は之れ有りと信ずる者なり、如何となれば是れ本文「聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」の明白にして自然なる意義なればなり。此句

中に神の靈と我儕の靈とかく二種の靈の、同じく共に一事を證するを記せるは明に人の皆見る所なり。ロンドンの故の監督嘗て此本文を題として說教せしが、人の此事を疑ひしを驚き異みしもの〻如し。監督曰く「我儕の靈の證は一なり、卽ち我儕の誠實を意識せるものなり」と、卽ち猶一層明白にいへば聖靈の結べる果を意識せるものなり。若し我儕の靈にして此果卽ち仁愛喜樂平和忍耐慈悲良善を意識せば、こは我儕が神の子たりとの前提より容易に推度したるなり。

かの監督が他の證は「我儕の善工の意識」なりと想像したるは可なり。彼は之を以て神の靈の證なりと斷定せり。然れども此は我儕の靈の證、普通に之をいへば信實の中に抱有せらるゝなり。故にパウロも「我儕の良心我儕の神の賜ふ所の丹心と信實とに由り世に在りて行を爲せりと證す是れわが誇る所なり」と言ひにき、此に由て之を觀れば信實は我儕の言行に關連を爲し、少くとも我儕が內部の性質に關係せることは明白なり。故に此は他の證に非ずして彼が嚮にいひし所の者と同一なり、

即ち我らの善工の意識は唯われらの信實の意識の一分枝なり。されば唯一の證の猶之れあるのみ。故に若し本文聖句に二の證を言ふならば其一は我儕が善工の意識にも非ず、又我儕の信實のにも非ず、これらは凡て明に我儕の靈の證の中に抱有しあるなり。

然らば則ち他の證とは何ぞや。是れ此本文聖句にて十分明白ならずとならば其前節「爾曹の受けし靈は奴たる者の靈に非ずアバ父と呼ぶ子たる者の靈なり」とあるによりて容易く知ることを得べけん。

而して此は其同旨なる加拉太書四〇六に一層明に示されぬ、いはく「神其子の靈を爾曹の心に遣りアバ父と呼しむ」と。是れはゝ直接的の者にして、回想論辯の結果に非ざるにあらずや。此靈は其我儕に與へられしや否や我儕の心にアバ父と呼び、決して我儕の信實の上に回想することに先ち、如何なる論理にも先つに非ずや。又これ此語の明白自然の意義にして、人の此語を聽くや否や彼を感動せしむる

所の者に非ずや。

神の靈の證は其性質上よりして、我儕の靈の證に先たざる可からざることは、左の單純なる理由によりて知るを得べし。即ち我儕は自己が能く淨聖なることを意識し得る前に先づ心と言行とに於て淨聖ならざる可からず。然れども我儕は能く全く淨聖となり得る前に須らく先づ神を愛せざる可からず。是れ實に凡ての淨聖の根元なり。而して我儕は神が我儕を愛し玉ふと知るまでは神を愛することを能はず。ヨハネ曰はずや「われら神を愛するは彼まづ我儕を愛するに因れり」と。我儕は實に神の靈が我儕の靈に證せしまでは神が我らを愛し玉ふことを知る能はざるなり。此證の來るまでは我儕は之を信ずること能はず、又「今われ肉体に在りて生けるは我を愛して我が爲に己を捨てし者すなはち神の子を信ずるに由りて生るゝなり」といふ能はざるなり。

たゞかくありてこそ我儕は

かれの血しほをたうとび、
おほいなるよろこびもて汝は
我主よ我神よと呼ばふなれ。

かく神の靈の證は神を愛すること、及び諸の淨聖に先立つものなるが故に、從て此證は我僻の意識にも先立たざる可からざる者なり。

此聖經的教理を確固にせんために、神の子等の經驗を必要とす、是れ二三若くは七八人のみに非ずして何人も數ふ可からざる大衆の均しく有せる經驗なり。是れ實に古今を通じて「雲の如き許多の證據人に」の證によりて以て確固にせられき。是れ實に卿等の經驗及び予が經驗によりて以て確固にせらる。聖靈みづから予が靈に予が神の子たりしことを證し、其徵證を予に與へ、予をして直ちにアバ父と呼ばしめ玉ひき。而して予は(卿等も亦)予が聖靈の結べる或る果に回想し、若くは意識せしに先ちてかく神を呼びき。仁愛喜樂平和其他聖靈の結べる凡ての果の我に存するに

至るは此證を心に受けしより來るなり。故に予は第一に聞きし所は

汝が罪は赦されぬ、汝は受けられぬ、
われかく聞きて、天は我心にあらはれぬ。

なり。

且又此事や實に神の子輩——神の靈により直接に證せられしまでは彼等は決して神の眷愛の下に在るを知らざりしことを公言せる幾千百の神の子等の經驗によりて確固にせらるゝのみならずして、又自己の罪を認め、神の怒自己の上に留ることを感せる所の人々によりて益す此事の確固なるを證明せらるゝなり。此等の人は神は「彼等の不義を恤み其罪と惡とをまた意に記めざる」者なることを彼の靈によりて直接に證せらるゝに非らざれば決して滿足する能はざるなり、試に此等の人に告げよ「卿等は神が卿等の心に作し玉ひし事に回想し、又卿等の仁愛喜樂平和に反顧して卿等は神の子たることを知るべし」と。而して其人は直ちに對へて「凡て此事により

て予は予が悪魔の子たることを知る。予は神を愛せずして、唯悪魔を愛す、予が肉に屬ける心は神に敵せり。予は聖靈と偕に在る所の喜樂なく、予が魂は死に至るまで悲哀に沈めり。予に平和なし、わが心は暴れたる海の如く、予は渾身皆暴風怒濤の如きなり」とはいはざる可し。而して此等の人はいづれの道を以て能く慰められ得べきか、唯神は不義なる者を義とし玉ふ者なることの神的證明（決して彼等が真善なるか信實なるか、或は其心術言行が聖書に合へりといふ點の神的證明には非ずして）に因るのみ、夫れ神は其義と稱せらるゝまでは渾身是れ不義にして、全く真の淨聖なるものなき者をも義と稱し、「工なき者」即ち彼が嘗て爲したる義き工にはよらで、唯神の自由宏大の矜恤、全く神の子が彼の爲めに爲し、苦み玉ひし事によりて、彼が受け容れられしことを意識するまでは真の善を一も爲さゞりし者をも義と稱し玉ふなり。若し聖書の云へる如く「人の義とせらるゝは信仰に由りて律法の行に由らず」とせば稱義の道豈に他に之れ有らんや。果して然らば此稱義に

先ちて意識し得べき内外の善なる者あらんや。然り我儕が能く「只耶蘇基督の賜に賴りて功なくて義とせらる」〻に先だちて「善なる者は我肉に居らざる」ことを意識すること、又極めて必要なる内外の善なるものあらんや。何人か嘗てこの世に生れ來りしのち義と稱せられたりや、若くはその

われはすべての訴をすべて棄てぬ、——

主よ、われは默しぬ、あゝ爾は亡せ玉ひぬ。

の境界に至るに先立ちて、誰か能く義と稱せられしや。

此故に何人にてもこの證の存在を否拒する者は、やがて又信仰に由れる稱義をも否拒するなり。隱て彼は決して之を經驗せず、又決して義と稱せられず、或はペテロの言ひし「潔められし事を忘るゝなり」も、彼が嘗時有せる所の經驗も、彼が以前の罪の拭ひ取られし時神か彼の靈魂にはたらきし給ひし情狀をも忘れたるなり。

然り而して此世の子輩の經驗にてだに神の子等の經驗を證確にす。彼等のうち多

くは神を喜ばせんとの思望を有せり、而して中には神を喜ばせん爲めに頗る心を勞する者あり。然れどもおのが罪の赦るされしを知るといふ者あれば彼等は之を以て一切妄誕不經となす。故に彼等のうちに此種のことを口にするものなし、然るも猶彼等の多くはおのれの信實不安を意識せり。彼等の多くは幾分かおのが靈の證即ち自己が正義なるの意識を有するや明けし。然れども此證此意識は彼等に與ふるに彼等は赦るされたりとの意識を以てせず、又彼等は神の子たりとの智識を以てせず。然り彼等は此智識を缺くが爲めに愈よ信實不安なれば愈よ其心安らざるなり、是れ明に神が直接に我儕が彼の子たることを證し給ふことなくんば我儕自己の證のみにては十分に之を知る能はざることを示めすものなり。

第四。然れども此に關する抗論甚だ多し、其主たる者は十分考究すべき價値を有せり。

先づ第一には「經驗なる者は聖書になき教理を證明するには十分なる者に非ず」と

の抗論なり。是れ眞に然り、重要なる眞理なり、然れども此はこの問題に關せざるなり、何となれば此教理は聖書に基ける者なることは既に論じたればなり。故に經驗は全く之を確固うするなり

「然れども狂人や、佛國預言者や、及び各種の狂熱者を妄想して各この證を經驗せりといふ」と。彼等は妄想したり、恐くは又實際之を經驗したる者も、たとひ永く其經驗を保持する能はざりしにもせよ、其數少からざるべし、然りと雖も若し彼等は之を經驗せざりしとするも、之を以て全く他のものも之を經驗せずとの證左とならず、猶自ら王なりとの狂人の妄想は眞の王なきとの證左たらざるが如し。

「否とよ、從來此事につきて論辨したる多くの人は全く聖書を非難したりしに非ずや」。或は然らん、されども是れ必要なる關係あるに非ず、聖書を甚だ尊重する所の人の同じく之を論辨したるも其數は千を以て數ふべければなり。

「然れども多くの人は全く之が爲めに自ら欺かれたり、此事はすべての識認の外

に在り」。

いはく聖書に悪しき所なし、人は之を妄用して自ら壞滅を取れるのみ。

「然れども予は聖靈の結べる果は聖靈の證なることを疑ふべからざる眞理とする者なり」。敢て疑ふ可からざるに非ざるなり、之を疑ひ、且つ明に之を否拒したる者亦千を以て數ふべし、然れども此は論ずるを止めよ。「若し此證にして十分ならば或他の證の必要あらざるなり。然れども是れ左の二個の場合の一に於けるの外は十分なりとす、即ち(一)「聖靈の結べる果の全く之れ無き時。是れ直接の證の始めて與へられし時の場合なり」、(二)「之を知らざること。然れども此場合に於て之を主張するは、神の恩惠の下に在りて、而して之を知らざることを主張すると同じきなり」と。然り此時に當りては其目的の爲めに與へられたる證による外は他の道を以ては之を知ること能はざるなり。而して我儕は之を主張す、我儕は直接の證は間接の證が朦朧たるの時に於けるも猶煌々として照輝き得ることを主張するなり。

第二の抗論は「證の論爭せらるゝ所以は我儕が爲す所の公認の眞正なるを證するに在り然れども其證は之を證せず」是なり。予答へて曰く之を證することは論爭の目的に非ず。畢竟是れ我儕が或る公認を爲すの前項にして、滅亡すべく、工なく、有罪にして無力なる罪人なることを證するものなり。其目的は彼等が神の子たること、「耶蘇基督の贖に賴りて神の恩をうけ功なくして義とせられ」たる證の與へられしことを彼等に確めさするに在り。而して此は彼等の從前の思想言行が聖書の規矩に恰當せりとは想像せしめず、却て全く反對せりと想像せしむ、即ち彼等は全く罪人たり、心に於ても言行に於ても悉く罪人たりと想像せしむ。然らざれば神は正義なる者を義とし給はん、而して彼等自己の工は彼等には義と思はるゝならん。予恐る我儕は工によりて義とせらるゝとの假定說は凡て此等抗論の根源なるを。何となれば誰にもせよ誠實に神は義とせられし人々に皆工なくして義を及ぼ

し負はせ王ふなることを信ずる所の者は聖靈の證は其結べる果に先たつことを承認するに一の困難を見ざる可ければなり。

第三の抗論は是なり曰く「一の福音記者は「天に在す願曹の父は求むる者に聖靈を予ふ」といひ、他の記者は之を「善賜」といふ。是れ聖靈が證を爲すの道は善賜を與ふるに在ることを明に證示せるなり」と。否、此兩記者の言均しく證を爲すことにつきては毫も關せざるなり。故に此證明は一層よく證明せらるゝまでは予は此儘に存し置くべし。

第四の抗論は「聖書に「樹は其果に由りて之を知るべし。自ら省み自ら試むべし」といはずや」と、是なり。實に然り、故に自ら證を有すと信ずる所の人々をして、其證は神より來りし者なるや否やを試ましめよ、若し果の之に伴ふあらば其證を有するなり、然らざれば之を有せざるなり。論者のいへるが如く「樹は其果に由りて知るべ」ければ證も亦神より來る者や否やを知るを得べし。「然れども直接の證は神の聖書には論せられしこと斷じて之れ無し」といはん。單獨には記るされず、又單獨の證としても記るされず、唯他の證と連結して、共同の證を爲すとして、我儕の靈と偕に我儕が神の子たることを證すとして記さる。もし此はかく聖書に記載しあらずといひ得る者あらば「汝信仰に居るや否や自ら省み自ら試ひ可し耶蘇基督なんぢらの中に在り之を自ら知らざらんや」。彼等は直接幷に間接の證に由りて之を知らざりしことは如何にすとも明白ならず。彼等は先づ內部の意識に由りて之を知らず、次に仁愛喜樂平和に由りて之を知らざるに如何にして之を證せんとするや。「然れども內外の變化より生ずる證は絕えず聖書に關する者なり」。然り故に我儕は聖靈の證を確むるに聖書に據れり。

「否、汝の爲す所の靈驗にして、神の靈の作用と幻想とを區別する所の者は我儕に起りたる內外の變化にのみ據れり」。是れ亦斷じて然り。

抗論の第五は「聖靈の直接の證は我儕をして最も大なる幻想に對して安全ならし

めず。其證の依頼すべからざるにいかで其證者の信任せらるべきぞ、其證は其確定する所の者を證せんとするに他の或者を備ひ來るの止むを得ざることなきや。予答へて曰く諸〻の幻想より我儕を安全ならしめんが爲めに、神は我儕が其子たることの二の證を與へ玉へり。而して此事をおの〳〵共同して證せり。故に「神の合せ給へる者は人之を離すべからず」。此二の證の一に合はされしからには我儕は決して惑はざる能はざるなり。この證は依頼し得べき所の者なり。いづくまでも信任せらるべき者にしてその確定する所の者を證するに他に何物をも要せざるなり。

「否、直接の證は唯或ものを確定するのみにして、之を證せざる者なり」。二の證によりて各〻の語は堅く立つを得べし。而して聖靈は、神の旨に從ひて、我儕の靈と偕に證する時には、我儕が神の子たるを十分に證するなり。

第六の抗論は「汝は其變化を以て救主が木に懸けられしが如き劇甚の試煉の場合に於てのみ十分なる證として論じ得べし、然れども我儕はかくの如く試みらるゝこと能はず」といふ。然れども卿等も予も、又他の神の子もかゝる試煉に逢ふなしとはせず、而して聖靈の直接なる證を有することなくば我儕は決して神に對して孝的信任を嚴守するは爲し難き所とす。

最後の抗論は是なり曰く「此證に最大なる論爭者の或者は最も傲驕にして無慈悲の人なり」と。恐くは最も熱狂せる論爭者の幾分は驕傲と無慈悲の人ならん、然れども最も堅確なる論爭者の多くは最も温柔にして謙遜なる人々にして、又實に多くの點より「羔の如き主の眞の信徒」たり。

前陳の諸抗論は予が從來耳にせる所の最も著るしき者にして最も力ある者なるとを予は信ずるなり。然れども予は何人にても心を靜にして、公平に此等の抗論と予が答辯とを思考する所の者は容易に神の靈は直接に間接に我らが神の子たることを證すてふ大眞理の徵證を破壞もせず、否、薄弱ならしめざることを知り得べしと思ふなり。

第五。前條論ずる所を總括すれば聖靈の證は信者の靈魂に於ける內部的感動にして、神の靈が直接に彼等の靈に彼等は神の子なることを證すといふことなり。而して起る所の疑問は聖靈の證なるものありやといふに非ずして、直接の證なる者ありやといふに在り。又聖靈の結べる果の意識より生ずる所の證の外は他に證なきやといふに在り。我儕は之れ有りと信ず、何となれば是れ前記の聖語及び加拉太書に在る同一意義の句によりて明なる所の本論題句の明白自然の意義なればなり、又物の性質として凡そ證なる者は其結べる果に先だつざるべからざればなり、又神の語の此明白なる意義は無數の神の子等の經驗のみならず、凡そ罪を識認して、直接なる證を得るまでは決して心を安ずる能はざる所の人、また世の子輩にして彼等自己には證を有せずして衆人自らの罪が赦さるゝことを知る能はずといふこと等に出りて吾は直接の證あると信ずるなり。

又之に由りて起る所の推論は、經驗は以て聖書の扶持せざる教理を證するに足らずといひ、——各種の狂人及び熱狂者は此の如き證を想像なりといひ、——其證の目的は我等の告白を確實にする爲なれども其目的を遂げず——聖書は「樹は其果に由りて之を知るべし」といふ、「なんぢ自ら省み自ら試むべし」、さらば直接の證は決して神のあらゆる書には關せざる者なりといひ、——これは最大なる蠱惑より安全ならしむるものに非ずといひ、最後に——我儕に生ぜし變化は基督の如き苦みに逢はざる間は十分なる證據であるといふ、されども予は逐條之に答ふべし、(一)

經驗は以て聖書に基きたる教理を堅固うするに足れり、(二) たとひおのが經驗せざる所を經驗せりと妄想する者世に多しと雖も、是れ毫も眞實の經驗に妨げあるものに非ず、(三) 其證の蠱惑は我儕が神の子たることを確むるに在り、而して此蠱惑は其答を爲す、(四) 聖靈の眞の證は其果なる「仁愛喜樂平和」に由りて知るべし、而して此果は證に先だつ者に非ずして、證の後に來る者なり、(五) 直接及び間接の證は現に「耶蘇基督爾曹の中に在り之を自ら知らざらんや」の聖句に關せずと

は決していふ能はざるべし、（六）我儕の靈と偕に證する所の神の靈は幻想より我儕をして堅固ならしむ、（七）我儕の靈の證が十分ならざる時、又神の靈の直接の證が我儕が神の子たることを確め得ざる時には我儕は皆試に逢ふべきなり。

此全体より二の推論を爲すを得べし。第一は何人をも聖靈の妄想的證即ち其結べる果なき所の證に安んずと臆斷せしむる勿れ。若し神の靈が實に我儕が神の子たることを證するならば「仁愛喜樂平和忍耐慈悲良善忠信温柔撙節」の如き靈の果は數ふべからざるべし。而して强猛なる誘惑に際してはたゞし此等の良果は蔽はれて見ゑず、從て惡魔が麥の如くに彼を篩る時には此誘はれをる人に此等の良果の存するなきが如しと雖も、猶其實体本性の部分は其濃雲密霧中にも存在するなり。されば聖靈に於ける歡樂は誘惑の時には其形を匿すべし、否、「黑暗の勢」の跋扈する間は「いたく憂ふ」ならん、然れども其時過くれば一般に更に增加を以て回復し、「其快樂は言ひがたく且榮光ある」に至らん。

第二の推論は何人をも證なき聖靈の妄想的果に安んぜしめざることなり。實に我儕が衷に證を有せざる前に又神の靈が我儕の靈と偕にわれらは「耶蘇の血により贖即ち罪の救を得」たることを證する前に眞實神より來りて決して不妄なる仁愛喜樂平和を預め嘗ふことあるべし。然り、我儕が「愛する者に在る」前に、隨てわれ受容の證を有する前に忍耐慈悲良善忠信温柔撙節の幾分（決して其影に非ず神の保護的恩惠によりて眞に與へられたる）を有し得べし。然れども是れ決して之に安んずべきものに非ず、若し之に安んぜば是れ靈魂の危機に瀕するものなり。されば我儕は絶えず神に叫びて聖靈わが心に「アバ父よ」と呼ばしむるまでに至るべし。此「アバ父よ」と呼ぶを得るは凡て神の子等の特權にして、此く呼ぶ能はずんば我儕は決して神の子たりと斷言する能はざるなり。此れなくんば我らは安固の平和を享有し、疑惑恐怖より離るゝ能はざるなり。然れども我儕一たび此の子たる者の靈を受けなば、「人の凡て思ふ所に過ぎ」、凡ての疑惑恐怖を拂掃する所の「平安」を受けな

ば「我儕の心と意とを基督耶蘇に因りて守らん」。而して其最美の果即ち内外の淨聖を結びしの時には是れ疑もなく我儕に其一たび與へし所の者を常に與へんとてわれらを召し玉ひし神の聖旨なり、故にわれらが最早神の靈の證とわれら自己の證即ち凡ては義と眞の淨聖とに歩みつゝあるの意識を奪はるべき必要なきなり。

（千七百六十七年四月四日ニューリュ於て）

我儕の靈の證

我儕の良心われら神の賜ふ所の丹心と信實とに由り又肉の智慧に由らず神の恩寵により世に在りて行を爲せりと證す

哥林多後書一〇十二

（一）是れ實に基督の眞の信徒にして、長く信仰と愛とに訓練したる者の聲なり。主宣はく「我に從ふ者は暗中を行ず」と、而して其人光を有する間は之を喜べり。彼れ既に「主基督耶蘇を承け」たるが故に彼は基督に在りて行む、而して彼が基督に在りて行む間は「なんぢら常に主に在りて喜べ我また言ふなんぢら喜ぶべし」との使徒の奬言は日々彼の靈魂に生ずるなり。

（二）然れども我儕は沙上に我家を建てざらんために（恐くは雨降り風吹き大水出で其家を撞てば終に倒れて其傾覆大ならん）予は此說教に於て基督信徒の歡樂の性質及び基礎を論せんと欲す。我儕は概括的は此歡樂とはこゝに使徒のいへるが如

き人の良心の修證より生ずる所の幸福なる平和、心の靜穩なる滿足なることを知る。然れども之を一層十分に了解せんには使徒の言の全体を思量せざる可からず、しかる時には我儕は良心に由りて了解する所と其修證に由りて了解する所と兩ながら容易に知ることを得べく、而して又如何にして此修證を有する者永久によろこぶべきかを知了し得べし。

（三）先づ第一に我儕が良心に由りて了解すべき所の者は何ぞや。又常に各人の口に上る所の此言の義は何ぞや。或人は思へらく若し我らにして此ことにつきて古より今に至るまで浩瀚の書の著はされ、又之を説明せん爲めに古今學術の凡ての寶庫が探求せられしことを思へば此言の義を發見するは至難の業なるべしと。而してかゝる精細なる考索を爲すも猶且つ分明なる解釋を得る能はざりしを如何にせん。却て此等の著者の多くは意義を晦澁まし、「無智の言詞をもて道を暗からしめ」、元來明白にして了解し易きものを故に混乱せしめざりしや。何となれば難解の言辭

を弄て〳〵其意を取らば正直なる各人の心情は直ちに其眞義を會了し得るなるべし。神は我儕を思考的實在物として造り、現在の事を知り、過去の事を追憶するの能を與へ玉へり。殊に我儕は何事にても我儕の心情に又生況に生ずる所の者を知り、我儕が感じ若くは爲す所のもの、今生じつゝあり若くは既に生じたりし所のことを知るの能を賦せられたり。かくいふ時には人は意識的實在物なり、即ち人は意識力を有するなり、自己の性行に關する現在及び過去の事を兩つながら知了する內部の知覺力を有するなり。然れども我儕が常に良心と稱する所の者はこれよりも廣く、決して唯われら現在の知識もしくは過去の記憶のみに非ざるなり。過去現在の事物を記憶し立證するは唯良心の一部にして最小の職務たり。謂ゆる良心の良心たる所以は、之を褒貶し、之を是非し、はた之を黜陟するの大職務を有するに在りとなす。

（五）輓近の學者等は新に之に命名して道義心とは稱したりき。良心といふ方古

くより人々の間にいひならひて、隠て了解し易ければ唯此點にて道義心といはんよりも宜きに似たり。而して基督信徒に取りては唯此點にてのみならず、良心なる詞は聖書の語なるが故に、神の擇びて其寶典に用ゐしめし語なるが故に斷じて良心てふ語を取るを宜しとなす。

而して聖書に使用せられし一般の意義につきては、殊に聖パウロの書簡に於ける良心なる語は此世に生れ來し各靈魂に神の植ゑつけ玉ひて、おの〳〵が其心情若くは生況に於ける、又其性質思想言行に於ける正邪を知覺するの能力をさしていへることを了解し得べし。

（六）然り而して人が由て以て正邪を判別し、由て以て其良心の嚮ふべき所の條規たる者は何なりや。異教者の條規はパウロの曰へる如く「其心に銘されたる律法」なり。パウロ曰く「異邦人は律法（外形的）なしと雖も己の律法たるなり、彼等其心に銘されたる（神の指によりて）律法の工を彰し（是れ外形的律法の命ずる所）其良心これが證をなして（彼等が此條規を遵守するや否やの）其思念たがひに或は訾し或は褒むることを爲せり」と。然れども基督信徒の正邪の條規は神の言葉なり、即ち新舊兩約の書なり、預言者及び往時の聖き人が聖靈に動かされて著はしたる所の書なり、神よりの靈感を受けて之を著し、教理として若しくは神の全意志を敎ふるにつきては至適のものたる、又同時に之に反する教理敎訓の非難の爲め、敎誨と督責、義を學ばしむるに最好のものたる所の聖書なり。

是れ基督信徒の足を措くに必需なる提燈にして、凡て其行路を導く光明なり。彼は唯此をのみ正邪を辨じ善惡を分つの條規として奉戴す。彼は何物をも善とせずして、唯此聖書に直接に若くは明白なる關係より命令せらるゝ者を以て善となし、聖書の言詞に於て又は其推論上爭ふ可からざる事に由りて禁止せらるゝ者の外は何事をも惡と爲さゞるなり。何物によらず聖書が直接に或は明白なる關係より命令し禁止せざる所の者は輕重するに足らざるものとして、其物には固有の善もなく惡も

なき者なりとして之を信ず。是れ實に基督信徒の由て以て其良心を嚮導せしむる所の唯一の全き條規なりとす。

（七）而して若し實に良心にしてかく嚮導せらるゝ時には彼は「神を求むる善良心」を有するなり。此「善良心」とはパウロの嘗て「責なき良心」といひたりし者也。故に彼が或時「我今日に至るまで凡てのこと良心に由て神に事へたり」といひし者は即ち他時「此に因て我つねに自ら勵み神に對ひ人に對ひて良心の責めなからんことを務むるなり」といひし者と相同じ。而して此に付きて是非共要求せらるべきことあり、即ち第一は神の言と我儕に關して其言のうちに示めされし神の聖くして心に適ひ、又完全なる意思とを正しく了解することなり。何となれば我儕にして神の言を了解せざれば條規に由りて歩まんとは決して爲し難き所たればなり。第二には（吁之を能くする人の數少きは歎ずべきことにこそ）我儕自ら眞に己を知ることなり、我らの心情と生況と、内部の性質と外部の會話とを兩つながら能く識ることなり、

是れ我儕にして此等自己に關することを識らざれば條規と對照することは爲し能はざる者なればなり。第三には我儕が心情生況また性質行爲、また思想言行の此條規即ち神の言と一致することなり。若し此一致なくんば我らたとひ良心を有すると雖も是れ唯惡き良心のみ。第四に要求せらるゝものは條規との此一致につきて心中の意識なり、この習慣的意識、この内部の意識は是れ正に善良心にして、パウロが他の章にて「神に對ひ人に對ひて責なき良心」と曰ひし所の者なり。

（八）然れども誰にてもかゝる責なき良心を有せんと欲するならば彼をして先づ正しき基礎を置くことを知らしめよ。彼をして「此の基礎の外に誰も基礎を置くこと能はず」とこの基礎は即ち耶蘇基督なる」ことを記憶せしめよ。而して又彼をして活ける信仰を以てするに非ざれば基督に基礎を置く能はざると、又其人の明に「今わが生るは神の子」、わが心にあらはれ、「我を愛して我が爲めに己を捨てし者を信ずるに由りて生る」ことを修證するに非ざれば基督に與する者ならざることを心

に留めしめよ。信仰なる者は唯見るべからざる者の其徴證なり、其識認なり、表明なり、而して此信仰によりて我儕が知識の目啓かれ、天來の光明己が眼中に注がれ、由て以て「神の法の奇しきこと」、その卓れて又清きこと、其法及び法中に存する誠命の高き深き長さ濶さを見ることを得るなり。「耶蘇基督の面にある神の榮光」を見るも、又すべて我儕に關する事、われらが靈魂の奥底の動機を鏡に照らして見るが如くに明に知るを得るも皆この信仰に由りてなり。又此信仰に由りてのみ神の惠ある愛は「われらの心に灌漑」かれ、以て我儕をして基督われらを愛する如くわれら相互に愛し得るに至らしむ。此信仰に由りて「われは我が律法をその念に置きまた其心に銘さん」とのいと惠みある約束は凡て神の民に成遂げられ、彼等の靈魂に其聖にして完き律法との一致成り、「すべての意思を擒にして基督に服はしむ」るものなり。

夫れ惡樹は善果を結ぶ能はざる如く善樹も惡果を結ぶ能はざるなり。故に信徒の

心情と其生況と相違ふことなければ是れ全く神の誡令の條規に一致契合せしなり、之を意識するによりて彼は神に榮光を歸し、使徒と共に「我儕の良心われら神の賜ふ所の丹心と信實とに由りまた肉の智慧に由らず神の恩惠に在り世に在り行を爲せりと證す」といふなり。

（九）パウロ曰く「行を爲せり」、パウロは其希臘語に於て之を一の單語を以ていへり、されども其意義は甚だ廣くして、我儕が云爲を一概していへるもの、我儕の靈魂にも肉体にも關して内外の情態をさしていへるものなり。即ち我らの心と舌と手と四支五体とのあらゆる動機を含有し、而して行爲言語の全部、すべての我儕が能力智力の事業、及び神に對し人に對して我儕が天賦の各才能を使用する態度にまでも及ぼし含めるなり。

（十）「世に在りて行を爲せり」、不虔不義の此世に在りてだに行を爲せりといふ、即ち曾に神の子等のうちに在りて（是れ比較的容易なり）のみならずして、又

悪魔の子等の社會に、黠詐邪悪をこれ事とする人々のなかに在りてさへ此の行を爲せしとなり。嗚呼この世如何なる處ぞや。この世に在るものは絶えず其吐く毒氣を以て肥え太らせられて足らざる所なし。我儕が獨一の神の善にして、善を爲し玉ふが如くに、此世の神と其子等は悪にして、眞の神の子等に對ひて悪を爲す。彼等の父の如く彼等も常に途に待ち、又は「徧行て呑むべき者を尋ね」、詐僞若くは勢威を用ゐ、隠密の詭計或は公然の暴戻を施しては、以て世の屬ならぬ人々を滅さんとし、絶えず我儕の靈魂に戰を挑み、新舊の武器を執り、各樣の機智を弄しては、以て悪魔の圈套に陷り、滅亡に往くべき廣路に入らしめんとて務むるなり。

（十一）かゝる奸悪の世に在りて「丹心と眞實とにより行を爲せり」。第一、丹心とは我主が「瞭なる目」と名けて推奬し給ひし者なり。主宣く「身の光は目なり若しなんぢらの目瞭ならば全身も亦明なるべし」と。其意を推すに、目は身の爲めにして、意向は言語及び行爲の爲めなり、故に汝の靈魂の目瞭なればすべて

汝の行爲會話は天の光により、愛と平和とにより、又聖靈にある歡樂によりて「明」なるべしとは是なり。

我儕が心の目明に神に注ぎ、萬事を爲すに當りて我儕は唯我儕の神とし、分前とし、力の出る所とし、幸福とし、すぐれて大なる報賞とし、時と永遠とに於て凡てのものとして神に目的を置く時は是れ我儕は純樸なる心を有するなり。神の榮光を高め、其尊き意旨を爲し又忍ぶ所の確乎たる意見及び明白なる意嚮が我儕の靈魂に洽く、心情に滿ち、而して凡て我らの思想念願目的の不斷の源泉たらば是れ則ち丹心なり。

（十二）第二に「信實により世に在りて行を爲せり」なり。丹心と信實との異る所は思ふに首として丹心は意嚮に關し、信實は之を實行するに在るが如し、而して此信實は啻に我らが言語にのみ關せずして上文記せし如きあらゆる行爲に關す。又パウロが嘗て眞理を語り、或は好譎詐僞欺罔を避け遠くることにつきて此語を用ひし

時の如き狹き意義にてはこゝにては了解し得べからず、故に一層廣濶なる意義に解して始めて其正鵠を得ること猶その丹心を解せし場合と同じとなす。故に信實は此處にては我儕が何事も皆神の榮光の爲めに語り又行ふこと、すべて我らの言語は曾に信實を期するのみならず、實際に之を行ふこと、すべて我儕の行爲は終始此界限を出で逸せざること我儕が全生況に於て終りに至るまで一直線に神に對ひて走り。淨聖の大巻と、正義矜恤眞理の公路とに嚴乎として歩むことを含有するなり。

（十三）此信實は使徒こゝに神の賜ふ所の信實即ち神の信實といへり、是れ異教者の信實と誤認混同せざらんが爲め、（何となれば異教者も一種の信實を有して、甚だ之を尊重すればなり、）又何事にても到底神に屬かざる者は「世の賤しき小學に」返り沈む者なれば各基督信徒の德として此信實の眞面目を示さんが爲めなり。之を神の信實と稱するによりてパウロは其所有者即ち萬の善きことゝ完全なる賜物の源なる光明の父とを指示す、是れまた一層明白に「肉の智慧に由らず神の恩寵に由り」なる語によつて示めさる。

（十四）「肉の智慧に由らず」、パウロの意を推すに彼は正に「我ら天賦の理解力に由り、又は天性より得たる智識或は智慧によりては斯く世に在りて行を爲すこと能はず。善良なる感情性質若くは善良なる教育の力によりて、此丹心を得此信實を實行する能はず。是れすべて我儕が性來の勇氣も決斷も、哲學の智識も達し得べからざるものなり。習慣の力は以て我儕をして茲に達せしむるに足らず、人間教育の最好の條規も亦然りと爲す。我れパウロ嘗て肉即ち性來の情境に在りし間享け得たりし諸の利便を以てしても、又肉の智慧即ち性來の智慧のみを以て之を追求せしにも拘はらず、終に此域には達し能はざりしなり」と曰ひしが如し。

而して猶此事の爭ふ可からざる所以は若し他の人にして能く此域に肉の智慧もて達し得たらんにはパウロは必ず其智慧を以てこゝに達し得たりしなり、何となれば我儕にして聊か此に達し得べきものとせば、天才と教育と兩つながら超群なるパウ

「ロの能く此に達し得ざるの理なければなり。彼は當時天下の何人にも劣らざる天稟の材能を有する外に、文學の養殖甚た博大にして、初はタルソの大學に學び、其後學問品行當時猶太全國に比肩すべき者なきガマリエルの門下に教鞭を受けたり。且つパリサイの子にしてパリサイたる彼は同じパリサイ派中にても最も嚴しき所の教規の下に訓練せられたれば宗教上の教育につきては遺す所あらざりしなり。而して彼は此等の教育天賦の才に於ては年相若く同輩の間に頭角をあらはし、神の旨に適ふと自ら思ひし所の事を爲すに當りては極めて熱中し、「律法に在る所の義に由れば玷なき者」なりき。然るにパウロは遂に此丹心と信實とに違することを能はず、其從來龍勉したりし事業は徒勞に屬し遂に「彼は心の奥底より「われさきに我が益となりし所の事は基督に由りて損ありと意へり然のみならず我わが主基督耶蘇を識るを以て最も益れることゝするが故に凡のものを損となす」と叫ばざるを得ざるに至れり。

（十五）夫れ耶蘇基督を識るに由るの外、換言すれば「神の恩寵に由る」の外は彼れ決して此に達するを得る能はざりき。「神の恩寵」は時としては之を解して自由の愛、即ち罪人なるわれ基督の功德に由りて今神と和ぐに至れる所の元來當らざるの恩惠と爲す。然れども此處にては神の力、「その善旨を行はんとて我儕の衷にはたらき」たまふ聖靈をいふ、前者の意義にて神の恩惠其赦罪の愛われらの靈魂に顯現るゝや否や、後者の意義にて神の恩惠、その聖靈の力わが靈魂中に活動をはじむ。而して後始めて能く我儕は人間の爲し能はざる所のことを神に由りて成就するを得るなり。是の時に當りて我儕は我儕の行爲を正直に爲し得べし。我儕に力を與ふる基督に由りて萬事を愛の光と力とを以て爲し得べし。今や「我儕の良心我ら神の賜ふ所の丹心と信實とに由り世に在りて行を爲せりと證す」この證や、決して肉につける智慧に由りては生じ來らざるなり。

（十六）是れ正に基督信徒が歡樂の基礎たり。故に我儕は今や此修證を心に有す

る人の限りなく歡樂び得ることを容易に知ることを得べし。其人正に曰ふべし「我心主を崇め我靈はわが救主なる神を喜ぶ。われは其のわが元來當らざるの愛を以て其自由なる其優情なる稱愼を以て、其力に由りわが今立てる救拯の此境遇に召し玉ひし神を喜べり。われは神の靈わが靈に、我は羔の血を以て買はれたると、彼を信ずるによりて我は基督の一肢体たり神の子たり天國の嗣業たることを證したるが故に喜べり。我は神が我を愛し玉ふとの感覺が我をして同じ聖靈によりて神を愛するに至り、延きて神の爲めに凡ての人類を愛するに至らしめたるが故に喜べり。我は神が我に與へて「基督の心」を我心に感せしめ——我心情の動く毎に必ず存ずる所の丹心及び基督に對する瞭なる目、我を愛し我が爲めに己を捨て玉ひし基督に我靈の感謝愛慕の目を常に注ぎ、我が思ひ言ひ、行ふの時常に唯基督を目的とし、其榮ある意旨を成さんとの力、——神の外は何物をも冀はず、「肉と其情および慾とを十字架に釘け」、「天に在るものを念ひ地に在るものを念はざる所の淸潔、——

神の像に返り、「其像に倣ふて」たる淨聖、——及び神の榮の爲めに凡て我が言語及び行爲を左右する所の信實、すべて此等の德を得させ玉ひしを喜べり。且又我が喜び又喜ばんと欲するは聖靈が絶ねず我に注ぎ玉ふ光によりて「わが召されし召に符ひて行ふ」こと、「諸の惡事の類に遠かり」、罪を避け之に遠かること蛇を畏るゝ如くなること、機會だにあらば全力を盡してすべての人に凡ての善き事を爲すこと、すべての事主の旨に循ひ、其嘉みし玉ふ所のことを爲すこと、凡そ此等のことを我が良心聖靈によりて證を爲すを以てなり。我れ又神の聖靈の感動に由り凡て我が行ふ所の工は神の工にして、神は我にいまして、諸の工を爲し玉ふことを見且つ感ずるが故に喜べり。我は我が心に耀く所の神の光に由りて、我は神の道を行く力を有し、且其恩によりて我は右にも左にも誤り差ふことなきを見て喜べり。

（十七）　上來論ずる所は老成なる基督信徒が永久に喜ぶ所の歡樂の基礎且つ性質なりとす。これに從りて我等の容易に知り得る所は先づ第一に此は性來の歡樂に非

ざること是なり。是れ實に性來の事物より生ぜざるもの、精神の急遽なる發揚より起る能はざるものなり。よし一時の喜悅は生じ得べしとするも決して永久のものに非ず、然れども基督信徒は常に喜べり。是れ身体の健康若くは安逸に存するものならず、又人体組織の生れながら强健堅固なるにも關せざるものなり、何となれば此歡樂は疾病及び苦痛の時にも減ずることなく、否寧ろ適に其度を高くするなるべし。

多くの基督信徒は其身体苦痛に堪へざる時若くは痩せゆく疾病もて殆んど生氣なき時其精神を充たす所の歡樂に較ぶべきよろびを決して經驗せざるべし。畢竟此の歡樂は外部の榮榮、世間の名譽、若しくは財寶の充滿などに比せらるべきものに非ず、されば信徒の信仰が種々なる外部の艱難の爲めに火爐中に投せられし如くに試みらるゝ時神の子等は言ふべからざる歡樂を以て愛する所の、見ざる神に心を向けて喜ぶべければなり。而して「世の汚穢また塵垢」の如くに見做され、窮乏くして東西に周流ひ、饑ゑ、寒ゑ、着るべき衣なく、曾に「嬉笑」を受くるのみならず「羞辱

と囹圄との苦を受け」、遂には「よろこんで彼等が往くべき路程を遂げん爲めに其生命をも重んぜざる」程の人々の如く一般の人は喜ぶこと能はざるや必せり。

（十八）以上の考察より我儕は第二に知り得ることは基督信徒の此の歡樂は良心の盲目より生ぜず、即ち善惡を辨別し得ざる所の人よりは生ぜざることなりとす。彼は其心の目啓かるゝまでは此歡樂には全然門外漢にして、精神的感覺を有し、精神的善惡を辨識し得るまでは之を味ひ得ざるなり。今や彼が靈魂の目眸からず、嚮には決して今日の如く明かに銳く物を視ることなかりし。彼れ實に性來の人には甚だ奇異なる迄も最微の事物を感覺するに銳敏なり。微分子の太陽の光によりて肉眼に見ゆる如く、光のうちに歩む所の彼には被造物ならざる太陽（神）の光明によりて罪の各微分子は判然として心眼に映ず。又彼は其良心の目を復び閉ずることなく、その睡眠は永く彼より逃し去れり。彼の靈魂は常に覺めて活潑なり。彼れ常に高塔の上に立ちて、彼が主の彼につきて宣ふ所に心耳を傾け、唯此一事即ち「見ざる神

を見つゝ」喜べり。

（十九）第三には基督信徒の歡樂は良心の遲鈍或は頑梗なるよりは生ぜざる者とす。げに一種の歡樂は此等の良心より生ぜざるに非ず、卽ち「其愚なる心蒙昧なり」其心頑梗、無感、無覺にして結局精神的識力なき所の人に存し生ぜざるに非ず。彼等は其無感覺無感情なる心なるが故に罪惡を行ふてさへ嬉々として喜べり。而して、彼等靦然之れを自由と稱して憚らざるなり——吁是れ實に靈魂の酩酊、精神の麻痹、凋萎せる良心の無感覺なるに非ずや。之に對して基督信徒は最も活潑なる感覺を有せり、卽ち先には自身すら知る能はざりし程の銳敏なる感覺を有す。彼は神の愛其心情を支配する迄は嘗て有せざりし所の良心の温柔を有せり。而して神が彼れの日夜の祈禱

あゝわが魂の逃れ得んことを
惡のはじめて近づきし時、

罪の來り觸るゝをいと早く
目の見てさとるそのごとく。

を聽きたまひたれば、其良心の温柔は又彼れの光榮にして歡樂なり。

（二十）終りに一言せん、基督信徒の歡樂は從順の歡樂なり、神を愛し、其誡命を守るの歡樂なり、其謂ゆる誡命を守るといふも我儕が此に由りて事業約束の期限を全うするが如くに守るに非ず、又我らの事業或は義によりて、神の赦罪と受納とを得んが爲めなる如くに守るにも非ざるなり。何となれば我儕は既に基督耶蘇に於ける神の矜恤によりて罪を赦され、神に受け納れられたるなり。又我儕みづからの從順によつて生命卽ち罪の死より離れて永遠の生命を得んために誡命を守るにも非ず。是も亦神の恩に由りて我らの既に有する所なり。「神は罪に死にし所の者を生し給ひし」如く、今や我儕は「我儕の主耶蘇基督により神について生くる者」たり。然れども我儕は恩惠の約束に從ひて歩み、聖き愛と幸なる從順とに在りて喜べ

り。我儕は「神の恩を受けて義とせられたる」こと、「神の恩を徒に受けざる」と、神は自由に（我儕が意志又は實行の爲めにはあらず、羔の血に由りて）我儕をおのれに和がせたれば我儕は神の我らに與へ玉ひし力を以て其誠命の道に歩むことを喜べり。神は「ちからを我儕に帶ばしめ」たまひぬ、而して我らは喜んで「信仰の善戰をたゝかふ」なり。我儕は信仰に因りて我心に生ける基督に由りて「永生を取る」ことを喜べり。又我儕が「父は今に至るまで働きたまふ」、故に（我が力或は智に賴らず基督耶蘇に在りて自由に與へ玉ふ神の聖靈の力に由りて）我らも亦神の工に働くことは我儕のよろこびとする所なり。嗚呼我儕をして何事によらず神が其目に嘉と見玉ふ所の事を爲さしめよ。願くは譽窮りなく神に在らんことを。

注意　此論は信仰に强き所の人の經驗を述べたる者なり、然れども信仰の猶弱き者の此によりて沮喪せざらんことを恐る、故に須らく次篇を讀みて自ら曉る所あるべし。

信徒の罪につきて

人基督に在る時は新に造られたる者なり

哥林多後書五〇十七

第一。然らば則ち基督に在る所の人には罪なるものなきか。罪は基督を信ずる者には殘存せざるか。神に由りて生れたる者には一の罪なるものなきか、其人は全然罪より脫し去ることを得しか。請ふ此を以て唯好奇の疑問と爲す勿れ、又其いづれか一に決するを以て不急のものと爲す勿れ。寧ろ是れ愼重なる信徒の關心すべき急務にして、其審判は大に其現在及び永遠の幸福に關する所の者たり。

然れども予は此問題の嘗て原始教會にて抗論せられしことありしを知らざるなり。實に當時に在つて此問題に關して抗論すべき必要あらざりしは諸の信徒の等しく認むる所なりしなり。嘗て予が考察したる所によれば昔時の信徒にして其著書にて意見を我儕に遺し傳へし全團体は凡そ基督に在る信徒たるものは「主及び其大なる

力に頼りて剛健なる」までは「血肉」即ち邪悪の性質と戰ひ、幷に「政」また權威」と戰はざる可からざることを異口同音に公言せるなり。

而して我が教會も(實に最も多くの點に於て)原始教會に敢て違ふことなく、條例第九條に公言して、本罪とは各人の性質が腐敗したることにして是故にすべての人が己の性質に由りて惡に傾き而して其肉の願は靈に逆ふべし而して此性質の腐敗は新に生れたる人に殘存す是に由りて肉の願は神の掟に服從せず而して信ずる者には罪に定むることあらざれども其肉の願は罪の性質を有すといふ

此同一なる證憑は他の諸教會、たゞに希臘羅馬教會のみならず、歐洲の各改革教會各派の均しく認むる所なり。而して中には其極端に走りて、信徒の心の腐敗を記述して殆ど此腐敗を止め得ず、寧ろこれが奴隷となり、隨て信徒と不信徒との間に截然たる區別を爲し得がたき程にせるものも尠からず。

此極端を避けんとして、多くの達識の士、殊に故ジンゼンドルフ侯配下のモラビ

アン一派の人々は又他の極端に走りて、「凡て眞の信徒は當に罪の支配より濟はれしのみならず、內外の罪の實在より救はれたるものなれば、罪なるものは復た信徒に殘存せざるなり」と斷言したりき。此によりて幾んど二十年前には我邦人も多くは此說に同意して、性質の腐敗さへも基督を信ずる所の人々には復た存せずとするに至れり。

獨逸人が此說に服せし時彼等は(全体ならずとも多くの人は)速に「罪は猶信徒の肉に殘れりと雖も、其心に存せざる」ことを是認したるは事實なり、而して少らくして此說の妄なることの明かになりて、彼等は潔く之を棄て、罪は神に由りて生れし者に、たとひ其人を左右せざるも、猶殘存するものなることを認許したるも亦事實なりとす。

然れども英國人にして此說を彼等より(或は直接に、或は間接に)受けし所の者は容易に此好說より離るゝことを首肯せざりき。而して彼等やがて此說の到底の敗れ

を取るべきことを認ひるに至りし時に於ても少數の人士は之を棄つること能はずして、今日尙此說を持して變せざるなり。

第二。心まことに神を畏れ、「耶蘇に在る眞理」を知らんと欲する人々の爲めに虛心平氣を以て之を講究するを要す。予は之を講究するに於て新生、稱義又は信徒なる語を一樣に用ふべし、たとひ此等の語は精密に論ずれば同意義にはあらざれども、(卽ち新生は內部にして實際の變化をいひ、稱義は關係的變化、信徒とは此新生及び稱義の行はれし方法なり)要するに其歸を一にし、たとへば信ずる所の者は悉く神によりて義と稱せられ、且つ生れたるものなるが故なり。

罪、予が罪といふは此處にては內部の罪、卽ち罪ある性質、七情、又は愛情にしてたとへば其種類と程度とを問はず、凡そ驕傲、私意、世を愛すること、又は肉慾、忿怒、恨戾、若くは基督に在る心に反する凡ての性質是なり。

此疑問は外部の罪に關せず、又神の子たる者は罪を犯すや否やにも關せざるなり。我儕は「罪を犯す者は惡魔より出づ」といふことに同意し、且つ熱心に之を主張す。我儕は又「神に由りて生るゝ者は罪を犯さず」といふことに同意す。我儕の討尋せんと欲する所は內部の罪は常に神の子のうちに存するや否やの事に非ず、又、罪は人の肉体に繼續する限りは靈魂にも繼續すべきや否やの事にも非ず、猶又義と稱せられたる人は內外の罪に再び復歸し得るや否やの事にもあらずして、單に義と稱せられ、若くは新に生れたる人は其義と稱せられしと同時に凡の罪より免れたるか、爾時其心中一の罪なきか、若し其人にして恩惠より落つるに非ざればいつまでも罪其心になきかに在り。

我儕は義と稱せられし人の情態は名狀すべからざるほどに大にして榮あるものなることを承認す。其人は「血脈に由るに非ず情慾に由るに非ず人の意に由るに非ず」、して再び生れたるなり。其人は神の子、基督の一肢、天國の嗣業者なり。「神より出で〻人の凡て思ふ所に過ぐる平安は其人の心と意とを基督耶蘇に因て守るなり」。其

の肉体は「聖靈の殿」にして「靈に由りて神の居給ふ處」なり。其人は「基督耶蘇に因りて新に造られ」、洗はれ、聖められたり。其の心は信仰によりて潔められ、「世に在る所の慾の敗壞より」洗はれ、「其人に賜ふ所の聖靈に由りて神の愛其人の心に灌ぎ注げり」、而して其人の愛を以て歩める(是れ其人の常に爲し得る所)限りは靈と眞とを以て神を愛するなり。其人は神の誡命を守り、神の喜び玉ふ諸の事を爲して、以て「神に對ひ人に對ひて良心に責なからんことを」自ら勵みて務む、而して其義と稱せられし時より能く內部の罪を制御する權能を有するなり。

第三。「然れども其人は其心に復た一の罪もなき程までに前後凡の罪より免かれざりしや」。予はかく言ふこと能はず、又之を信ずること能はず、何となれば聖パウロの言ふ所之と正反對なればなり。パウロ曰く「肉の慾は靈に逆ひ靈の慾は肉に逆ひ此二のもの互に相敵す」と、パウロは之を信徒に對ていひ、且信徒一般の情態を論じたるなり。何ものか能く之よりも優りていひ得んや。パウロは此を以て信

徒に於けるも猶肉卽ち惡しき性情は靈に逆ふこと、新に生れし者にも「互に相敵す」二主義あることを直截に斷定せり。

猶又パウロはコリントの信徒卽ち耶蘇基督に由りて潔められたる人々に書を贈りていはく、「兄弟よ我ささに爾曹に語れる時靈に屬ける者に語るが如くする能はず唯肉に屬ける者の如く亦基督にをる赤子に語る如くせり。爾曹尙肉に屬くなんぢらのうちに嫉妬と紛爭とあり是れ爾ら肉に屬て人の如く行ふに非ずや」と。夫れパウロは疑もなき信徒たるもの——基督に在りておのが兄弟といふ——に對ひて彼等は猶幾分か肉に屬けるものなりといへり。彼は彼等の間に嫉妬「惡しき性癖」あり、紛爭を起せりと斷言すれども而かも彼等は其信仰を失へりとのことを彼は毫もいはざるなり。否、彼は明に彼等が信仰を失はざることを公言せり、何んとなれば彼等にして信仰を失ひをらば彼等は「基督にをる赤子」ならざるべければなり。而して(其最も注意すべきことは)パウロは肉に屬けること〻基督にをる赤子とは同一のも

のなることをいひ、明に各信徒は唯其基督にをる赤子たる間は幾分か肉に屬けるものたることを示めせり。

實に此の一の大なる點即ち信徒には二の相反する所の者――性來と恩惠、換言すれば肉と靈――ありて、聖パウロの諸書翰、否全聖書を一貫するなり。ほとんど書中の諸の命令勸誡は基を此點に置きて、神旨を受けたる記者が認めて信徒なりといへる所の人々の惡き性嚮及び品行を論せざるはなし。而して其記者等は斷じて其謂ゆる信徒等が有せる信仰の力によりて此等の惡性惡行と戰ひ且つ勝つべきことを勸勉せり。

夫れ主嘗てエペソの教會の使者に對して「爾の行爲と勞苦と忍耐と……爾が忍耐することゝ我名の爲めに患難を忍びて倦まざりしことゝを知る」と宣ひし時に當つて誰か其使者には信仰あらざりしと謂はんや。然れども其心に罪なるものなかりしとし得べきや。果して罪なしとせば基督は之に添へて「されど我なんぢに責むべき

ことあり。爾初時の愛を離れたり」とは曰ひ給はざりしなるべし。此初時の愛を離れしは神が其心中に視たまふ所の實罪なり、故に之を悔改むべきことを勸められぬ、然れども我儕はかの使者に信仰なかりしといふべき權利を有せざるなり。

左かのみならずペルガモの教會の使者も亦悔改むべきことを誡められたり、たとひ主は「爾わが道(信仰)を棄ざりき」と宣ひしも、罪は存したりしが故なり。而してサルデスの教會の使者にも主いひ給はく「幾んど死なんとする殘情を堅くせよ」と。その殘れる善情は幾んど死なんとせしも、實に死せしにあらざるなり。かくの如く彼にも猶信仰の一點の火はありき、故に彼は之を守れと命ぜられたるなり。

猶一事をいはん、パウロがコリントの信徒を勸勉して「肉と靈との凡ての汚を去れ」といひし時に彼は明に其信徒は猶其汚より潔からざりしことを誡へしなり。卿等或は答へて「諸の惡事の類に遠かりたる者は實際に於て諸の汚を去りし者なり」といはんか。否決して然らず。たとへば人ありて予を詬らん、予は之を憤

らん、是れ靈の汚なり、されど予は一語をも之に復へさゞるなり。是れ予は「諸の惡事の類より遠かり」たるなれども靈の汚を自ら去らざるものにして、予が悲みとする所なり。

是に由て觀れば「信徒には罪なく、肉に屬ける心なく、背教の傾向なし」とは神の語に反する者にして、現に神の子等の經驗する所たり。神の子等は我が心情の斷じて背教に傾き、惡しきわざに傾き、常に神より離れんとし、地の事に心の寄ることを感ずるなり。彼等は日に罪の其心に存して、驕傲、私意、不信、其言行に罪の混入し、たとひ其最善の行爲を爲し、最聖の職務を爲すの際にも免るゝこと能はざることを深く心に感じて止まざるべし。然れども かゝる際に在るも猶彼等は「其の神に屬けることを知り」ゐて、一時たりとも之を疑ふこと能はず。彼等は神の聖靈の明に「彼等の靈と偕に彼等が神の子たるを證せる」ことを感ず。彼等は「彼等に和を得させ玉ひし我主耶蘇基督に賴りて亦神を喜べり」。故に彼等は罪の彼等に現存

すると、「基督は彼等の望む所の榮の望」なることを同時に確認す。

「然れども基督は能く罪の存する心に宿り得べきか」。是れ固より然り、然らざれば其心は決して罪より救はるゝこと能はざるなり。夫れ病者あれば醫師あり、疾の癒ゆるまでは醫其藥を投ずるが如く、罪の去るまでは基督は其わざを止めたまはざるなり。基督は實に罪の司配する所の處に司配したまふこと能はず、又と罪だに認許しある所の處に住み玉はざるべし。然れども基督はたとひ未だ全く潔められずとも諸の罪と戰ひつゝある所の信徒の心には宿り住み玉ふなり。

然り而して信徒に罪なしとの反對の教理は基督の教會には全く新なる者にして千七百年の間嘗て之を聞きしことなく、ジンゼンドルフ侯の之を發明唱道するまでは何人も知らざりしことは予嚮に之を論じたりき。予は古今の記者が此種の論を立てしことありしを見し覺ゑなきなり、唯おもふに大言數語のアンチノミアンの或る論者あるのみ。而して此等のものも亦罪は心に存せざれども肉に存すといへることを

承認すといふ者もありいばざる者もあり。然れども其如何なる教理にても新しきものは惡き者たらざる可からず、何となれば古き宗教は唯一の眞のものにして、「元始より在りし」その者に非らざる以上は凡そ教理は決して正しからざればなり。

此の新しき非聖書的教理に對して猶一の論駁すべきものはその怖るべき結果なりとす。或人いはん「予は今日怒れり」と。予之に對へて「然らば卿は信仰を有せず」といふことを得ざるか。其人更にいはん「予固より卿の忠言を善しと知る、然れども予が意甚だ之を厭ふ」と。予敢て曰はん「然らば則ち卿は神の怒と詛の下とにある不信徒なり」と。此の自然の結果は如何なるべきか。若し其人にして予がいふ所を善しとせば其心は曾に愁ひ傷めるのみならず、おもふに全く敗壞すべく、而してかれ大なる報を受くべき其信仰を投棄つる」に於て、其盾を放棄するに際して、如何にして「惡者の火箭を滅すとを得」べき。「我僕をして世に勝たしむる者は我らが信なり」とあるに、此信仰なきにいかにして彼は世に勝つべきぞ。彼はおのれを繞れる敵の

中に赤手にして立ち、敵をして自由に乘ずる所あらしむ。然らば則ち彼が手もなく打仆さるゝも、敵の自由に之を擒にするも、はた彼が一の惡より他の惡に移り犯し、遂には一善なきに至るも何の怪しきことのあるべき。されば予は如何にすとも此説――信徒は其義と稱せられし其時より罪なしとの新説を受け容るゝと能はず、故如何にとなれば第一には聖書の旨義に全く相反し、――第二には神の子の經驗に反し、――第三には昨日までは世の未だ嘗て聞かざる新説なれば、――第四には其自然に最も怖るべき結果と隨伴し、曾に神が愁ひ悲ませざりし所の者を愁ひしむるのみならず、遂には永遠の滅亡に陥らしむべきを以てなり。

第四。然れども我僕をして少ばらく此説を主張する所の人々の主なる論點に耳を傾けしめよ。第一は彼等が此の信徒に罪なしとの説を證せんとするは聖書に據れるなり。彼等はかく論せり、「聖書に云く、各信徒は神に由りて生れし者なり、汚を去りたるもの、聖きもの、潔められたるものなり、心の清き者なり、新しき心を持

てる者なり、聖靈の殿なり。夫れ「肉に由りて生る〻者は肉」にして、全く邪惡なるが如く「靈に由りて生る〻者は靈」にして、全く正善なり。且つや人は汚を去り、潔められ、又聖きと同時に汚に染み、潔められず、又聖からずしてあることは萬々之れ無きことなり。潔と不清と並行せず、新心と舊心と兩立せず。其靈魂聖靈の殿たる間いかで聖からずしてあり得んや」と。

予は論者の此主旨を十分に汲み取りぬ、請ふ我儕をして一々之を研討せしめよ。第一「靈に由りて生る〻者は靈なり、全く正善なり」と。然り、聖語の確言する所は「靈に由りて生る〻者は」精神的の人なり、豈に此他あらんや、彼は精神的の人なり、然れども彼は精神的人物たり得べき者にして全く精神的人物なりといふは未だし。

コリントの信徒は精神的人物なりき、不信徒にてはあらざりき、然れども全く精神的たるを得ざりき、彼等は猶肉に屬ける所ありき、「恩より墮ちたる者」なりき、聖パウロは彼等を指して當時基督にをる赤子なりといひぬ。第二。「人は汚を去り、

潔められ、又聖きと同時に汚に染み、潔められず、又聖からずしてあることは萬々之れ無きことなり」と。實にさからざるべし。コリント人はかくありき。使徒曰く「爾曹は洗滌れたり、潔められたり」即ち「淫を行ひ、偶像を拜み、沈湎」其他諸の外部の罪より洗ひ清められたりと。然れども同時に此語の他の意義に於て、彼等は潔められざるなり、洗滌れざるなり、嫉妬、邪推、偏僻なる内部より洗ひ潔められざるなり。「然れども彼等が新しき心と舊き心とを同時に有せざるは明確なり」といはんか。否彼等が此二の心を同時に有するは最も明確なりとす、何となれば彼等の心眞に新になりし其時に於けるも猶全く新にはならざるなり。彼等の肉の心は十字架に釘けられぬ。然れども全然之を敗壞らざるなり。「然らば則ち彼等聖靈の殿たるに猶能く聖からずしてあり得べきか」。曰く彼等が聖靈の殿たるは更に疑はず、然れども亦幾分か肉に屬き、即ち聖からざるは均しく疑ふべからざる所なり。

論者又曰く「然れども茲に猶一の聖書に據るべき所ありて以て此等の爭論を止め

得べし、即ち「人基督に在る時は（信徒なる時は）新に造られたる者なり」是なり。されば人渝に造られたる時は復た舊造られし者たらざるや明けし」と。然り、其人は新に造られ得べし、少しく新にせられ得べし、コリントの信徒の如きは則ち是れなり。彼等は明に「心の靈を新にし」たり、然らざれば彼等は「基督にをる赤子」たるだに能はざりしなり、然れども彼等は全心基督にをちず、何となれば彼等は相互に嫉み忌みければなり。「然れども「舊は去りてみな新しく作るなり」に明言しあるに非ずや」。然れども我儕は使徒の言を解して矛盾せしむべからず、我儕使徒の意を推するに此語の意義は當に左の如くなるべし、即ち其稱義淨聖幸福に關する舊判斷思想、神の事に屬せる舊概念は今や去りぬ、從て其舊時の志望、計畫、愛着、性嚮及び談話も亦去れり。もろ〳〵此等のものは明に新になり、大に舊觀を改めぬ、然れども新となり、觀を改めしとは雖も全然新しくなりしには非ざるなり。かゝる變化の〳〵ちにても猶其人は舊き人の全く去りやらで、其舊時の性嚮愛着の敗壞、たとひ彼れ祈りて自ら守る限りは復た其勢力を彼に施す能はずとも、あまりに明白顯著なるを感じて獨り悲み且つ慙るなり。

「彼れもし清ければ彼は清し」、「彼れ若し聖ければ彼は聖し」（此類更に枚擧に遑あらず）などいふ辯論は一の洒落の詞に過ぎず、是れ物の一偏を見て一概を論ずる詭辯なり、即ち一偏の前提より一概の結論を推度するものなり。若し此文を全くし、的確に表露せんとせば當に「彼れ若し少しにても聖からば彼は全く聖し」なるべし。然れども基督にをる赤子は聖し、されど全くは聖からず。彼は罪より救はれたり、されど全くは救はれず、罪たとひ彼を左右せざれども猶現存せり。若し躰にして罪は現存せずと思はゞ、（赤子にして然らば青年又は父老に於ける場合は如何あるべき）是れ躰は神の律法（即ち聖パウロが哥林多前書第十三章に述べたる愛の律法）の高さ深さ長さ廣さを思はず又此律法に合はず若くは違ふ所の凡ての違法は罪なることを考へざるなり。然らば則ち信徒の心情と言行とはすべて此律法に合へりや。成

長したる信徒に於て如何なるべきやは別問題なり、然れども基督にをる赤子にして果して此律法に合ひて、罪なしと堅く信じ想ふ所の人は人情を解せざる者と謂はざるべからず。

論者いはく「然れども信徒は靈に從ひて行ふ、神の靈彼等に住む、故に彼等は有罪より、罪の權能より、一言にていへば罪の實在より救はるゝなり」と。

有罪なり、權能なり、罪の實在なり、恰も同物の如くに混淆せられぬ。然れども此等は決して同物に非ざるなり。有罪と罪の權能とは一物に非ず、罪の實在また此と均しからず。信徒が有罪と罪の力とより濟はれしは我儕之を認む、然れども其實在より免れしとは我儕の斷じて認めざる所なり。論者のいふ所は如何に考ふるとも以上の聖書より從つて來れるものに非ず。夫れ人はおのれに住める神の靈を有し得べし、而して「靈に從つて行ひ」得べし、されど其人は猶「肉の慾の靈に逆ふ」ことを心に感ず。

「然れども聖書に「教會は基督の體なり」といへり、是れ其各肢体は諸〻の汚より洗はれたることを知るを得べし、若し然らずとせば基督とベリアルと相互に一体となりしといはざる可からず」。

否、「基督の不可思議的體なる所の人々は猶其肉の慾の靈に逆ふことを心に感ず」といへばとて、基督は惡魔と關係を有し、又は彼が其信徒をして抵抗し摧敗せしめ得べき所の罪と關係を有すとの說は生じ來らざるなり。

「然れども基督信徒は汚れたるものゝ入る能はざる天のエルサレムに近づきしに非らずや」。然り、「千萬の衆すなはち天使の聚集、成全せられたる義人の靈」に近づきぬ、卽ち地と天とは一になりて一大家族を爲したり、而して彼等は其「靈に從ひて行ふ」間は又聖くして汚れざる者なり、されど彼等には他の法ありて「二のもの互に敵す」ことを感せずんばあらざるなり。

「然れども基督信徒は神と和ぎしものなり。されば若し肉に屬ける心の猶存する

ならばいかで神と和ぎて在るべきか、何となれば此肉に屬ける心は神に敵するものなればなり、隨て和ぎは遂に望み得べからずして、唯滅亡に歸するあるのみ」。

我儕は「十字架の血に由りて神と和げり」、其時神に敵する人性の敗壞は我が足下に蹂躙せり、肉は復た我らを左右せざるなり。然れども肉は猶存せり、而して猶其性として神に敵し、靈に逆へり。

「然れども、基督に屬する者は肉と其情および慾とを十字架に釘けたる」にあらずや」。然り、然れども是れ猶彼等に存せり、而して屢ば其架釘より脱せんと務む。

「否、しかのみならず彼等は「舊人と其行を脱ぎ」たり。然り彼等は脱ぎたり、而もこれ亦向きに論せし「舊は去りてみな新しく作るなり」と意義異る所なし。百の聖句この爲めに引證せらるゝもその答は皆この一のみ。「然れども其諸の聖句は之を一言にいへば「聖にして疵なからしめんとて基督は教會のために己を捨てたまへり」是なり。然り、終極に於てはかくあるべし、されど元始より今日まで決してかくはあらざりき。

「然れども請ふ經驗をして語らしめよ、もろ〳〵義と稱せられし所のものは其時に於て凡ての罪より絶對の自由を得たるに非ずや」。是れ予が疑ふ所なり、たとひ彼等其自由を得たりとするも、果して死に至るまでかくてあり得べきか。若し其後に彼等罪を犯さば卿等は「是れ彼等の過失なり」といふの外あらざるべし。然れども卿等は此の證據を擧ぐることなし。

「然れども凡そ事物の性質より之を論ずるに、人衷に驕傲の性ありて、外に傲らず、忿怒ありて、怒らずしてあらるべきか」。

人もとより衷に驕傲を有し得べく、時としては自ら高く標思し得べし、(而して亦其特殊の事に於て傲るべし、)然れども此を以て概に傲慢の人と謂ふべからず。かれ忿怒の性あり、ほとんど暴怒に傾く性質を有し得べし、されど之を外に露さゞるを得べし。「然れども唯温良と恭謙との感情ある所の心に忿怒と驕傲と共に存し

得べきか」。否、幾分の驕傲と忿怒と其心に存し得べし、然れども其多分を占むるは悲謙と温良となり。

「此等の惡き性癖の存して、而かも其力を有せず」とは言ふことを得ず、何となれば罪は或る種類若くは程度に於て、其力なき所に存することを能はず、且つ有罪と權能とは罪の要素なればなり。故にその一だにある所の處にはすべての罪の存せざるべからざるなり」。

奇なるかな論者の言や、罪は果して或る種類若くは程度に於て其力なき所に存することを能はざるか。是れ全く凡ての經驗凡ての聖書凡ての常識に反する說なり。人に侮られて之を忍るは罪なり、愛の律法に合はざるものなり。而して予は千百回も此忍情を有したりき。然れども此忍情は力を有せざりき、今も猶予を左右せず。又果して有罪と權能とは罪の要素なれば其一の存する所には凡ての罪も存せざる可からざるか。然らず、たとへばわれ忍怒の情生せしも、能く之を制して一分時だに之

が制する所とならざれば予には此點に付きて毫も有罪なるものなく、神より罰を受くることなし。然らば則ち是れ權能なきなり。たとひ「肉の慾靈に逆ふ」とも肉は靈を制することを能はざるなり。故に有罪權能ふたつながら無くして罪の猶現存するは百千の實例之を證して明かなり。

「然れども信徒に罪ありと推定するは恐るべく又沮喪すべき種々のものを孕胎す、たとへば我儕の力を制壓する所の權能を甘受し、又は我儕の心を其權能の奪ふにまかせ、而して我が救主を侮りて戰を宣言せしむるなど恐るべきの甚しきに非ずや」。いはく、否、われらに罪ありと推定するも其罪は我儕の力を制壓するには非ず、人既におのれを十字架に釘くれば復たおのれを十字架に釘けしめし所の者に制壓せられざるなり。「罪われらが心を奪ふ」といふも謂はれなきことなり。罪は破られぬ。其嘗て司配せし所に猶殘存するは事實なれど、しかも鎖に繫がれて殘存せるなり。故に罪は或る意義に於て、「戰を宣言す」、されど其罪は愈よ益す弱くな

り、而して信徒は愈よ益す強くなり、連戰連勝して、遂には凱歌を揚ぐるに至るなり。

論者曰く「予は未だ之を首肯し得ざるなり、罪を衷に有する者は罪の奴隷たるなり。故に卿の説に從へば人猶罪の奴隷たるに義と稱せらるとするなり。卿にして若し人こゝろに驕傲忿怒或は不信の猶存するに義と稱せられ得とせば、加之凡て義と稱せられし所の諸の人に此等惡德の猶現存す（よしや一時にもせよと）斷言せば、我儕のあひだに多くの驕傲なる、忿怒せる、はた不信の信徒あるも異しとするに足らざるなり」と。

予は義と稱せられし人は罪の奴隷なりとはせざるなり、されど予は凡て義と稱せられし人に罪の現存す（よしや一時にもせよ）と爲すものなり。

「然れども罪にして若し信徒に現存せば其人は罪の人なり、たとへば彼れ衷に驕傲あらば則ち彼は傲らん、私意あらば則ち放恣ならん、若し不信あらば則ち彼は不

信者なり、此に由て之を推せば遂に信徒なきなり。彼は不信者の何んの異る所ありや、未新の人と何の逕へる所ありや」。吁、これ辭を以て意を害するものなり。若し彼れ信徒の衷に罪あり、驕傲私意ありといへば則ち罪あり驕傲私意あるの意なり。誰か之を否まんや。此意を以てすれば彼は傲り、放恣なるなり。然れども彼れ信徒は不信者の如く、即ち驕傲と私意とに左右せられて其傲り放恣なる如くには傲らず又放恣ならざるなり。不信者は罪に從へり、されど信徒は之に從はず。肉は信徒にも不信者にも存す、然れども不信者は其「肉に從て行ひ」、信徒は「靈に從て行ふ」なり。

「然れども いかで信徒に不信のあるべき」。曰く、此不信なる語に二の意義あり。無信と少信となり、信仰の絶無と其薄弱となり、前義の不信は信徒に之れなし、後義の不信は諸の赤子皆然り、赤子の信仰は常に疑惑と恐懼とを混せり、即ち不信なり。主宣く「信仰うすき者よ何ぞ懼るゝや」。又宣く「信仰うすき者よ何ぞ疑

ふや」。以て信徒に不信あるを見るべし、信仰うすければ多くの不信あるなり。

「然れども此教理、罪の信徒に現存すること、并に人は其心に罪の存するも猶神にめぐまるゝことを得べしとのことは明に人をして罪のうちに在るを奬勵するの傾向あり」。然らず、請ふ先づ命題を正當に解せよ、さらば此の如き結果は生せざるなり。夫れ人はたとひ心に罪を感ずると雖も猶神の恩惠のうちに在ることを得、然れども若し其罪に從ふ時は則ち恩惠のうちに在ることを得ず。罪念は神の恩惠を失はず、唯罪行之を失ふのみ。たとひ卿の肉「靈に逆ふ」とも、卿は猶神の子たるべし、されども「肉に從て行はゞ」則ち悪魔の子なり。故に此教理は決して罪に從ふことを奬勵せず、却て全力を盡して之に反抗せしむるもの也。

第五。之を要するに各人には、たとひ義と稱せられしものにても、パウロの謂ゆる肉と靈、即ち性來と恩惠との相反する二の法あり。故に聖められたる基督にをる赤子にても猶一部の聖められに過ぎざるなり。されば彼等の信仰の量に從ひて彼等

は其精神的の程度を有す、然れども又或る程度に於て同じく肉に屬けるものなり。是を以て信徒は斷じて世と悪魔とに警慎するが如く、亦肉に對しても警慎することを要す。是れ神の子等の常に經驗する所なり。彼等はこの信證を自ら感ずると同時に神の意志に全然相反する意志の己に存するを感ず。彼等はおのれの神に居ることを知る、而して猶神より乖離せんとし、悪に傾き、善に違はんとしつゝある心を見る。之に反する論者の説の如きは全く新奇のものにして、基督の教會瀕りてよりシンゼンドルフ侯の時に至るまで未だ嘗て聞知せざる所のものにして、其結果は最も懼るべきことに至るものとなす。此説や我儕をして性來の邪悪に戒慎するを廢せしむるものなり、デリラ猶わが側に伏せるに彼れ既に去れり我儕に告げて以て自ら守る所なからしむるものなり(士)。此説や弱き信徒の楯を毀ち、其信仰を奪ひ、而して彼等をして世と肉と悪魔との攻撃に委せしむるものなり。

是故に我儕をして「一たび聖徒に傳へられ」而して聖徒によりて又之を文書に著は

し以て後世に傳へたる――即ちたとひ我儕は新にせられ、洗はれ、潔められ、又聖とせられて、爾時眞に基督を信ずと雖も、猶我儕は全く新にあらず洗はれず、潔められずして、肉や性來の邪惡や猶現存して、（たとひ其力を逞うすることなくとも、）靈に反抗して戰ひつゝあり。されば我儕をして益す勉め勵みて「信仰の善戰を戰」はしめよ。されば我儕をして益す熱中して內なる敵に對して「目を醒し且つ祈」らしめよ。愈よ益す戒愼し、「神の武具を以て裝ひ」、たとひ「血肉」と又「政また權威また天の處に在る惡の靈と戰ふ」とも「惡しき日に遇ひて凡の事を成就して立ち」得せしめよ。

信徒の悔改

爾曹悔改めて福音を信せよ

馬可傳一〇十五

（一）夫れ悔改と信仰とは宗教唯一の門戸にして、我儕が基督教徒として天國の行を啓くの初めに於てのみ獨り必ず要する所のものなりとは天下一般に信ぜらるゝ所なり。且つ此事や大使徒の言によりて益す確め堅うせられたる者の如し、使徒パウロ嘗てヘブルの基督信徒を督勵して「完全に進」ましめんとするに當つて、之に敎ふるに「基督の敎の始を離れ」即ち「死行の悔改め神に屬ける信仰」に再び基を置かざるべきことを以てせり。蓋しパウロの意へブル信徒をして此時比較的に斯悔改と斯信仰とを棄て、「神耶蘇基督に由りて上へ召して賜ふ所の褒美を得んとて進」ましめんが爲めに彼等が思想を此一點に注瀉せしめんと欲せしならん。

（二）然り、悔改と信仰とは殊に基督敎徒たるの初めに於て必要なることは更に

疑を容るべからざる所の者なりとす。げに斯悔改や我儕が深く自ら罪戻に染み、過悪多く、無力なることを識認し、且つ主が「我らのうちに」在りと宣ひし神の王國を享受するに先つて必ず當に爲さゞる可からざるものにして、而して謂ゆる信仰とは我儕が由つて以て其王國即ち「義と和と聖靈とに由れる歡樂」の滿てる天國を享受する所の者なり。

（三）則ち是れ宗教唯一の門戸なりと雖も、既に我儕が福音を信じたるのち即ち信徒たる者の進德の行路に於て又必ず要する所の悔改と信仰と無くんばあらざるなり（盡く同じ意義にはあらざれど亦全然異なるにてもなき此語の他の意義を取りて）、然らずんば我儕は決して「我儕の前に置かれたる馳場を趨る」こと能はざるなり。されば斯の悔改と信仰と初めには神の國に入るに必ず由らざる可からざる門戸たりしが如く、今や恩惠のうちに絶えず居り、間なく進まんとするに又必ず無かるべからざる所の者たり。

然らば則ち我儕既に義と稱せられしのち何の故に又悔い且つ信ぜざるべからざるか。是れ切要なる疑問にして殊に意を注ぎて研究すべき所の者なりとす。

第一。先づ第一に何が故に我儕は悔改めざる可からざるか。謂ゆる悔改とは內部の變化なり。罪惡より聖淨に移る心の變化なりとは世間普通の意義なり。然れども予が今此に用ひていふ所は全く之に異れり。予はわれら自ら罪人――たとひ我儕今は神の子たることを知れども猶過惡あり無力なる罪人――たるを識るの自識の一として之をいふなり。

夫れ我儕が罪人なるを識りし時に、始めて耶蘇の血のうちに贖罪を發見せし時に、神の愛先づ我が心に洽く漑がれ、其王國こゝに基を置きし時に當りて、我儕は我儕が今ははや元の罪人にあらず、我儕が罪は啻に掩はれしのみならず又既に毀滅せられたりと思ふは人々皆然りと爲す。是の時に當つて我儕が心中復た一の惡念の起らざるが故に直ちに斷じて以て罪なるものなしと爲す是れ庸衆に在て然るのみに

あらず、高明の士と雖も啻に悔改の當時さか思へるのみならず爾今爾後またしかあるべしと思ひ、其義と稱せられし時は卽ち全く聖とせられしなりと自ら臆斷して、聖經の示めす所、理性經驗の敎ふる所あるにも關せず、直ちに擧げて以て一般の公則に擬す。此種の人は其義とせられし時に其の凡ての罪は毀滅せられ、而して信徒の心中復た一の罪なるものなく、且つ其時より全く潔き者なりと其誠心より信じ、且つ熱心に主張する所の者なり。殊に知らず、われらはたとひ「信ずる者は神に由りて生れたる者」、また「神に由りて生れたる者は罪を犯」さいるべきことを容易に識認すと雖も其人心中毫も罪を感せずといふことを許るすこと能はず、蓋し罪に制せられざるべし、然れども罪は依然存するなり。而して斯の我儕が心中に存する罪の識認は予が今こゝに論せんと欲する悔改の一大部分たりと爲す。

蓋し我が凡ての罪悉く離れ去れりと思ふ所の人にして、其後程もなくして其心には猶驕傲の存するあるを感せざるは幾んど之れ無かるべし。此人や深く心に左の

二事を識認せり、卽ちやゝもすれば思を過ごすことゝ其神より稟けたる或者につき て世の稱譽を神に歸せずして己に歸し、而して己れ自ら之を爲して、未だ嘗て神より稟けざる者の如くに自ら高くすることこれなり。然れども其人は猶おのれ神の恩寵のうちに在ることを知れり。其人は其「信仰を投棄る」こと能はず、また投棄るべからざるなり。何となれば聖靈なは其人の神の子たることを其靈に證明すればなり。

且又其悔改の後間もなく其心には神の聖意に全然反する所の私意あることを感せざる所の者は幾んど稀れなり。抑も斯意志なるものは人として知力を有する限りは必ず有すべき所の者にして、人性の特素なりとす。我主の如きも亦人として斯意志を有し玉ひき、この意思なかりせば主は人にはあらざりしなり。然れども主の人としての意志は常に必ず其父なる神の聖旨に服し從ひたりき。其の時と處との如何なるを問はず、其大苦悶の際に於けるも猶「我意に非ずたゞ聖旨のまゝに成したま

へ」と宣ひぬ。是れ主に在ては然り、然れども眞正の信徒なりと雖も常にかく己に克つことは尤も難き所となす。かれ屢ば其意志の多少神の聖旨に反して激昂することを知れり。かれは事の神の旨に適はざれども、おのが天性喜ぶ所の者なるが故に之を意志し、また我が爲めに神の旨と知りつゝも深く自ら之を好まざる者なるが故に之を嫌忌す。それ彼は堅く信仰を保ち、全力を振つてこの私意と鬪へり、然れども是は則ち私意の實に其心中に存し、而して彼自らも能く之を知れるを示めせるに非ずや。

抑も此私意幷に驕傲は偶像崇拜の一種にして、共に神を愛することゝは全く反するものなり。而して世を愛することも亦全然神を愛することゝ相反す。然れども是れ實に眞の信徒と雖も其多少早晩の差違こそあれ。世を愛するの心起らざることなしとせず。然り而して彼等が始めて悔改め「死を出でゝ生に入りし」時に當りては其心には神の外何をも願ひ望まず、「我が心はなんぢの名となんぢの紀念の名とを慕ふなり」、「汝のほかに我たれをか天にもたん地にはなんぢの他にわが慕ふものなし」と斷言するに憚らざりき。然れども是れ久しきにわたること能はず。時の經過と共に再び彼等は、たとひ一時のことにせよ、「肉体の慾」「眼目の慾」若くは「勢より起る驕傲」を感ずべし。加之彼等若し彼等絶えず目を覺し且祈らざる時は其肉に屬ける諸慾再び生じ焔立て、之に反抗すべき力一も彼等に存せず、遂に全く墮罪するに至らん。而して其愛情の鍾ひべき所を誤り、「造物主よりも受造物を愛し」其子其父母其夫其妻、或は「身命を共にする友」を愛する强固なる傾向を生ずるに至るべく、又地に屬ける物と其樂みとを願ふ思ひ其遭遇する百千の場合に於て生ずべし。而してかゝる物欲の欺蔽と共に神を忘れ、其幸福を求めず、遂には「神よりも佚樂を愛する」者となるべし。

若し彼等にして時々刻々に自ら省み誡ひることなくんば彼等は再び眼目の慾に誘はれ、或は大或は美或は奇異なる事物を描想ひて其想像力を樂む如きことなからん

や。此愚種々の像と術とを以て日夜に來て我が靈を攻む。たとへば衣服調度の類、若くは毫も永久なるべき靈魂の饑渴を醫すことなき所の瑣事微物の如きも猶且つ我が靈を侵して安きを得ざらしむ。然れども我儕が既に「來世の權能を嘗ひてのち」にても用ふれば滅くべき此等の賤しむべき物の慾に再び沈淪するは寔に免れ難き所なりとす。又基督を信ずる所の人にして目の慾、好奇心の唯一部分にても之に克ち服へ、絶えず之を足下に蹂躙し、若くは唯其新奇の故なりとして何物をも望み欲せざることは尤も難き所なりとす。

且又神の子となりし者にても猶全く勢よりおこる驕傲に勝ち得ることは難しとする所なり。使徒ヨハネは此驕傲を以て世の謂所名譽心と同一と爲すものゝ如し。即ち「人の榮」を欲し、而して之を得て悅び、又稱讃を望み愛することにして、而して此志望は常に誹毀の恐懼と相伴ふ所の者たり。殆ども之に同じき者は無用の慚愧なりとす、即ち我が當に譽とすべきことを却て愧づることなり。而して此慚愧は人の

靈魂に幾多の圈套を來たす所の人を恐懼することゝ相伴はざるは甚だ稀れなり。然らば則ち信仰强き所の者と雖も此等の惡しき性嚮の幾分を自己の衷に見ざる所の者はほとんど之れ無かるべし。是故にかゝる篤信の者と雖も全く世に勝ち得たる者に非ず、何となれば惡の根猶其心に存すればなり。

抑又我儕は他の性嚮の神を愛することに反するが如く又我が隣人を愛することに反するものあるを感ずることなきか。我が隣人を愛するとは「人の惡を念はざる」ことなり。我儕は惡念のたとひ一たりとも衷に發見することなきや。我儕は心のうち決して一の娼嫉、妄疑、若くは理由なき猜忌の念を發見することなきや。若し此等の念想なき心正しき者あらば其人まづ其隣人を石にて擊つべし。誰か時として我心に兄弟の愛に反せりと自ら知れる他の性嚮若くは心裡の傾向動機を感せざる者ありや。たとひ害心憎惡殘忍は存することなしとも娼嫉の念なき者ありや。特におのれの欲して得ざる所のもの、其若くは實若くは空なるに拘らず既に之を得て悅ぶ所

の人に對して娟嫉の念生せざる者あらや。我儕は衷に人より侵され又は辱められし時忿怒の情の聊かなりとも發見することなきや、況んや我儕が殊に之を愛し又は其人の爲めに尤も忠信を盡し〻に却て之に侵され辱められし時心平なることを得るや。我儕に不當の害を加へ、我儕が恩義を蔑如したる時我儕こゝろに報讐の念激發することなきや。善を以て悪に勝つことなく、悪を以て悪に報いるの思念なきや。是等は實に隣を愛するに反する傾向の如何に多く我儕が心中に存しをるやを示めす所の者なりとす。

動もすれば輙ち「すべての悪の根」なる財を慕ふことにせよ、若くは有るが上に猶有らんことと即ち財産の増殖を欲ふの念にせよ凡そ貪慾なる者は其種類と多少とに拘らず、神を愛することに反する如く、亦隣を愛することに反するは明なり。神の眞の子と稱せらるべき者にても全く此二つより離れて潔き者は甚だ少し。我儕が偉人とあがめらるゝルチン、ルウテルは常に其生れしより以來貪慾なるもの一も其衷に在

ることなし(啻に其吹信したるのちに於てのみならず)、と言ひにき。若し果して然らば予は彼を以て婦より生れて貧慾を禀け來らざりし唯一の(神にして人なりし主を除きて)人と斷言するに躊躇せざるなり。否、長き年月此世に在りて幾度か愛財の念殊に富(財産の増殖)を欲する心の多少起らざる者は決して一人も神により生れざるべきことを予は信ずるなり。是故に我儕は此貪慾なる者は驕傲私意忿怒等と共に義とせられたる人の心に於けるも猶且つ存するものたるは動すべからざる眞理たるを斷定し得るなり。

使徒パウロは其羅馬書第七章の末段に於て今「律法の下に」在りて、深く己の罪を認めたる者の感想を述べたりしも世間幾多の眞面目なる人士をして之を解して此は「耶蘇基督の賜に頼りて功なくして義とせられ」、今「恩惠の下に」在る所の者の觀念を描出したる者なりと爲さしむるは彼等が心中經驗の然らしむる所となす。是れ固より誤解なり、然れども其最も明確なることは彼等は其既に義と稱せられたる

のちに於けるも其心には猶多少の肉に屬けるものと、（パウロはコリントの信徒にさへ「爾曹肉に屬ける者なれば也」といへり）やゝもすれば「活ける神より離れ」んとする背教的の心と、驕傲私意忿怒復讐の念、世を愛すること及び其他凡ての惡事への傾向と、一瞬時たりとも省察を怠れば忽ち生じ來る殘忍酷薄の根と、又實に我儕若し神より明なる光を受けざれば到底自ら知ることを能はざる此等の諸惡の存することを自ら認めをればこそかゝる誤解を來たせしなれ。然らば則ち彼等が心中に存する凡て此罪の認認は既に義と稱せられたる所の彼等に屬する悔改なり。

且又我儕は罪の我心に存するが故に從て我が言と行と亦其當を失しをることを認識せざるを得ず。實に我儕が言語のおほくは罪と混ずといはんよりも寧ろ全く罪なりといふを至當と爲す。是れ明にすべて皆他を中傷する所の談話なり、凡て皆兄弟の愛より生じ來らざるものなり、凡て皆我が金科玉條たる「人に施られんと思ふことは亦人にも其如く施よ」の語に合はざるものなり、吁我儕重ねて恐れざる

べけんや。また諸〳〵の誹謗、讒言、惡言即ち坐に在らざる人の非行を招げて止まざるも亦此種の罪に滿てることばに屬す何となれば人誰も他人より我が過失をおのれ其席に居らざる時しば〳〵いはるゝを欲せざればなり。蓋し信徒中に於ても此につきて全く有罪ならず、「死者と不在者とにつきては其の善を稱するの外何ごとをも言ふ勿れ」てふ古の格言を堅く守る者は甚だ少しと爲す。よしやたとひ此中傷的談話を爲さずとするも彼等は能く虛しき談話を爲さゞるか。嗚呼これ亦明に罪にして、「神の聖靈を憂へしむ」るのみならず、主の爲め正に是れ主が凡て「人のいふ所の虛言は審判の日に之を訴へざるを得じ」と宣言したまひし所のものたり。

然れども彼等は斷じて「目を醒し且つ祈り」て「誘惑に入らぬやう」なしをり、斷じて其口に門守を置き、唇の戸をまもれりと假定せよ、又彼等は其凡ての「言つねに恩を用ひ且つ鹽を以て調和られ、聽者をして益あらしむる」に注意實習しつゝありと假定せよ、而して彼等果して其平素の欽省あるにも關せず其言語會話は日々に無

益の談論に陷らざることなきか。抑も又彼等が神のことの爲めに語らんとする時果して其ことば悉く純精にして一毫の不聖淨を含むことなきか。爾時の目的中に果して一の惡趣を孕胎しをらざるか。彼等は唯々神を喜ばせ奉らんとして語り、果して內に一毫の自ら心を喜ばす所の分子なきか。彼等が爲す所全く神の聖旨を成さんとするに在りて、果して之と共に我心の從をも成さんとする意なきか。若くは彼等明なる目を以て事に當りしならば彼等は果して「耶蘇を見つゝ」進み、其隣人と語るの際常に耶蘇と語りつゝあるが如きか。彼等が罪を讓むるの時果して罪を犯しゝ者に對して憤激不親切の情なきか。彼等が愚蒙を誨ふるに當りて果して一の驕傲自慢なきか。彼等のなやめる者を慰め、相互に愛を奬め善を責むる際果して其中心一毫の自褒ことなきか。其心中「汝のいふところは善し」と謂はざるか。若しくは他人にかく思はれんと欲し、而してかく思はれし時に其人を尊ばんとする虛望はなきか。以上のうち其いづれか或は其すべてに於て、如何に多くの罪は信徒と雖

も其尤も善良なる談話中に混入せざるか。若し能くこれを認めなば是れ義と稱せられたる所の彼等信徒の當に爲すべき悔改の一にあらずや。

而して彼等の良心にして全く覺醒しをらば彼等は又その行爲中に罪の混入せるもの甚だ多きを知るべし。否、たとひ彼等が爲す所の事世の決して非とし尤むる所のものに非ざるも、若し神のことばを以て之を判せば決して稱揚すること能はず、却て容赦せらるべきものに非らざる行爲の數多あることなきか。彼等が神の榮光を毀損すべしと自ら知れる數多の行爲なきか。又彼等が神の榮光の爲めにせば初めより思ひだにせず、若くは眼を神に及ぼしつゝ行はざりしものなきか。又たとへ眼を神に及ぼしつゝ行ひし者ありとするも一瞬時も眼を神より離さず、凝眸しつゝ行ひし多くの行爲ありや。若くはかゝる行爲のうち少くとも神の聖旨を成さんとすると同量に其私意を成さんとし、若くは神を喜ばせ奉らんとよりも聊かなりとも多く其心を喜ばせんとして爲しゝ行爲はなきか——而して彼等が其隣人に善を爲さんとす

るに當りて心に各種の惡性嚮を感ずることなきか。然らば則ち謂ゆる彼等の善行なるものは決して眞の善行には非ず、かくの如く邪辟の混和物を以て汚がれをれり。而して此の如きは實に彼等が仁惠の行なりとす。然らば其敬虔の業も亦知るべきのみ。彼等が其靈魂救拯のことばを聽けるの際屢ば心に恐懼を生じ、我が魂の救拯として之を喜びはせで却て責罰の免れがたきを感じて慄然として戰くことなきか。又同じく其公禱の時にも私禱の時にも神に祈禱を獻ぐるに當りてしば〳〵此邪辟の混和するものあることなきか。啻に之のみならず彼等が最も嚴肅なる禮拜、主の晩餐の卓に連るの時に當りて其心中に生ずる所の思想は果して如何。其心時として地の盡所に飛び去ることなきか、時としては又自ら慙ぢて凡て彼等の祭は神に惡まるべきものたらんとの恐懼の念こゝろに滿つることなきか。是故に彼等は背嘗て其最惡の罪を愧ぢし如く今は又其最善の務を爲し得ざることを愧づるなるべし。

且又彼等が懈怠の罪のわれと我を責むるもの亦少小に非ざるべし。我らは使徒ヤコブが「人善を行ふことを知りて之を行はざるは罪なり」といひしを知れり。然れども彼等は從來其嚮敬に對し、未識のもの又兄弟に對して其肉体幷に靈魂の爲めに善を爲し得たりし多くの場合のありしにも拘はらず之を怠り爲さゞりしことなきか。又神に對する務を爲すに當りて懈怠の罪を犯しゝこと幾何ぞや。施捨を爲すことに於て神の聖言を聽くことに於て又公私の祈禱を爲すことに於て之を怠りしこと幾何ぞや。世に聖人と稱せられし大監督オッシャルと雖も猶且つ其神の働きをすべて畢へて今臨終といへる時に微に叫んで「主よ、わが懈怠の罪を宥るしたまへ」といひたりしにあらずや。

然れども是れ外部の懈怠なり、彼等豈に無數の內部の不完全を衷に發見せざらんや。而して其不完全は各種にわたれり。即ち彼等は神に對して當に有すべき愛と畏と信任とを有せざるなり。彼等は其隣人すべて人の子に施さゞる可からざる愛を有

せず、是れ猶可なり、其兄弟すべて神の子に――其遠く隔たれると近く相交れると
を問はず――爲さいるへからざる愛を有せざるなり。彼等は有せざる可からざる程
度に於て一片聖淨の性質を有せず。其各事各物につきて皆不完全なりとす。若し深
く之を覺り識らば彼等はディ、レンティーと共に「我は割棘の生茂れる地なり」と叫
び、若くはヨブの如く「われは賤しき者なり、我みづから恨み塵灰のなかにて悔る」
と呼ばざるべからざるなり。

彼等が罪過の識認は又神の子たる者の當に爲すべき悔改の一なりとす。然れど
も此は最も心して、且特殊の意義を以て理會せざる可からず。夫れ耶蘇基督に在り
て深く之を信じ其信仰の力によりて肉に從はで靈に從ひて行ふ者は罪せらるゝこと
なきは固より明なり。然れども彼等は其未だ基督を信せざりし以前よりも今は早
や神の嚴格なる義に堪ゆる能はざるなり。是れ實に前數條に述べたる諸罪惡につき
猶彼等が死に當することを明示するものなり。而して若し贖罪の血のなかりせば、

これは絶對に彼等を罪に致す所のものなるべし。是故に彼等は其たとひ贖罪の血に
よりて赦宥せらるべけれども猶刑罰に當しをれることを識認するなり。然れども こ
ゝに一方にも他方にも各極端ありて之を能く免るゝもの少し。或は其罰せられざる
に當に罰せらるべしと思ひ、或は當に赦るさるべしと考へつゝ此二極端のいつれか
一に觸着する所の者多しと爲す。然り眞理は其間に横はれり。之を直言せば彼等
は猶地獄の刑罰に當するの外なきなり。然れども彼等の爲めに「父の前に保惠師あ
る」が故に其當すべき所の者は彼等の上に落ち來らざるなり。實に義なる耶蘇基督
の生と死と中裁とは猶彼等と刑罰との間に入りて事なからしむ。

彼等が全然無力なるの識認は又此悔改の一たり。予これにつきて二つのことを
言はんと欲す。第一は彼等其未だ義と稱せられざりし以前よりも今は既におのれ自
らにては一の善想を起し、一の善念を描き、一の善言を語り、一の善行を爲し得ざ
ること、彼等おのれの力としひては種類も程度も兩ながら有せず、善を爲し惡に

抗するの力なく、世に勝ち惡魔を禦ぎ若くは己に克つ能はざるのみか此等に向ひて立つことさへ能はざること是なり。彼等は固より能く以上のことを爲し得べし、然れども是れ彼等自らの力を以てしてに非らず。彼等は凡て此等の諸敵に克つべき力を有てり、何となれば「罪既に彼等に主たらざるを」以てなり、然れども是れ其全体若くは一部分にせよ、其天性より去か爲し得しにはあらずして唯々神の賚物なり、又此賚物たるや多年を過ごす程の許多の貨物の如く一時に悉皆與へらるゝには非らずして日一日年一年に其需用に應じて神の賜ふ所の者なり。

此無力につきて予は第二に擧げんと欲する所は我儕が猶意識する所の罪過或は刑罰より自ら脱することの絶對に能はざること、去かのみならず我儕が有する凡ての恩惠を以てしては(我儕固有の自然力につきてはいはず)驕傲、私意、世を愛すること忿怒其他我儕一旦新生せしものと雖も日々の經驗より心裡に存せりと知れる所の凡て神より離るべき諸〻の性癖を改め遷し、若くは我儕が全力を盡して拂ひ除けんとするにも拘はらず深く我儕が言行に混入せる凡ての惡を除く能はざること是なり。猶之に加ふるに有害無益の談話を全く棄つること能はず、又懈怠の罪より免れ、若くは自ら認識せる無數の不完全殊に神と人とに對して愛を缺き義き性嚮の足らざることを補ひ完うすること能はざること是なり。

若し我がいふ所を以て非なりと爲し、若くは一旦義と稱せられし者は其心と言行とより此等の諸罪を除き得べしと信ずるなれば請ふ其人をして之を實驗せしめよ。若し又其既に受けし恩寵によりて能く其驕傲私意若くは其生來の諸罪惡を除去し得べしとせば請ふ之を試ましめよ。又其言其行を能く邪惡の混同より清め得べく、其有害無益の談話を斷じて爲さず、懈怠の罪なく、而して又自ら識れる無數の不完全を補全すべしとするなれば請ふ之を試ましめよ。請ふ其人をして一二の經驗を以て失望することなく數次反覆して之を試ましめよ。彼れ其試驗の度重なる程益す深く其全然無力なることを識認するに至るべし。

此故に神の子は、悉く、たとひ各人各色の差違はありとも、猶概して揆を一にせることは爭ふべからざる眞理なりとす。たとひ我儕は「靈に由りて身躰の行爲を滅さば生くべし」、內外の罪に兩ながら抵抗し克服し得べしとするも、たとひ又日を重ねて我が諸敵を弱め得べしとするも、然れども我儕は斷じて此等强敵たる諸罪惡を驅逐すること能はざるなり。又義と稱せられし時與へられたる凡ての恩惠によりて我儕は諸惡の根を滅絕する能はざるなり。たとひ我儕は心して目を醒し且つ祈るとも我儕が心と手とを全く淸むること能はざるなり。殊に主が再び我儕の心に告げて「潔くなれ」と宣ふに非ざれば我儕は此諸罪惡より潔からざるは斷々乎として明白なり。獨り主が此ことばによりて我が一種の癩病は潔くなり、惡の根、罪の心は打碎かれ、生來の罪惡は復た存せざるに至るべし。然るに若しかくの如き再度の變化なく、義と稱せられしのち卽時の救濟なく、神の漸進のわざ(信徒の心裡に此の漸進のみわざあることは何人も否定せず)の外何物もなかりせば則ち我儕は甘んじて死

に至る迄罪の滿てるなかに止り居らざる可からず、又果して然らば我儕は死に至るまで罪犯しつゝ而して絕えず刑罰の應報に服しつゝあらざる可からず。凡て此罪の我儕の心衷に存し、言と行とを汚染しつゝある間は此有罪と此刑罰の應報とは我儕より離れ去ること斷じて能はざる所、否、思と言と行とに於て絕えず此罪と此罰とを增し加へつゝあるなり。

第二。是の故に我儕は既に義と稱せられたる後に於けるも猶當に悔改むべき者なり。我儕かく悔改めざる以上は復た一歩も前に進むこと能はず。何となれば我儕が此心裡の疾病を自ら感覺するに至る迄は他に決して治療の道なければなり。果して我儕かく悔改めんか、而して後ち我儕は「福音を信せよ」と招呼せられたるなり。而して此「福音を信せよ」なる詞も亦初め我らが義と稱せられん爲めに信せし時解釋せし意義とは全然別違の思想を以て之を視ざる可からず。然らば則ち如何。神が萬民の爲めに備へ玉ひし大なる救拯の喜ばしき音を信ずるなり。「神の榮の光輝その

質の眞像」なる主基督は「己に賴りて神に就る者を全く救ひ得る」ものたるを信ずるなり。彼は汝等を救ひて汝等が心に猶殘存せる凡ての罪と言行とに混入せる凡ての罪と懈怠の罪とより脫せしめ、又汝等が缺ける凡ての德を完うせしむることを得べし。是れ實に人の能くし得ざる所なれども、神にして人たる者に於ては凡ての事爲し能はざる所なきに非ず。何となれば「天のうち地の上の凡ての權」を有したまへる基督にして世間何事か能く爲し難しとする者のあるべき。たとひ主に此權能ありて我儕を全うし得べしとするも主若し我儕に之を約し玉はざりしならば我儕は之を以て我らが信仰の强固なる基礎とは爲す能はざるなり。然れども主は既に之を約したまひき。主は一度ならず二度ならず最も强き詞を以て之を我儕に約したまへり、主は舊約に於ても新約に於ても此等の「至大なる貴き約束」を我儕に與へ玉へり。我儕は之を律法即ち神の最も古き諭の中に覩る、いはく「汝の神エホバ汝の心と汝の子等の心に割禮をほどこし汝をして心を盡し精神を盡して汝の神エホバを愛せしむ」と。

詩篇にいはく「エホバはイスラエル（神のイスラエル）をもろ〳〵の邪曲よりあがなひたまはむ」。豫言者も亦曰く「われ淸き水を汝等に灑ぎて汝等を淸くならしめ汝等の諸〳〵の汚穢と諸〳〵の偶像を除きて汝等を淸むべし、吾靈を汝らが衷に置き汝らをして吾律を守りて之を行はしむべし、われ汝等を救ひてその諸〳〵の汚穢を離れしめん」と。新約に於けるも亦此の如し、いはく「主なるイスラエルの神は讚美べき哉これ其民を眷顧て贖を爲し我儕の爲めに拯救の角を挺たまへばなり――これ我儕の先祖アブラハムに立てし所の誓にして我儕を敵の手より救ひ我儕の生涯を聖と義とに於て懼なく主に事へしめんとてなり」と。

是故に卿等は基督は曾に卿等を救ひて肉と靈との諸〳〵の不潔を除き、又「その諸〳〵の汚穢を離れしめ」得るのみならずして、且つ好みてかく爲さんとしつゝあり玉ふことを信ずべき理を得たり、是れ實に卿等が望み求むる所の者なり、又卿等が今日殊に要する所の、即ち我が靈を愛する大醫師は自ら進んで我を濕くせんと望みつゝあ

たまふとの信仰なり。然れども彼は明日之を爲さんと望みたまふか、若くは今日之を爲さんと欲しゐたまふか。請ふ彼をして自ら答へしめよ。「若し今日」我が「聲を聞かば爾曹の心を剛愎にする勿れ」。故に卿等にして若し之を明日に讓らば是れ卿等は卿等の心を剛愎にするなり、卿等は彼の聲を聞くを否むなり。されば彼は今日卿等を救はんと欲しつゝゐ玉ふことを信せよ。彼は實に今卿等を救はんと欲しつゝゐたまへり。「今は恩惠の時なり」。彼今宣はく「潔なれ」と。唯信せよ、卿等は直に「信ずる者に於て爲しあたはざることなき」ことを識るに至らん。

卿は須らく卿を愛して、爲めに其命を棄て、木に懸りて其身に卿が凡ての罪を任ひ、絶えず流るゝ其血を以て凡ての刑罰より卿を救ひし所の彼を信じて間斷あるべからず。此は我儕が義と稱せられし狀態に間斷なく在ることなり。而して我儕が「信仰より信仰に」進みし時、又我儕が衷に匿れたる罪より潔められ、凡ての汚穢より救はるべき信仰を有する時に至れば我儕は又嚮に感じたりし凡ての有罪、刑罰の

應果より救はるべし。故に我儕は啻に「主よ われは一時一刻も爾が死の功德を要す」と曰ふのみならずして。篤き自信を以て又「主よ われは一時一刻の爾が死の功德を有せざるはなし」と斷言するを得るなり。何となれば彼が生死及仲裁は悉く我儕が爲めにして時々刻々新なりとの信仰によりて我儕は悉く潔められて一點の汚穢の存するなく、啻に今や罪の審判の我儕が爲めには一も存するとなきのみならず、もと有りし如き刑罰の應果も一として在る有ることなく、主は我らが心も言行も悉く潔めたまへり。

此同じ信仰によりて我儕は基督の權能時々刻々我らが衷に宿りつゝあることを覺り、此權能の衷に宿れる一事によりて始めて我儕の我儕たる所以を知り、また始めて精神的生況に持續し得べく、而して若し此權能衷に無き時は我らたとひ現時は聖淨たりとも忽ち惡魔たるべし。然れども我儕にして基督に我が信仰を繫ぐ間は我儕は「救の井より水を汲む」なり。我儕は信仰によりて我が心のうちに宿り、又神の右

に在りて我が爲めに取りなし玉ふ我儕が愛する者即ち我が衷に在りて榮光の希望なる基督に倚りつゝ基督の目に罄ばしき所のことを思ひ、言ひ、又行ひ得る助を彼より受く。斯くして彼は彼を信ずる所の者をして岐路に迷はしめず、其間斷なき助を以て彼等を進め、凡て彼等の企畫、談話、及び行爲をして彼に於て始め、彼に於て牛ばし、彼に於て終はらしむ。斯くして彼は其聖靈を注ぎて彼等の思想を潔くし、以て彼等が全く彼を愛し、彼の聖き名を高くし大にするに足れる者たらしむ。

抑も悔改と信仰とは神の子等に在りては互に對立して其趣を異にする者なり。即ち悔改によりては我儕は罪の我らが衷に存し、わが言行に混入せることを感ずれども、信仰によりては我が衷を潔め、我が手を潔むる所の神の力を基督に由りて受くることを得べし。悔改によりて我儕は猶我が凡ての性癖と言行とは刑罰に當すべきことを感ずれども、信仰によりては我が保憑師は父に對して絶ゆず我が爲めに辯護し、之が爲めに絶ゆず凡ての審判と刑罰とを我儕より排去されつゝあることを

知るなり。悔改によりて我儕はわがうちに一の助たるべきものゝなしとの深き識認を有すれども、信仰によりては啻に矜恤を受くるのみならず、いつにても「機に合ふ助となる恩惠を受く」。悔改は他の助としては其可能性を凡て皆否拒すれども、信仰は天地の全權を有し玉へる基督より機に合ふて凡ての助を承認す。悔改は曰くわれ若し彼を離るゝ時は何事をも爲し能はずと、之に反して信仰は曰くわれは我に力を予へる基督に因りて諸〻の事を爲し得るなりと。實に基督に因りて我は我が靈魂の凡ての敵に啻に勝ち得るのみならず、且つ之を排斥し得べし。彼に因りてわれは能く「心を盡し意を盡し精神を盡し力を盡して我が神エホバを愛す」ることを得、猶且つ「我儕の生涯を聖と義とに於て懼なく主に事」ふることを得るなり。

第三。上來論述したりし所によりて我儕義と稱せられし時全く聖められ及び我儕の心は其時凡ての罪より洗はるゝとの説の誤謬なることを容易に知るを得べし。我儕が嘗に論せし如く此義と稱せられし時外より罪の最早我儕に主たることなく、

又之と同時に内なる罪の勢力は破れて我儕は復た之に從ひ若くは之に導かれざることはげに然るなり、然れども其謂ゆる哀に在る罪は爾時全く破碎せられ、驕傲自私忿怒、世を愛するの念等の根爾時掘除せられ、又肉に屬ける心意、やゝもすれば背教に傾く心情の全く斷絶することは斷じて無き所なりとす。たとひ此等諸惡の根全く消滅すと推說せんか、是れ或人の思ふ如く決して無罪無害の誤認に非ず。否、大なる損害を來す者なり、是れ全く進歩の途を杜絶する者なり、「康强なる者は醫者の助を需めず唯病ある者之を需む」とは實に此理を明にしたる者に非ずや。故に若し我儕にして爾時既に全うせられたりと思ひなば豈に進んで一層の治療を求むるの心起らんや。此の推說に安んじて、即時にせよ次第にせよ、更に遠く罪より救はれんと望むは亦妄なりと謂ふべし。

之に反して我儕は猶未だ全からず、我が心情は悉く清からず、猶「神に乖る」所の「肉に屬ける心」我儕が衷に存し、罪の全體たとひ實に弱められしにもせよ猶未だ

破碎せられずして我儕が心裡に存することの深き識認は猶一層の變化の絶對的必要を擧示して毫末の疑を容れざるなり。我儕は固より義と稱せられたる其時に於て新生し、其瞬間に內部の變化、即ち「幽暗より出でゝ其異光に入り」、禽獸惡魔の像より神の像となり、世に屬き肉に屬き惡魔の心より基督耶蘇に在る所の心となれることを經驗せり。然れども爾時我儕は全く變化したりしや。我儕は全く我儕を創造せし神の像に返へりしや。決して然らず。我らは猶罪惡の深淵に沈淪しをれり、而して一旦之を識知するに及んでは我らは全き救拯の爲めに大なる能力をもてすくひを施す所の者に絶叫せざらんと欲するも能はざるなり。是故に我が心のいたく腐敗せることを識認せず、若くは少しく之を認め、又理論上より之を識る所の信徒には全き聖別は些も其注意を惹起さるゝものなり。彼等或は此全き聖別なるものは其死してのちか若くは生前おのれの知らざる或時に於てあるべきものなりと思ひて、此聖別のおのれに無きが爲めに大なる不安の心を有せず、又之に達せんとて饑る渴

くが如き切なるおもひなし。蓋し彼等は一層己を知る又予が上文論述せし如き感覺を以て悔改め、若くは神彼等が性來有せる罪の面より其被を褫ぎて其靈魂の眞相を示めしたまふまでは彼等は決して饑渴く如き切なる心を起す能はざるなり。彼等にして一旦此に達すれば始めて其重荷の堪へがたきを感じ、之が救濟の爲めに號呼するなるべし。此時に至り、或は此前にても彼等迫切の情に堪へずして叫びていはん。

「つみのくびきより　はなちてたゝせよ
われきよまらずば　こゝろはやすまじ」

我儕は此によりて第二に受け容れられしのち贖罪の血の眞價を識る爲め、また義と稱せられしのちも從前と同じく此血を要することを感ずる爲めにわれらが無功（謂ゆる有罪の或意義にて）の深き識認の極めて必要なることを知り得べし。此識認なくんば我儕は契約の血を尋常の物と爲すのみにして、凡て我が過去の諸罪拭ひ

去られしと思ひて今は少しも之を必要とせず。然り、若し我らが心情と言行とかくの如く潔らずして存する上は我らには一種の有罪ありて時々刻々我儕と交渉し、其結果時々刻々我儕を新しき審判に付せしむ、然れども

「貴ときイエスは　あめにいまし
よゝわがため　とりなしたまふ
つきせぬめぐみの　ちしはによびとの
けがれをばきよむ」

悔改と信仰とは密着なる關係を有し、悔改あれば信仰は必ず之に從ふ

又第三に我儕は全く無力なること、神より受けし賛物の一をも自ら留め置くことの全く能はず、況んや我儕が心情言行に存せる邪惡につきて世より自ら救ふこと能はざる深き識認を得るによりて我儕に教ふるに基督を唯わが祭司と爲すのみならず又我が王として之を戴き、之と共に在ることを以てす。これによりて我儕は「彼を

大にし」、「恩の榮を」凡て彼に歸し」、彼を唯一の基督、全き救主として、其首に冠冕を奉」せざるべからざるに至る。此等の超卓れたる詞も平生用ゐられて些少の意義を有せざれども一旦我儕が全くおのれより離れて彼に呑まれ、無一物無能無力のものとなり彼獨りすべての物の上に主たるの時に至て始めて其意義の眞は發揮せらるゝなり。而して後ち彼の大能の思惠は「彼に逆ひて建てたる所の諸の櫓を毀し」、諸の性慾「諸」の思想言行を「擒にして基督に服はしむ」。

一千七百六十七年四月廿四日ロンドンデリイに於て

大開延

此は千七百五十八年三月十日金曜日ベツドフオルド縣聖保羅教會に於て常訴裁判所判事サア、アドロード、クライブ君閣下臨席の該裁判所定期開廷に爲したる說教として該縣知事ヂリアム、コウル君其他の需に應じて出版したる者なり

羅馬書十四〇十

我儕は皆基督の臺前に立つべき者なり

（一）老弱男女貴賤都鄙曾に近隣の地よりのみならず、遠隔の境より、或は好んで、或は已むを得ず、偕に集り來りし大集會、直に引致せらるべく、而して逃避の途なき罪人、各職責に在りて、將に下らんとする命令を執行せんとて待てる官吏、及び我儕が最も尊敬せる國王の代表者、嗚呼此等の事相は今日此會場の森嚴をして堂々乎たる觀あらしむ。又各種の訴訟事件、中には最も重要なる者もあり、いづれも皆生若くは死――永遠てふ者の面を露出せしむる死に關する事件を聽き且つ判